茨城県教育財団文化財調査報告第184集

長峰城跡(長峰遺跡・長峰古墳群)

竜ヶ崎ニュータウン内
埋蔵文化財調査報告書22

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第184集

長峰城跡(長峰遺跡・長峰古墳群)

ながみねじょうあと　ながみねいせき　ながみねこふんぐん

竜ヶ崎ニュータウン内
埋蔵文化財調査報告書22

平成14年3月

都市基盤整備公団茨城地域支社
財団法人　茨城県教育財団

第１号虎口跡

第39号墳出土鏡

序

龍ヶ崎市北部の北竜台・龍ヶ岡地域では，竜ヶ崎ニュータウンの建設が，都市基盤整備公団茨城地域支社により進められております。ニュータウンの建設は，首都圏の急速な開発に伴って高まりをみせる，住宅需要に応えようとするものでありますが，一方その開発区域内に所在する数多くの貴重な埋蔵文化財の保護と竜ヶ崎ニュータウンの建設を，どのように調和させていくかが大きな課題でありました。

財団法人茨城県教育財団は，住宅・都市整備公団（平成11年10月より都市基盤整備公団茨城地域支社と改称）から開発地内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，昭和52年から発掘調査を実施してまいりました。このうち，平成８年４月から平成８年６月までの３か月間及び平成12年６月から平成13年３月までの10か月間に長峰城跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は，長峰城跡の調査の成果を収録したものでありますが，本書が，研究資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，ひいては教育・文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である都市基盤整備公団茨城地域支社から賜りました多大なる御協力に対し，心から御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，龍ヶ崎市教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位から御指導・御協力を賜りましたことに対し，衷心より感謝の意を表します。

平成14年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　齋　藤　佳　郎

例　　言

1　本書は，都市基盤整備公団茨城地域支社の委託により，財団法人茨城県教育財団が平成８年度及び平成12年度に発掘調査を実施した龍ヶ崎市大字長峰字竜ヶ井695番地ほかに所在する長峰城跡の発掘調査報告書である。

2　当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は，以下のとおりである。

調　査　平成８年４月１日～平成８年６月30日，平成12年６月１日～平成13年３月31日

整　理　平成13年４月１日～平成14年３月31日

3　当遺跡の平成８年度の発掘調査は，調査第一課長沼田文夫の指揮のもと，平成８年４月１日から平成８年６月30日まで調査第一課第１班長荻野谷悟，主任調査員仙波亨，同川又清明が担当した。平成12年度の発掘調査は，調査第一課長阿久津久の指揮のもと，平成12年４月から平成13年３月まで調査第一課第１班長海老澤稔，主任調査員川上直登，同小澤重雄，同青木仁昌，同大関武が担当し，そのほか調査員駒澤悦郎が平成12年６月，９月，主任調査員原信田正夫が平成12年12月，主任調査員高野節夫が平成13年１月に調査に加わった。

4　当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は，整理第二課長瓦吹堅の指揮のもと，主任調査員小澤重雄，同高野節夫が担当した。整理期間は，小澤が平成13年４月１日から平成14年３月31日，高野が平成13年４月１日から平成13年５月31日である。執筆は，第１章から第３章第２節を高野が，第３章第３節から第５節を小澤が担当した。

5　本書の作成にあたり，長峰第39号墳出土の鏡については小林三郎氏（明治大学教授），長峰城跡の構造と周辺の城郭については藤本正行氏（元龍ヶ崎市史特別調査執筆員）に御指導をいただいた。

6　鉄剣に付着していた繊維の分析は，京都工芸繊維大学大学院の遠藤利恵氏と吉田生物研究所（株）木吉理恵子氏に依頼して実施し，成果は付章として収録した。

7　発掘調査及び整理に際し，御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，X軸＝－9,040m，Y軸＝＋35,920mの交点を基準点とした。

大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ１，２，３…とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ1，2，3…0とし，名称は大調査区の名称を冠し，「Ａ1a1区」，「Ｂ２b2区」のように呼称した。

2　遺構番号は平成８年度調査からの継続である。

3　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡・方形竪穴状遺構－ＳＩ　土坑－ＳＫ　掘立柱建物跡－ＳＢ　古墳・塚－ＴＭ
郭－ＫＫ　腰曲輪－ＫＳ　堀・溝－ＳＤ　土壇状遺構－ＹＤ　土橋－ＤＢ
虎口－ＫＧ　炭窯跡－ＳＹ　道路跡－ＳＦ　その他－ＳＸ

土層　撹乱－Ｋ

3　遺構及び遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

焼土・赤彩・施釉　繊維土器断面　粘土・緑青　柱痕・煤

------ 硬化面

● 土器・土器片　○ 土製品　□ 石器・石製品・ガラス小玉　△ 金属製品・古銭

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』を使用した。

5　遺構・遺物実測図の掲載方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の１，各遺構の実測図は60分の１の縮尺で掲載することを原則とした。

(2) 遺物は，原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

6　「主軸方向」は，長軸（長径）方向とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E，N－10°－W）。

7　遺物番号については，土器，拓本のみ掲載の土器片，土製品，石製品，金属製品すべてを通し番号とし，挿図，観察表，写真図版に記した番号は同一とした。

8　遺物観察表における計測値はcm，重量はgである。なお，現存値は（　）で，推定値は［　］を付して示した。備考の欄は，残存率や写真図版番号等，その他必要と思われる事項を記した。

抄　　録

ふりがな	ながみねじょうあと（ながみねいせき・ながみねこふんぐん）
書名	長峰城跡（長峰遺跡・長峰古墳群）
副書名	竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書
巻次	22
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第184集
編著者名	小澤重雄　高野節夫
編集機関	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL 029（225）6587
発行期間	財団法人　茨城県教育財団
所在地	〒310－0911　茨城県水戸市見和１丁目356番地の２　TEL 029（225）6587
発行年月日	2002（平成14）年３月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長峰城跡 （長峰遺跡・長峰古墳群）	茨城県龍ヶ崎市大字長峰字竜ヶ井695番地ほか	08208 — 002	36度 55分 7秒	140度 14分 0秒	19970401～19970630	715㎡（平成８年度）	龍ヶ崎特定土地区画整理事業に伴う事前調査
					20010601～20020331	15,240㎡（平成12年度）	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
長峰城跡（長峰遺跡・長峰古墳群）	その他	旧石器			石核，石槍，剥片	中世の城跡と旧石器時代から古墳時代にかけての集落跡及び古墳などからなる複合遺跡である。 特に長峰城跡は，築城する際に台地を約１ｍ近く削平し，腰曲輪の平坦面を築くために相当量の土盛りを行うなど，大規模な土木工事を行っていることが明らかとなった。城内には古墳を残して防御施設として利用し，Ⅰ郭の古墳からは鏡（内行花文鏡）・鉄剣・ガラス小玉などが出土している。 主郭に相当するⅠ郭では，虎口跡から門と思われる礎石建物跡とそれに続く土橋跡，井戸跡などが確認されている。
	集落跡	縄文	竪穴住居跡	１軒	縄文土器（深鉢）石器（石鏃）	
			土坑	10基		
		弥生	竪穴住居跡	８軒	弥生土器（高坏・広口壺・壺・甕）	
			溝跡	１条		
		古墳	竪穴住居跡	９軒	土師器（高坏・器台・壺・甕・手捏土器）	
			溝跡	１条		
	古墳	古墳	古墳	１基	鉄剣，短剣，茎片，刀装具片，ガラス小玉，銅鏡（内行花文鏡）	
	城館跡	中世	郭	７か所	土師質土器（かわらけ・内耳鍋），陶器（古瀬戸），古銭，銅製品，石製品（石塔），磁器片，鉄器，鉄製品，人骨，獣骨	
			腰曲輪	２か所		
			堀	５条		
			土塁跡	３条		
			土橋跡	３か所		
			木橋跡	３か所		
			虎口跡	10か所		
			竪穴住居跡	９軒		
			礎石建物跡	１棟		
			掘立柱建物跡	５棟		
			道路跡	１条		
			橋跡	１か所		
			井戸跡	２か所		
			溝跡	25条		
			塚	４基		
			土壇状遺構	１基		
			切り欠き状遺構	１か所		
			墓壇	３基		
			地下式壙	２基		
			土坑	48基		
	その他	近世以降	墓壇	１基	陶磁器片，瓦，古銭	
			廟跡	３基		
		不明	竪穴住居跡	１軒		
			土坑	312基		

目　　次

序
例言
凡例
抄録
目次
第１章　調査経緯 ---------- 1
　第１節　調査に至る経緯 ---------- 1
　第２節　調査経過 ---------- 1
第２章　位置と環境 ---------- 3
　第１節　地理的環境 ---------- 3
　第２節　歴史的環境 ---------- 3
第３章　調査の成果 ---------- 9
　第１節　遺跡の概要 ---------- 9
　第２節　基本層序 ---------- 9
　第３節　長峰遺跡 ---------- 10
　　1　縄文時代の遺構と遺物 ---------- 10
　　（1）竪穴住居跡 ---------- 10
　　（2）土坑 ---------- 13
　　2　弥生時代の遺構と遺物 ---------- 15
　　（1）竪穴住居跡 ---------- 15
　　（2）溝跡 ---------- 32
　　3　古墳時代の遺構と遺物 ---------- 33
　　（1）竪穴住居跡 ---------- 34
　　（2）溝跡 ---------- 45
　　4　まとめ ---------- 47
　第４節　長峰古墳群 ---------- 49
　　1　第39号墳 ---------- 49
　　2　まとめ ---------- 65
　第５節　長峰城跡 ---------- 67
　　1　Ⅰ郭 ---------- 68
　　（1）竪穴住居跡 ---------- 72
　　（2）堀・土塁跡 ---------- 78
　　（3）虎口跡 ---------- 90
　　（4）土橋跡 ---------- 100
　　（5）土壇・塚 ---------- 104

（6）溝跡 ---------- 107
（7）井戸跡 ---------- 110
（8）その他 ---------- 120
（9）土坑 ---------- 120
2　Ⅱ郭 ---------- 133
（1）竪穴住居跡 ---------- 137
（2）掘立柱建物跡 ---------- 140
（3）堀・土塁跡 ---------- 141
（4）虎口跡 ---------- 151
（5）土橋・木橋跡 ---------- 154
（6）道路跡 ---------- 156
（7）土壇・塚 ---------- 161
（8）溝跡 ---------- 163
（9）土坑 ---------- 168
3　Ⅲ郭 ---------- 175
（1）溝跡 ---------- 177
（2）その他 ---------- 179
4　Ⅳ郭 ---------- 180
（1）竪穴住居跡 ---------- 181
（2）堀 ---------- 182
（3）木橋跡 ---------- 187
（4）土坑 ---------- 187
5　Ⅴ郭 ---------- 190
（1）堀・塚 ---------- 192
（2）土橋跡 ---------- 200
（3）塚 ---------- 200
（4）溝跡 ---------- 203
（5）土坑 ---------- 204
6　Ⅵ郭 ---------- 213
（1）掘立柱建物跡 ---------- 215
（2）堀 ---------- 216
（3）木橋・土橋跡 ---------- 218
（4）溝跡 ---------- 219
（5）塚 ---------- 226
（6）ピット群 ---------- 232
（7）土坑 ---------- 234

7　Ⅶ郭 ---------- 247
（1）地下式壙 ---------- 248
（2）溝跡 ---------- 251
（3）土坑 ---------- 255
8　1号腰曲輪 ---------- 256
（1）竪穴住居跡 ---------- 259
（2）掘立柱建物跡 ---------- 260
（3）柵跡 ---------- 264
（4）基壇 ---------- 265
（5）土坑 ---------- 268
9　2号腰曲輪 ---------- 268
（1）虎口跡 ---------- 271
（2）基壇 ---------- 274
（3）土坑 ---------- 276
10　その他の時代の遺構と遺物 ---------- 277
（1）竪穴住居跡 ---------- 277
（2）基壇 ---------- 278
（3）炭窯跡 ---------- 280
11　遺構外出土遺物 ---------- 284
12　まとめ ---------- 304
付章
写真図版

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経緯

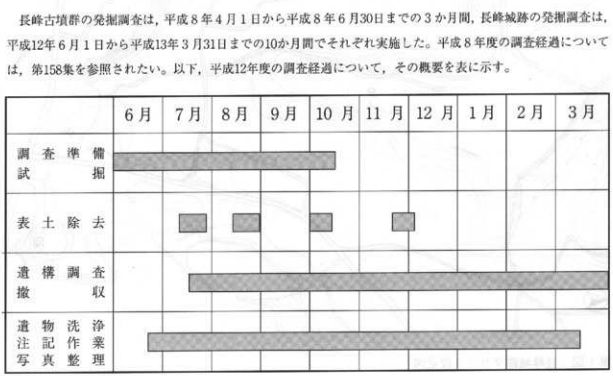
住宅都市整備公団は，既製の龍ヶ崎市街地と結合した調和のある新しい町作りを目指し，昭和45年「竜ヶ崎・牛久都市区画事業及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」が計画され，龍ヶ崎市北部に竜ヶ崎ニュータウンの建設に着手した。茨城県教育委員会は，昭和45年に実施した埋蔵文化財の分布調査の結果に基づき，開発地域内に所在する遺跡について，龍ヶ崎市教育委員会と協議を重ね，昭和51年に現状保存が困難な31遺跡について記録保存の措置を講ずることとした。調査は，昭和52年から平成元年まで実施された。

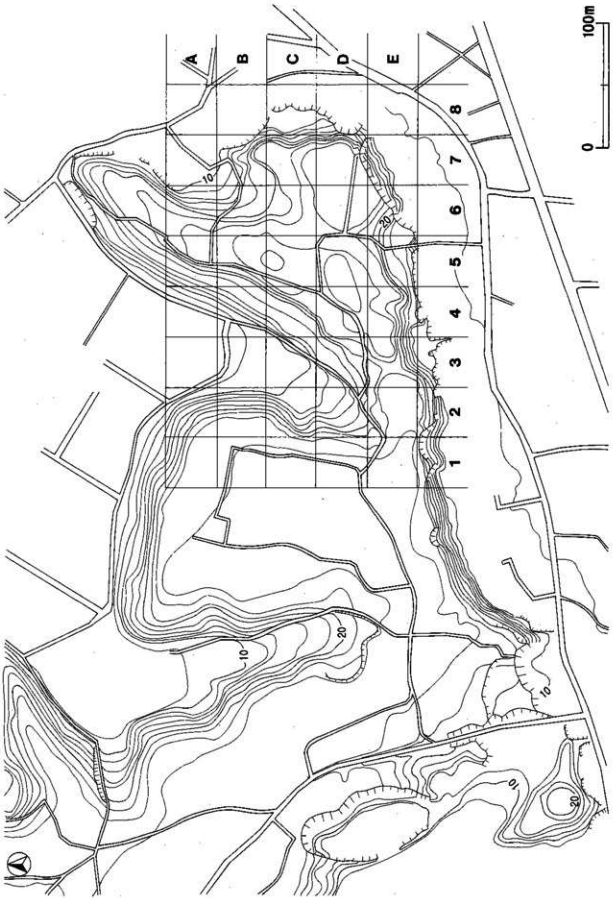
平成８年２月29日，住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会あてに，竜ヶ崎ニュータウン龍ヶ岡５号近隣公園整備事業地内における長峰古墳群の取り扱いについて，文化財保護の立場から協議が行われた。その結果，現状保存が困難であることから，平成８年３月13日，茨城県教育委員会から調査機関として茨城県教育財団が紹介された。なお，住宅・都市整備公団は，平成11年10月１日より都市基盤整備公団に名称を変更した。

平成11年10月19日，茨城県は事業地内の現地踏査を，同年11月18日には試掘・確認調査を実施し，同年12月13日，茨城県教育委員会から都市基盤整備公団あてに，事業地内に所在する長峰城跡の取り扱いについて協議した。その結果，同年３月28日，茨城県教育委員会は，都市基盤整備公団あてに記録保存のための発掘調査を実施するよう回答し，調査機関として茨城県教育財団を紹介した。そこで，都市基盤整備公団は茨城県教育財団と長峰城跡の発掘調査に関する委託契約を結び，同教育財団が平成12年６月１日から平成13年３月31日にかけて，発掘調査を実施することとなった。

第2節　調　査　経　過

長峰古墳群の発掘調査は，平成８年４月１日から平成８年６月30日までの３か月間，長峰城跡の発掘調査は，平成12年６月１日から平成13年３月31日までの10か月間でそれぞれ実施した。平成８年度の調査経過については，第158集を参照されたい。以下，平成12年度の調査経過について，その概要を表に示す。





第1図　長峰城跡グリット設定図

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

長峰城跡は，茨城県龍ヶ崎市大字長峰字竜ヶ井695番地ほかに所在する。

長峰城跡周辺の地勢は，筑波・稲敷台地とその南側に広がる小貝川低地に分けられる。筑波・稲敷台地は標高20～27mの平坦地であるが，縁辺部は浸食谷により複雑な地形を形成している。筑波・稲敷台地は，海成の成田層上に形成され，上位に龍ヶ崎砂礫層，常総粘土層が重なり，関東ローム層（武蔵野ローム層・立川ローム層）が2～3mの厚さで堆積している。筑波・稲敷台地と北相馬台地との間に挟まれた南部の小貝川低地は，古鬼怒川と小貝川によって形成された標高3～6mの沖積低地であり，両者の境界は比高15～20mの急斜面となっている。

長峰城跡は，龍ヶ崎市街地から北東に約4kmの稲敷台地南縁に位置し，標高23～26mであり，竜ヶ崎ニュータウンの東端にあたる。当城跡の西側には，長峰古墳群が所在し，北側には長峰町と半田町の間に開口した浸食谷が北西の貝原塚町方面に延びており，台地縁辺部は崖を形成している。また，南側にも長峰町から八代町の間に谷津が入り込んでいる。当城跡は，その舌状に張り出した長峰町の台地先端に位置し，南側は沖積低地との境界を形成している崖となっている。

第2節　歴史的環境

霞ヶ浦と利根川に挟まれた稲敷台地は，水陸交通の要衝にあたり，その自然の地の利を得て古くから人々の生活が営まれてきた。この地域は，県内でも有数の遺跡分布地として知られ，明治16年に日本人の手によって初めて調査が行われた陸平貝塚（美浦村）を筆頭に，菱岩山古墳（龍ヶ崎市）〈18〉，所作貝塚（桜川村）の調査が行われるなど，著名な遺跡が数多く所在する。

長峰城跡からは，縄文時代，弥生時代，古墳時代，中世の遺構が検出されている。ここでは当遺跡と同時代の遺跡を中心に，分布の概要について述べる。

縄文時代では，籠り地B遺跡[1]〈26〉から早・前期の住居跡等が検出され，土器片や石器類が出土している。前期では町田遺跡[2]〈31〉から，竪穴住居跡と土坑が確認されている。縄文時代前・中期では赤松遺跡〈51〉があげられ，ほぼ環状に分布する住居跡群と袋状土坑群が検出されている。中期になると，遺跡は龍ヶ崎市別所地区の西鶴谷津を隔てた舌状台地上に位置しており，小集落が確認された打越A遺跡[1]〈29〉・打越C遺跡[1]〈28〉，地点貝塚を伴う南三島遺跡2区[3]〈16〉が形成されている。また，馴馬地区の北西台地上に位置する廻り地A遺跡[4]〈25〉は中期末から後期前半にかけての大集落で，地点貝塚や土坑群を伴っている。

弥生時代では，龍ヶ岡地区の南部に位置する幅400～500mの壁代台地上に外八代遺跡[5]〈12〉・屋代A遺跡[6]〈13〉，長峰遺跡[7]〈2〉が点在し，弥生時代中期後半から後期の遺構・遺物が検出されている。

古墳時代の集落跡及び古墳等の遺跡は，稲敷台地南端部に連なるように集中している。古墳等をみると前期では，廻り地A遺跡から4基の方形周溝墓が検出されている[4]。前・中期では桜山古墳〈3〉がある。桜山

古墳は稲敷台地南端の独立丘上に位置する全長71.2m，高さ8.9mの前方後円墳であり，龍ヶ崎市内では最も規模の大きい古墳である。粘土槨の中から大刀・剣・短剣・鉄鏃・刀子等が出土している[8]。中・後期では，愛宕山古墳・長峰古墳群がある。愛宕山古墳からは，高さ約50cmの男子埴輪と高さ約46cmの女子埴輪が出土している[9]。また龍ヶ崎市半田からは，石枕が出土したこと[10]が知られている。長峰古墳群では，前方後円墳4基，方墳2基，円墳29基が確認され，人物埴輪・形象埴輪などが出土している[7]。他に，墳丘を伴う古墳は，奈戸岡古墳群〈27〉，稲荷古墳，栗の木古墳，大塚古墳〈41〉等がある。集落跡は主に小野川流域の東台地縁辺部と小貝川低地を望む台地縁辺部に集中して営まれているが，以前の時代から継続して営まれた遺跡と，古墳時代に新たに形成され，さらにその後も継続された遺跡とに大別される。前者の遺跡として，八代A遺跡[6]，外八代遺跡[5]，南三島遺跡[3][11]，長峰遺跡が調査された[7]。後者の遺跡として，平台遺跡〈21〉から古墳時代の住居跡47軒が検出されており，まとまった集落を形成していた[12]。また，数軒から十数軒を単位とする小集落が営まれていた遺跡として，大羽谷津遺跡〈24〉(住居跡5軒)，松巣遺跡[13](住居跡11軒)，沖餅遺跡〈23〉[13](住居跡13軒)，成沢遺跡[14]〈22〉(住居跡13軒)，十三塚遺跡[15]〈4〉(住居跡3軒)，尾羽台遺跡[16]〈5〉(住居跡15軒)等がある。また龍ヶ崎市奈戸岡からは，石製模造品が多数出土したことが知られている。

中世の遺跡としては，主に城館跡について記述するが，それらは稲敷台地南側の縁辺部に所在し，そのほとんどが台地上の谷津に面した突端部に立地する。いずれも戦略上有利な地形を選んで構築している。当地域の動向を概略的にみると，南北朝時代，南朝方の小田氏，北畠親房に対して，北朝方の高師冬が常陸南部に進み，騎馬城において戦闘が行われたとの記述が「鶴岡社務所記録」と「北畠親房事書」に記されている。また，南北朝の終わり頃に，信太荘は小田孝朝の支配となるが，上杉憲方・朝宗に攻められ所領を失った。小田氏の勢力後退に伴い，上杉方の代官として土岐原氏が信太荘の惣政所の役職に就き，信太荘（江戸崎）に移り住んだ。その後も小田氏と土岐原氏の対峙は続いたが，「足利基頼書状」には，大永3年（1523年），土岐原氏は小田氏側の八代城に攻撃を仕掛けて勝利したことが記されている。この八代城は，稲敷台地南端部の標高25mに造営された外八代城[6]（外八代遺跡）と，屋代城（屋代A遺跡・屋代B遺跡〈14〉）と考えられている。土岐原氏の龍ヶ崎地域への進出は続き，永禄年間には龍ヶ崎城跡〈17〉を修築して一族を城主として派遣している。土岐原氏は外八代城，屋代城の他にも，麒麟城跡〈20〉，貝原塚城跡〈33〉，登城山城跡〈10〉，要害城跡〈8〉等を支配下に置き，大統寺をはじめ龍ヶ崎地域の寺院に文書を残している。天正18年（1590年），佐竹義宣の弟芦名盛重は土岐原氏を滅ぼし，龍ヶ崎城を支城としたことが「佐竹義重書状写」に記されている[5]。その後，富田将監から大久保岩見守の領地となり，慶長11年（1606年）には，伊達政宗が龍ヶ崎の地を与えられ，伊達氏が幕末まで当地域を支配した。

※　文中の〈　〉内の番号は，第2図及び周辺遺跡一覧表中の該当遺跡番号と一致している。

註

（1）　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5　前清水遺跡・打越A遺跡・仲根台塚・大羽谷津遺跡・打越C遺跡・廻り地B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第Ⅶ集　1981年

（2）　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9　町田遺跡・仲根台B遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第25集　1984年

（3）　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書10　南三島遺跡1・2区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第27集　1985年

(4)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書7　廻り地A遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第XV集　1982年

(5)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書2　外八代遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第II集　1980年

(6)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書6　成沢遺跡・屋代A遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第XIV集　1982年

(7)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19　長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集　1990年

(8)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20　桜山古墳」『茨城県教育財団文化財調査報告』第61集　1991年

(9)　大野延太郎「常陸国龍ヶ崎発見の埴輪土偶について」『東京人類学雑誌』20　1905年

(10)　根本康弘　「内原町出土の石枕について―（茨城県内出土石枕集成）―」　『内原町史研究』2　内原町史編さん委員会　1993年

(11)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書11　南三島遺跡6・7区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第30集　1986年

茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書12　南三島遺跡5区」『茨城県教育財団文化財調査報告』第32集　1986年

茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16　南三島遺跡3・4区（I）」『茨城県教育財団文化財調査報告』第44集　1988年

茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書18　南三島遺跡3・4区（II）」『茨城県教育財団文化財調査報告』第49集　1989年

(12)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書8　平台遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第19集　1983年

(13)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書1　松葉遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第I集　1979年

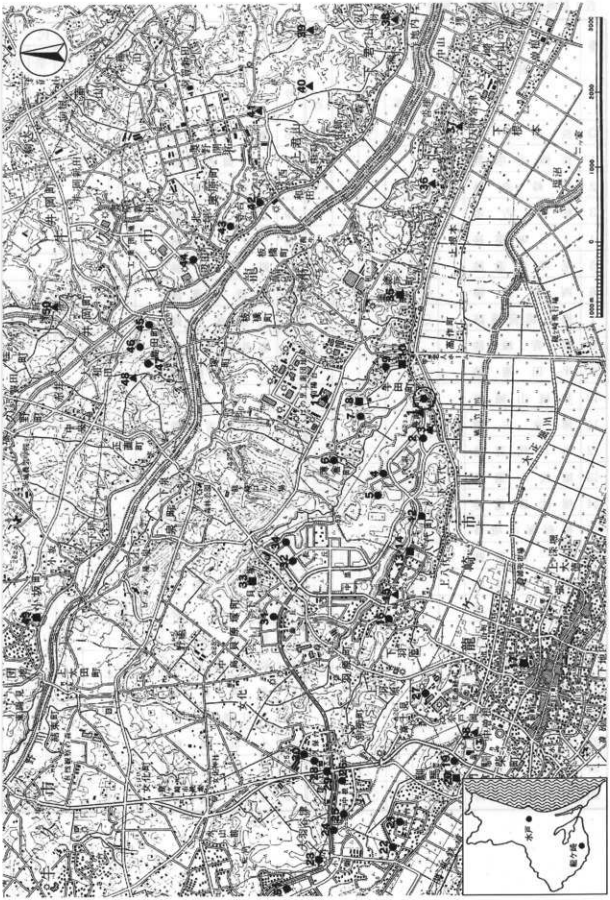
(14)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3　沖餅遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第III集　1980年

(15)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書14　尾坪台遺跡・十三塚遺跡」『茨城県教育財団埋蔵文化財調査報告』第39集　1987年

参考文献

- 大山年次，蜂須紀夫　『茨城県　地学のガイド』　コロナ社　1977年
- 茨城県教育長文化課　『茨城県遺跡地図（2版）』　茨城県教育委員会　1990年
- 茨城県史編集会　『茨城県史料　考古資料編　縄文時代』　茨城県
- 茨城県史編集会　『茨城県史料　考古資料編　弥生時代』　茨城県
- 茨城県史編集会　『茨城県史料　考古資料編　古墳時代』　茨城県　1974年
- 茨城県史編集会　『茨城県史料　中世編』　茨城県　1986年
- 龍ヶ崎市史編さん委員会　『龍ヶ崎市史　別編I　龍ヶ崎の原始古代』　龍ヶ崎市教育委員会　1991年

・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 原始古代資料編』 龍ヶ崎市教育委員会1995年
・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 原始古代編』 龍ヶ崎市教育委員会 1999年
・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 中世編』 龍ヶ崎市教育委員会 1998年
・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 中世資料編』 龍ヶ崎市教育委員会 1993年
・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 中世資料編 別冊』 龍ヶ崎市教育委員会 1994年
・ 龍ヶ崎市史編さん委員会 『龍ヶ崎市史 別編Ⅱ 龍ヶ崎の中世城郭』 龍ヶ崎市教育委員会 1987年
・ 伊藤 勲 『土岐原史紀』 伊藤勲遺稿刊行会 1978年



第２図　周辺遺跡位置図

表1 長峰城跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近
◎	長峰城跡		○	○	○		○	26	廻り地B遺跡		○				
1	長峰古墳群				○		○	27	奈戸岡古墳群				○		
2	長峰遺跡			○	○	○	○	28	打越C遺跡		○				
3	桜山古墳				○			29	打越A遺跡		○				
4	十三塚遺跡				○		○	30	ウツブタ遺跡		○				
5	尾坪台遺跡			○	○			31	町田遺跡		○				
6	西平遺跡		○					32	前清水遺跡		○		○		○
7	馬込稲荷遺跡		○					33	貝原塚城跡						○
8	要害城跡						○	34	高井城下城跡						○
9	半田遺跡				○			35	大日山館跡						○
10	登城山城跡						○	36	鏡塚古墳				○		
11	薄倉古墳						○	37	牛内原古墳群				○		
12	外八代遺跡			○	○	○	○	38	権現塚古墳				○		
13	屋代A遺跡			○	○	○	○	39	大日峯古墳				○		
14	屋代B遺跡		○	○	○	○	○	40	山王古墳				○		
15	稲荷塚古墳群				○			41	大塚古墳				○		
16	南三島遺跡		○	○	○	○		42	天王峯遺跡			○			
17	龍ヶ崎城跡						○	43	寺の台遺跡				○		
18	愛宕山古墳				○			44	平遺跡		○				
19	山王台遺跡				○			45	堂内遺跡		○				
20	駒場城跡						○	46	島田境遺跡		○		○		
21	平台遺跡				○			47	赤坂遺跡		○				
22	成沢遺跡				○			48	大日様古墳群				○		
23	沖餅遺跡	○	○		○			49	小坂城跡						○
24	大羽谷津遺跡				○			50	鍬金古墳				○		
25	廻り地A遺跡		○		○			51	赤松遺跡		○				

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の概要

長峰城跡は，龍ヶ崎市の北東部，標高23～26mの稲敷台地上の南端部に位置する。現況は山林で，調査面積は15,240㎡である。調査区の西側は前回に調査が行われた長峰古墳群（平成8年度調査区）が隣接している。南側は台地から低地にかけての斜面部であったが，竜ヶ崎ニュータウン造成関連の工事に伴い現況はとどめていない。

当遺跡は，古墳時代・中世を中心とする旧石器時代から近世までの複合遺跡である。

平成12年度の調査では，竪穴住居跡28軒，掘立柱建物跡5棟，郭7か所，腰曲輪2か所，堀5条，土壇状遺構1か所，土橋3か所，虎口跡10か所，切り欠き状遺構1か所，礎石建物跡1棟，道路跡1条，橋跡1か所，井戸跡2か所，古墳1基，溝跡27条，土坑322基を確認した。時代別に遺構と遺物をみてみると，縄文時代の遺構は竪穴住居跡1軒，土坑10基で，前・中期の土器が出土している。弥生時代の遺構は，竪穴住居跡8軒，溝跡1条で，中期後葉から後期にかけての土器が出土している。古墳時代の遺構は，竪穴住居跡9軒，古墳1基，溝跡1条で，遺物は土師器（坏，高坏，坩，甕，壺），刀剣，ガラス小玉，銅鏡が出土している。中世では，長峰城跡に直接関係する遺構として郭，腰曲輪，堀，土壇状遺構，土橋跡，虎口跡，礎石建物跡，掘立柱建物跡，木橋跡，道路跡，柵跡，井戸跡，溝跡などで，遺物は土師質土器（皿，内耳鍋，擂鉢），陶器（甕，壺）である。その他の遺構として，土坑が312基で，遺物は土師器，土師質土器，陶器片，磁器片である。遺物の大部分は，縄文時代から中世にかけての縄文土器，弥生土器，土師器，陶器，磁器である。その他の遺物として，石器，土製品，鉄器・鉄製品，獣骨などが出土している。

第2節　基本層序

調査区内（E1h5）にテストピットを設定して基本土層の観察を行い，第3図に示すような土層堆積状況を確認した。

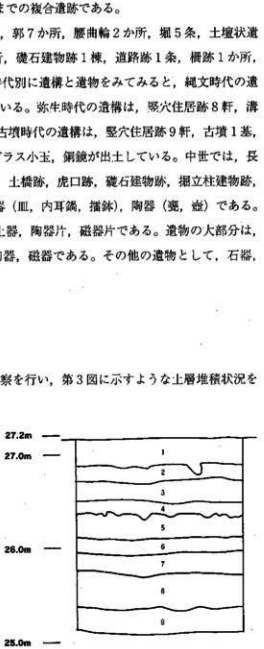
第1層は，褐色で白色粒子を微量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは26～40cmである。

第2層は，褐色をしたハードローム層への漸移層である。黒色粒子を少量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは5～17cmである。

第3層は，黄褐色のハードローム層である。黒色粒子を中量，白色粒子及び赤色スコリアを少量含み，厚さは18～27cmほどで，固く締まっている。

第4層は，褐色で黒色粒子及び赤色スコリアを少量含み，粘性，締まりともに強い。厚さは12～22cmである。

第5層は，褐色で黒色粒子を中量，赤色スコリアを少量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは22～28cmである。



第3図　基本土層図

第4層と第5層の間には不整合面がみられる。

第6層は，暗オリーブ色で赤色粒子を微量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは13～18cmである。

第7層は，暗オリーブ色で白色粒子と黒色粒子を微量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは18～25cmである。

第8層は，オリーブ褐色で黒色粒子を微量含み，粘性，締まりとも強い。厚さは32～40cmである。

第9層は，オリーブ褐色で白色粒子を微量含み，粘性，締まりともかなり強い。厚さは23～30cmである。

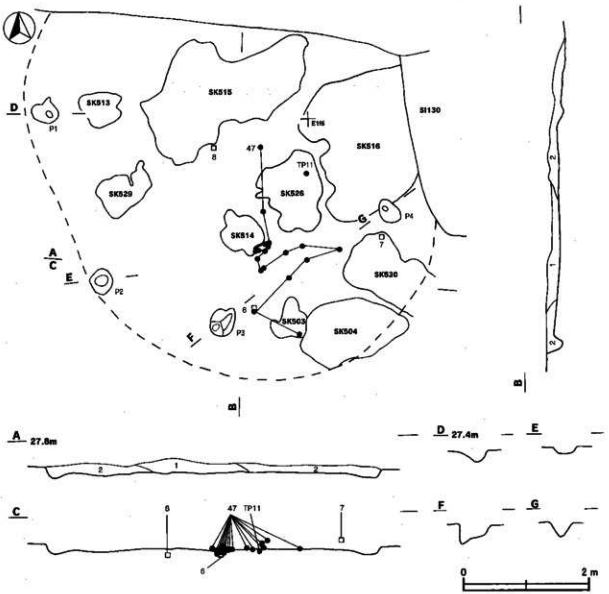
第3節　長　峰　遺　跡

1　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡1軒，土坑10基が確認されている。遺構外からも遺物が出土しているため，柴城の際に削平された遺構が存在したと思われる。

（1）竪穴住居跡

第131号住居跡（第4図）



第4図　第131号住居跡実測図

位置　Ⅵ郭を形成している台地の縁辺部付近，Ｅ１f5区に位置している。第３号塚跡の土層断面で掘り込みが認められ，ピットの配列などから住居跡と認識したが，本跡の北側は後世の削平を受けている。

重複関係　第130号住居跡，第503・504・513・516・526・529・530号土坑と重複している。第３号塚の旧表土下面および第515・530号土坑を掘り込み，第130号住居跡に掘り込まれている。他の土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　ピットの配列から，径５ｍほどの円形と推定される。壁高は10～14cmで，外傾して立ち上がる。住居の主軸方向は不明である。

床　若干起伏があり，軟弱である。

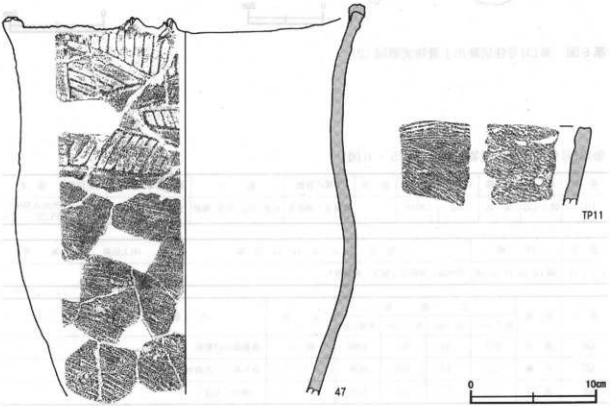
ピット　４か所。Ｐ１～Ｐ４は深さ19～39cmで，円形に並ぶことから柱穴と思われる。

覆土　２層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

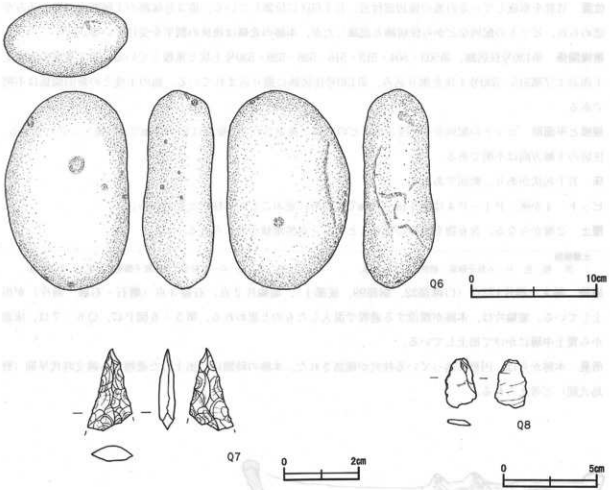
土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量。粘性・しまり普通。　　2　黒　褐　色　ローム粒子・赤色粒子微量。粘性・しまり普通。

遺物　縄文土器片122点（口縁部22，胴部99，底部１），埴輪片２点，石器３点（磨石・石鏃・剥片）が出土している。埴輪片は，本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。第５・６図Ｐ47，Ｑ６・７は，床面から覆土中層にかけて出土している。

所見　本跡からは，円形に巡っている柱穴が確認された。本跡の時期は，出土した遺物から縄文時代早期（野島式期）と考えられる。



第５図　第131号住居跡出土遺物実測図（1）



第6図　第131号住居跡出土遺物実測図（2）

第131号住居跡出土遺物観察表（第5・6図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P47	縄文上器	深鉢	28.2	(30.0)	—	条痕文・微隆起	石英・長石・雲母・繊維	普通	橙色	覆土中層	野島式期50% PL.72

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP11	縄文時代早期	内外面に条痕文を施文。繊維含む。	覆土下層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q6	磨石	15.7	9.8	5.7	1260	砂岩	表裏面に打撃痕	
Q7	石鏃	(2.1)	(1.1)	0.4	0.58	チャート	抉り有り，逆刺欠	PL.77
Q8	剥片	2.6	1.3	0.3	0.85	チャート	一側面に刃潰し	PL.77

（2）土坑

第131号住居跡の周辺から10基の土坑が確認され，覆土の状態から縄文時代の遺構と考えられる。そのなかで代表的なものについて述べ，その他は実測図と一覧表に掲載する。

第515号土坑（第7図）

位置　Ⅵ郭を形成している台地の縁辺部，Ｅ１e5区に位置している。本跡の西に第513・529号土坑，南東から南にかけて第516・526・514号土坑が構築されている。

重複関係　第131号住居跡と重複している。

規模及び形状　長辺3.13m，短辺1.34m，深さ14cmの不定形で，壁面は緩やかに立ち上がり，底面は起伏がある。主軸はＮ－56°－Ｅを指す。

覆土　4層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　極暗褐色　ローム粒子微量。
2　黒　褐　色　ローム粒子微量。
3　暗　褐　色　ローム粒子微量。
4　褐　　色　ローム粒子少量。粘性強。

遺物出土状況　本跡に伴う遺物は出土していない。

第516号土坑（第7図）

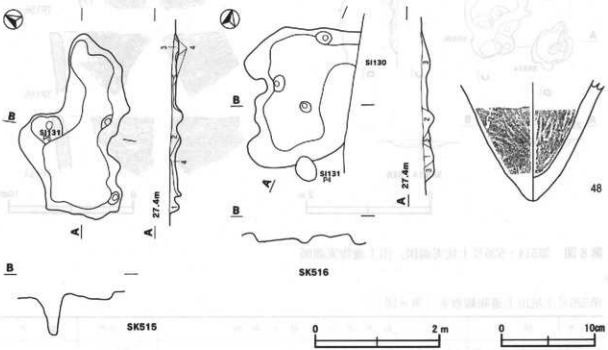
位置　Ⅵ郭を形成している台地の縁辺部，Ｅ１f6区に位置している。本跡の西に第515・526号土坑が構築されている。

重複関係　第130号住居跡に掘り込まれており，第131号住居跡と重複している。

規模及び形状　東部を第130号住居跡に掘り込まれており，現存する規模は長辺2.46m，短辺1.91m，深さ14cmの不定形で，壁面は緩やかに立ち上がり，底面には起伏がある。主軸はＮ－15°－Ｅを指す。

覆土　3層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量。
2　黒　褐　色　ローム粒子微量。しまり強。
3　褐　　色　ローム粒子微量。



第７図　第515・516号土坑実測図，出土遺物実測図

遺物出土状況　縄文土器片５点（胴部４，底部１），土師器片６点（体部６）が出土しており，土師器片は流れ込んだものである。第７図P48は，本跡の覆土中から出土している。

所見　本跡の性格は明らかではないが，時期は出土した土器などから縄文時代早期と考えられる。

第516号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P48	縄文土器	尖底	—	(9.5)	—	条痕文	白色粒子・雲母	普通	橙色	覆土中	10%

第526号土坑（第８図）

位置　Ⅵ郭を形成している台地の縁辺部，Ｅ１f5区に位置している。本跡の東に第516号土坑，西に514号土坑，南に第504・530号土坑がそれぞれ構築されている。

重複関係　第131号住居跡と重複している。

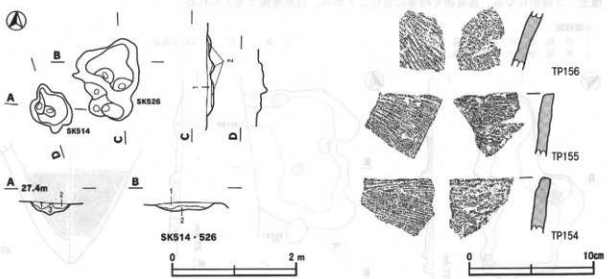
規模及び形状　長辺1.24m，短辺0.94m，深さ14cmの不定形で，壁面は緩やかに立ち上がり，底面には起伏がある。主軸はＮ－０°と思われる。

覆土　２層からなる。含有物を均等に含み，レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量。　　2　褐　　色　ローム粒子微量。粘性強。

遺物出土状況　縄文土器片13点（口縁部２，胴部11）が出土している。第８図ＴＰ154～ＴＰ156は，覆土中から出土している。

所見　本跡の性格は明らかではないが，時期は出土した土器などから縄文時代早期と考えられる。



第８図　第514・526号土坑実測図，出土遺物実測図

第526号土坑出土遺物観察表（第８図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP154～156	縄文時代早期	内外面に条痕文を施文。繊維含む。	覆土中	

2　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡８軒，溝跡１条が確認されている。大半が長峰城跡の築城の時に削平され，残存状態は良くない。

（1）竪穴住居跡

第125号住居跡（第９図）

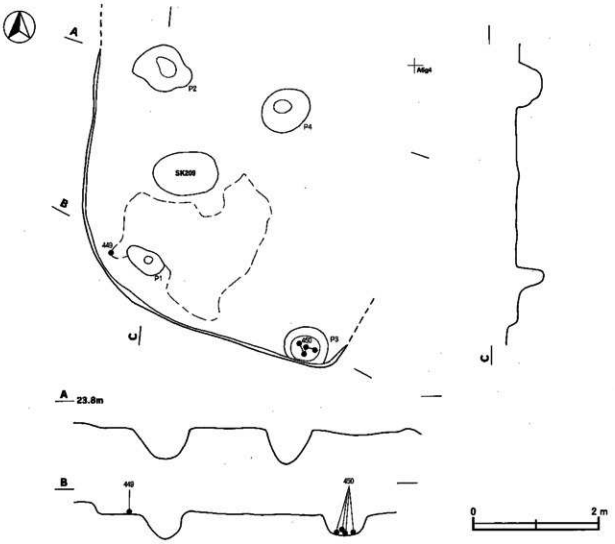
位置　Ⅶ郭を形成している台地の縁辺部，Ａ６g3区に位置している。本跡は表土除去中に貼床の痕跡を認め，周辺を精査して壁の一部を確認した。

重複関係　第209号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の北壁および東壁は長峰城跡の築城工事によって削平されており，全体の規模は不明である。残存部分は長軸約4.2m，短軸約4.0mで，隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は南西コーナー付近で15cmあり，外傾して立ち上がる。主軸は西壁および南壁からＮ－６°－Ｅを指すと考えられる。

床　平坦で，若干軟弱である。

ピット　４か所。Ｐ１・Ｐ２は深さ38～44cmで，西壁と平行して並んでいることから柱穴と考えられる。Ｐ３

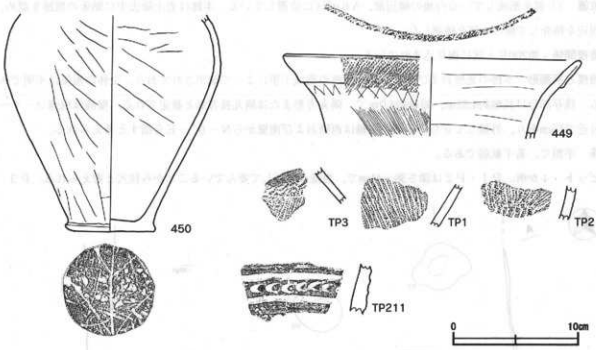


第９図　第125号住居跡実測図

は深さ32cmで，南壁際に位置していることから貯蔵穴の可能性がある。Ｐ４の性格は不明である。

遺物出土状況　弥生土器片46点（口縁部３，体部41，底部２），土師器片14点（体部14），埴輪片７点，土師質土器片13点（口縁部２，体部10，底部１），陶器片５点（口縁部３，体部１，底部１）が出土している。第10図Ｐ449・ＴＰ１～３は床面上から，Ｐ450はＰ３内からそれぞれ出土している。土師器片・埴輪片・土師質土器片・陶器片，本跡が埋没する過程で混入したものである。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から弥生時代後期後半と考えられる。



第10図　第125号住居跡出土遺物実測図

第125号土坑出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P449	弥生	広口壺	[23.4]	(6.2)	—	附加条一種附加２条	石英・雲母	良	褐色	床面上	10%
P450	弥生	広口壺	—	(17.1)	7.1	ナデ，底部木葉痕	石英・長石・雲母	良	にぶい赤褐色	P３覆土中	70%　PL72

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
ＴＰ１～３	弥生時代後期	附加条一種附加２条。ＴＰ３は無文部との境界にＳ字状結節文を施文。	床面上	
ＴＰ211	縄文時代後期	平行沈線の間に半截竹管による刺突文を施文。	床面上	

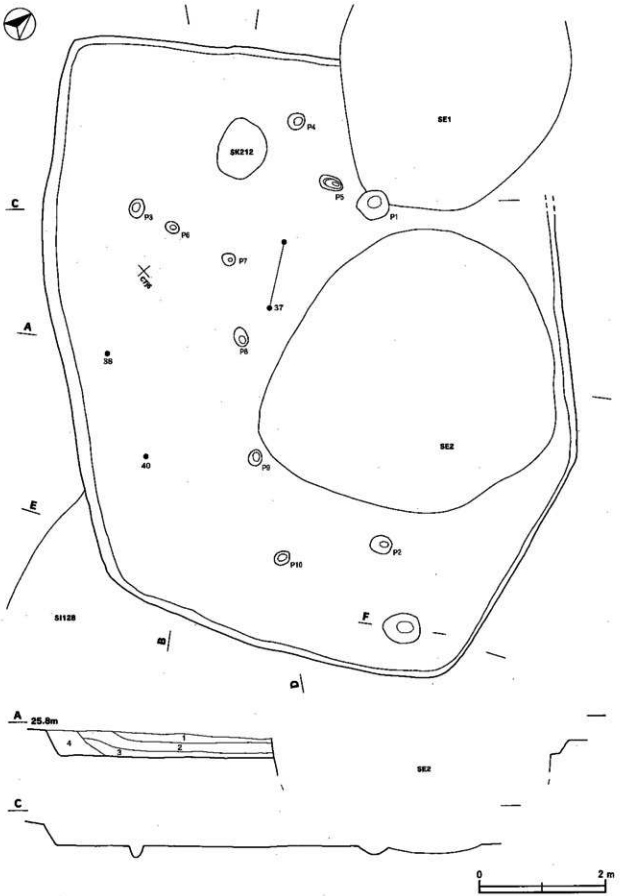
第127号住居跡（第11・12図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の先端付近，Ｃ７i6区に位置している。

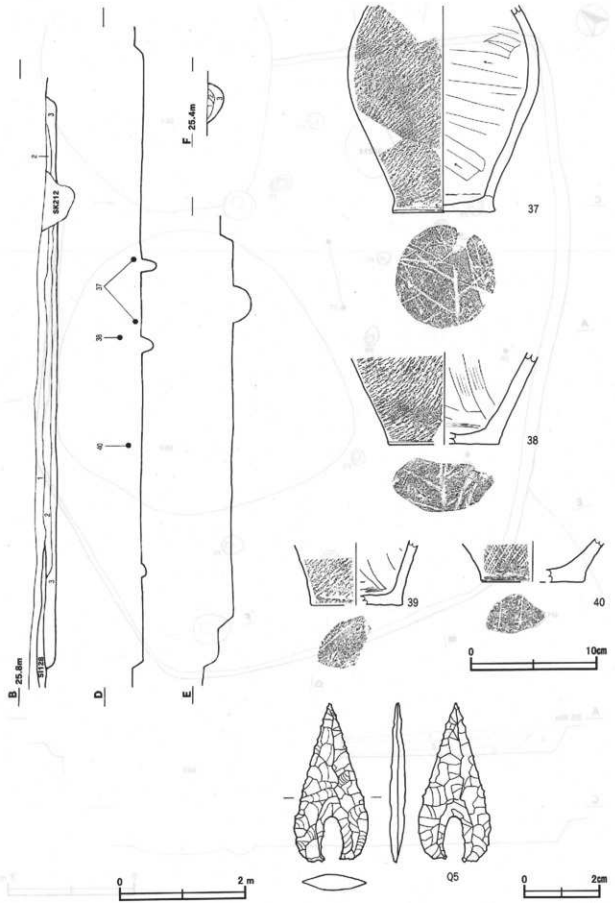
重複関係　第219号土坑を掘り込み，第128号住居跡，第１・２号井戸跡，第212・213号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長軸9.38m，短軸8.10mの隅丸長方形である。壁高は18～40cmで，外傾して立ち上がり，主軸はＮ－34°－Ｗを指している。

床　平坦で，軟弱である。



第11図　第127号住居跡実測図(1)



第12図　第127号住居跡 (2)・出土遺物実測図

ピット　10か所。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３は深さ20～21cmで，主軸方向およびその直交方向に並ぶことから主柱穴と考えられる。Ｐ４～Ｐ10は深さ９～23cmで，性格は不明である。

貯蔵穴　東コーナー付近に位置し，深さは38cmである。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量。
3　褐　色　ロームブロック多量。しまり弱。

覆土　４層からなる。１層は表土直下の耕作土で，２～４層が本跡の覆土である。レンズ状に堆積し，覆土の含有物を均等に含み，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。
3　暗　褐　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。
4　褐　色　ロームブロック中量。粘性弱。

遺物出土状況　弥生土器片87点（口縁部２，胴部71，底部14），土師器片113点（口縁部３，体部109，底部１），陶器片１点，石器１点（石鏃）が出土している。第12図P37は住居の中央付近，P38・40は南西壁よりの２層中からそれぞれ出土している。土師器片・陶器片・石鏃は，本跡が埋没する過程で混入したものである。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から弥生後期と考えられる。

第127号土坑出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P37	弥生	広口壺	—	(16.4)	8.2	附加条一種附加２条，底部木葉痕	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	にぶい赤褐色	２層中	20%　PL72
P38	弥生	広口壺	—	(7.2)	[8.8]	附加条一種附加２条，底部木葉痕	白色粒子・雲母	良	明赤褐色	２層中	10%　PL72
P39	弥生	広口壺	—	(5.1)	[7.3]	附加条一種附加２条，底部木葉痕	白色粒子・雲母	普通	にぶい橙色	覆土中	5％
P40	弥生	広口壺	—	(3.4)	[8.0]	底部木葉痕	白色粒子・雲母	普通	橙色	２層中	5％

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q5	石鏃	4.2	2.0	0.4	2.12	頁岩	抉り有り	PL77

第136号住居跡（第13図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南東部，Ｄ７d5区に位置している。付近には，第138～140号住居跡と同時代の遺構が集中して確認されている。

重複関係　第39号墳下の地山を掘り込んで構築しており，第139号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　北東側および南東側の壁は，第139号住居跡および長峰城跡の築城工事によって削平されており，規模は不明である。残存している壁の形状から，長軸7.15m，短軸4.82mの隅丸長方形と推定される。壁高は53～75cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－68°－Wを指している。

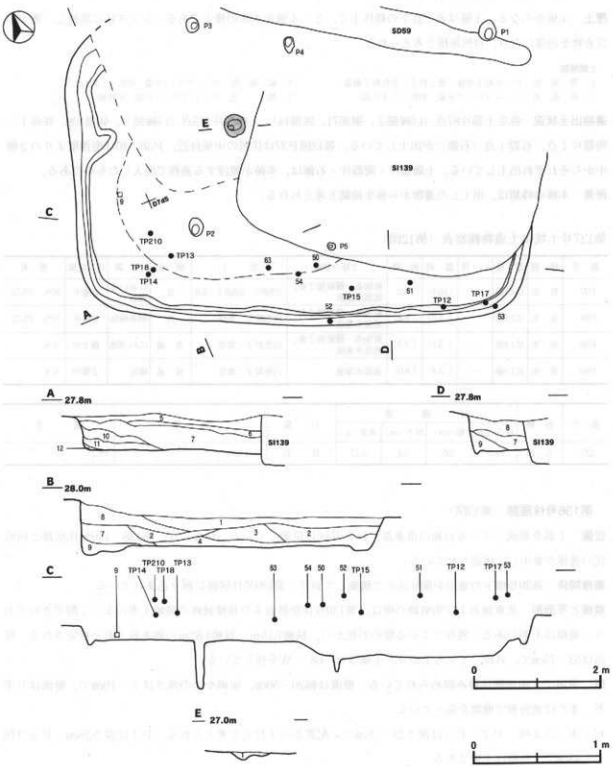
床　平坦で，中央部は踏み固められている。壁溝は幅20～50cm，床面からの深さは７～10cmで，断面はU字形，または逆台形で壁際を巡っている。

ピット　５か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ23～78cmで，配置から主柱穴と考えられる。Ｐ４は深さ26cm，Ｐ５は同じく43cmで，性格は不明である。

炉　P２とP３の中間，やや内側に構築されている。長径35cm，短径30cmの楕円形で，深さ６cmの地床炉である。底面は火熱を受け，硬化している。

土層解説
1　赤　褐　色　焼土粒子多量。粘性弱・しまり強。

覆土　12層からなる。レンズ状に堆積し，覆土の含有物も均質的であり，自然堆積と考えられる。



第13図　第136号住居跡実測図

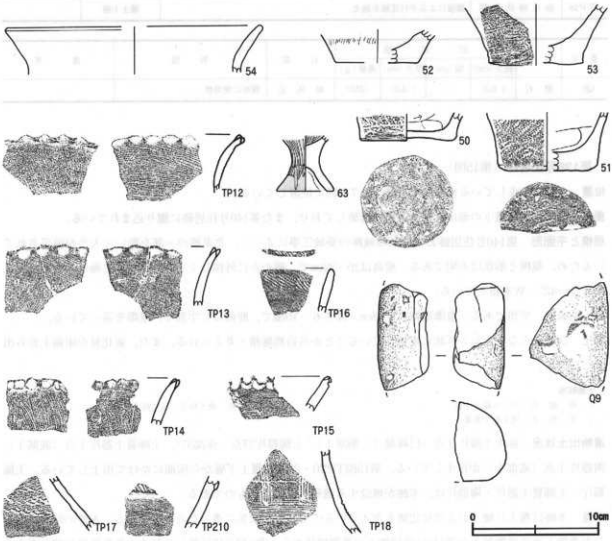
また北西壁および南コーナー付近の覆土下層に焼土が堆積している。

土層解説

1 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
2 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量。
4 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
5 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
6 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
7 暗 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
8 黒 褐 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
9 黒 褐 色 ローム粒子中量，赤色粒子少量。
10 褐 色 ローム粒子多量，赤色粒子少量。
11 にぶい黄褐色 ローム粒子中量。
12 褐 色 ローム粒子多量。粘性強。

遺物出土状況 弥生土器片76点（口縁部11，胴部57，底部8），土師器片120点（口縁部2，体部114，底部4），石器1点（磨石）が出土している。第14図P50～54・63，TP12・15・17は南西壁中央付近から東コーナーにかけて，TP13・14・18・210は西コーナー付近の覆土上層から中層にかけて流れ込んだような状態でそれぞれ出土している。Q9は北西壁際に接して，床面上から出土している。土師器片は，本跡が埋没する過程で混入したものである。

所見 本跡の時期は，弥生時代後期後半と考えられる第139号住居跡に掘り込まれていることや出土した遺物の時期から弥生時代中期後半と考えられる。



第14図 第136号住居跡出土遺物実測図

第136号土坑出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P50	弥生	広口壺	—	(2.1)	7.4	附加条一種附加2条，底部有目	石英・長石・赤色粒子・雲母	普通	橙色	覆土上層	5%
P51	弥生	広口壺	—	(4.6)	[6.5]	附加条一種附加2条，底部ナデ	白色粒子・雲母	普通	橙色	覆土上層	5%
P52	弥生	壺	—	(2.7)	[6.4]	外面・底部ナデ	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	橙色	覆土上層	5%
P53	弥生	広口壺	—	(4.8)	[7.4]	附加条一種附加2条	白色粒子・雲母	普通	明黄褐色	覆土上層	5%
P54	弥生	壺	[19.8]	(3.6)	—	ナデ，LR単節	白色粒子・赤色粒子・雲母	普通	にぶい黄橙色	覆土上層	5%
P63	弥生	器台カ	—	(4.4)	[4.5]	ミガキ	白色粒子・雲母	良	橙色	覆土中層	15%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP12～15	弥生時代中期後半	内外面ハケ目，口縁部に指頭押捺。	覆土中～上層	
TP16・20	弥生時代中期後半	RLの単節斜縄文を施文。	覆土中	
TP17	弥生時代中期後半	S字状結節文を施文。	覆土上層	
TP18	弥生時代後期	櫛描による平行沈線を施文。	覆土上層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q9	磨石	(8.3)	—	(6.2)	(233)	凝灰岩	側面に使用痕	

第138号住居跡（第15図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南東部，D7f4区に位置している。

重複関係　第39号墳下の地山を掘り込んで構築しており，また第140号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　第140号住居跡および長峰城跡の築城工事によって，北東壁の一部を除いて大半が削平されているため，規模と形状は不明である。壁高は20～22cmで，緩やかに外傾して立ち上がり，主軸は不明で，北東壁はN－42°－Wを指している。

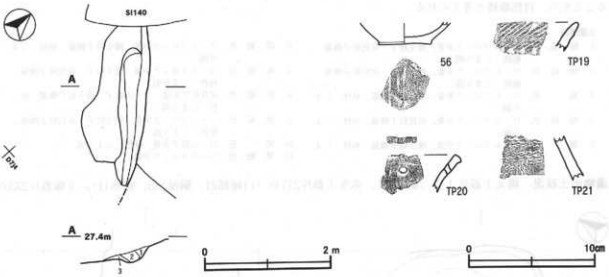
床　貼床で，平坦である。壁溝は幅24～28cm，深さ6～10cmで，断面はU字形で，壁際を巡っている。

覆土　3層からなり，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。また，炭化材が床面上から出土している。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量。
2　赤褐色　焼土粒子多量。
3　暗赤褐色　焼土粒子・炭化粒子少量。

遺物出土状況　弥生土器片3点（口縁部2，胴部1），土師器片37点（体部37），土師質土器片1点（底部1），陶器片1点（底部1）が出土している。第15図TP20・21は，覆土下層から床面にかけて出土している。土師器片・土師質土器片・陶器片は，本跡が埋没する過程で混入したものである。

所見　本跡は覆土に焼土および炭化物を含んでいることから，火災に遭った可能性がある。本跡の時期は出土した遺物と弥生後期後半の第140号住居跡との重複関係から，第140号住居跡に先行する弥生時代後期と考えられる。



第15図　第138号住居跡・出土遺物実測図

第138号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P56	土師質土器	かわらけ	—	（1.7）	［4.1］	雲母	褐灰色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土中	10%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP19	弥生時代後期	内外面ハケ目，口縁部に指頭押捺を施文。	覆土中	
TP20	弥生時代中期後半	口唇端部にLRの単節斜縄文，焼成前に穿孔。	覆土中	
TP21	弥生時代中期後半	S字状結節文。	覆土中	

第139号住居跡（第16図）

位置　I郭を形成している台地の南東部，D7d5区に位置している。

重複関係　第39号墳下の地山および第138号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　長峰城跡の築城工事によって，住居の北東壁は削平されている。残存部での規模は長軸4.71m，短軸3.03mほどの隅丸長方形である。壁高は55～74cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－55°－Wを指している。

床　平坦で，ピットと炉の内側が踏み固められている。

ピット　7か所。P1～P4は深さ84～102cmで，配置から主柱穴と考えられる。P5～P7の深さは4～6cmで，性格は不明である。

炉　P1とP4の中間に構築されている。長径78cm，短径45cmの楕円形で，深さ6cmの地床炉であり，底面は火熱を受けて硬化している。

土層解説
1　暗褐色　焼土粒子多量。
2　黒　　色　焼土粒子微量。
3　褐灰色　焼土粒子中量，炭化粒子微量。
4　赤褐色　焼土粒子多量。

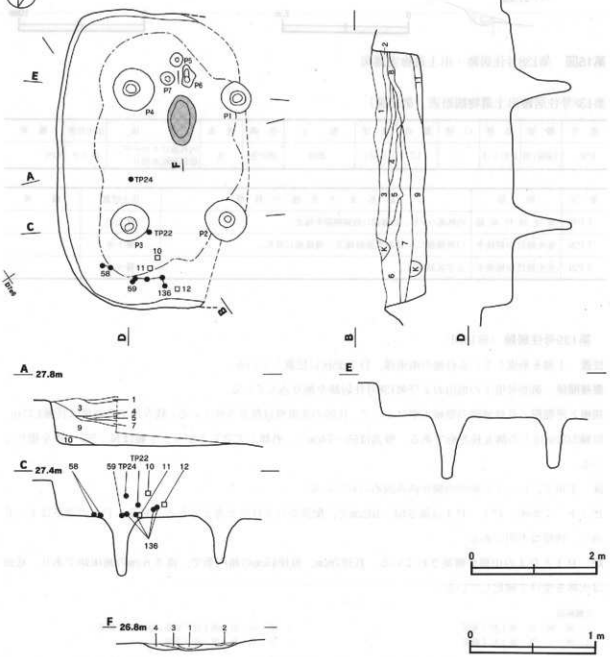
覆土　11層からなる。1～6層はローム粒子・ロームブロックを多く含み，屋外から投げ込まれたような堆積状況を示し，人為堆積と思われる。しかし，7～11層は含有物が均等に含まれており，レンズ状に堆積してい

ることから，自然堆積と考えられる。

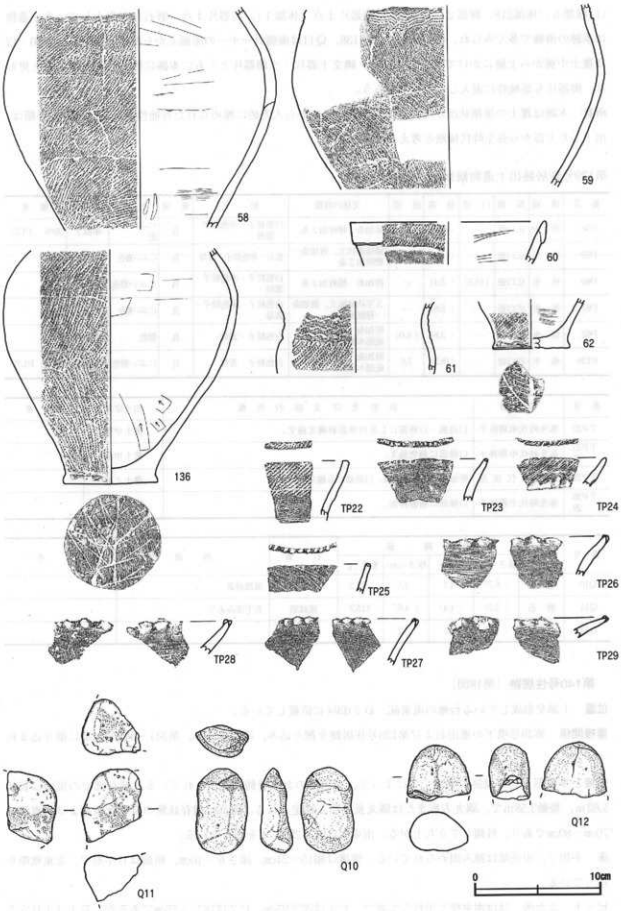
土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
3 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
4 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
5 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
6 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
7 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
8 黒 褐 色 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
9 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
10 黒 色 ローム粒子少量。粘性・しまり強。
11 黒 褐 色 ロームブロック少量。

遺物出土状況 縄文土器片１点（胴部１），弥生土器片217点（口縁部21，胴部185，底部11），土師器片233点



第16図 第139号住居跡実測図



第17図　第139号住居跡出土遺物実測図

（口縁部５，体部218，脚部２，底部８），陶器片１点（体部１），石器片４点（磨石）が出土している。遺物は本跡の南側で多くみられ，第17図58・59・136，Q11は南側コーナーの床面上から出土している。Q10・12は覆土中層から上層にかけて出土しており，縄文土器片・土師器片とともに本跡に伴うものではないと思われ，陶器片も築城時に混入したものであろう。

所見　本跡は覆土の堆積状況から，ある程度埋没してから人為的に埋められた可能性がある。本跡の時期は，出土した土器から弥生時代後期と考えられる。

第139号住居跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P58	弥生	広口壺	—	(17.3)	—	附加条一種附加２条	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	にぶい赤褐色	床面上	30%　PL72
P59	弥生	広口壺	—	(14.4)	—	櫛描波状文，附加条一種附加２条	長石・赤色粒子・雲母	良	にぶい褐色	床面上	30%
P60	弥生	広口壺	[15.5]	(3.4)	—	附加条一種附加２条	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	にぶい橙色	覆土中	20%
P61	弥生	広口壺	—	(5.6)	—	Ｓ字状結節文，附加条一種附加２条	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	にぶい褐色	覆土中	20%
P62	弥生	広口壺	—	(3.8)	[6.0]	附加条一種附加２条，底部木葉痕	白色粒子・雲母	良	橙色	覆土中	10%
P136	弥生	広口壺	—	(18.5)	7.6	附加条一種附加２条，底部木葉痕	白色粒子・雲母	良	にぶい橙色	床面上	50%　PL72

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
ＴＰ22	弥生時代中期後半	口辺部・口唇部にＬＲの単節斜縄文施文。	覆土中層	
ＴＰ23・25	弥生時代中期後半	口縁部に刺突施文。	覆土中層	
ＴＰ24	弥生時代後期	附加条一種附加２条。口唇部にも施文。	覆土上層	
ＴＰ26～29	弥生時代中期後半	口縁部に指頭押捺。	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q10	磨石	(6.7)	4.1	2.5	81.5	砂岩	頂部剥落	
Q11	磨石	(5.7)	(4.4)	(4.6)	115.2	流紋岩	若干傷みあり	
Q12	磨石	(4.4)	5.1	3.2	82.3	凝灰岩		

第140号住居跡（第18図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南東部，Ｄ７d3区に位置している。

重複関係　第39号墳下の地山および第136号住居跡を掘り込み，第54号溝跡，第341～343号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長峰城跡の築城工事によって，住居跡の北東壁側が削平されている。残存部での規模は長軸5.62m，短軸3.58mで，隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は遺存状態の良い北東および南東側で70cm～80cmであり，外傾して立ち上がる。南東壁はＮ－25°－Ｗを指している。

床　平坦で，中央部は踏み固められている。壁溝は幅15～24cm，深さ６～10cm，断面はＵ字形で，北東壁際を巡っている。

ピット　２か所。ほぼ南東壁と平行して並び，Ｐ１は深さ93cm，Ｐ２は同じく15cmであるが，Ｐ１は主柱穴と思われるものの，Ｐ２は浅くその性格は不明である。

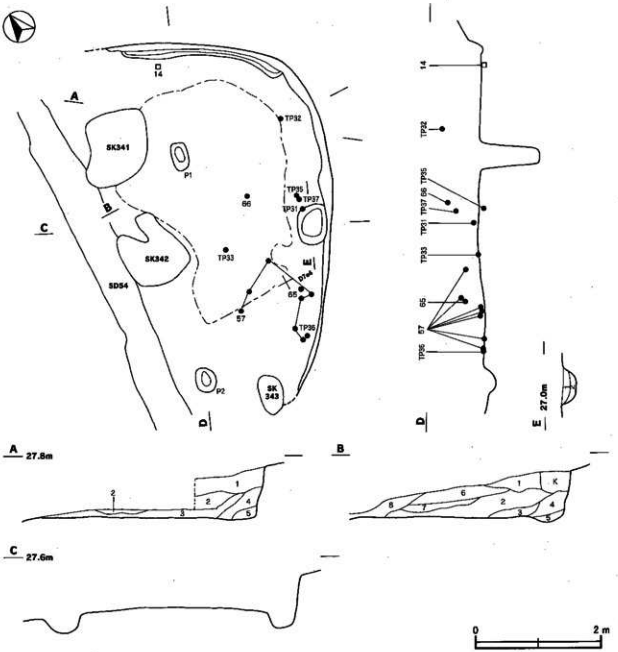
貯蔵穴　南東壁際に位置し，深さは26cmである。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量。
2　褐　　色　ローム粒子微量。粘性強。

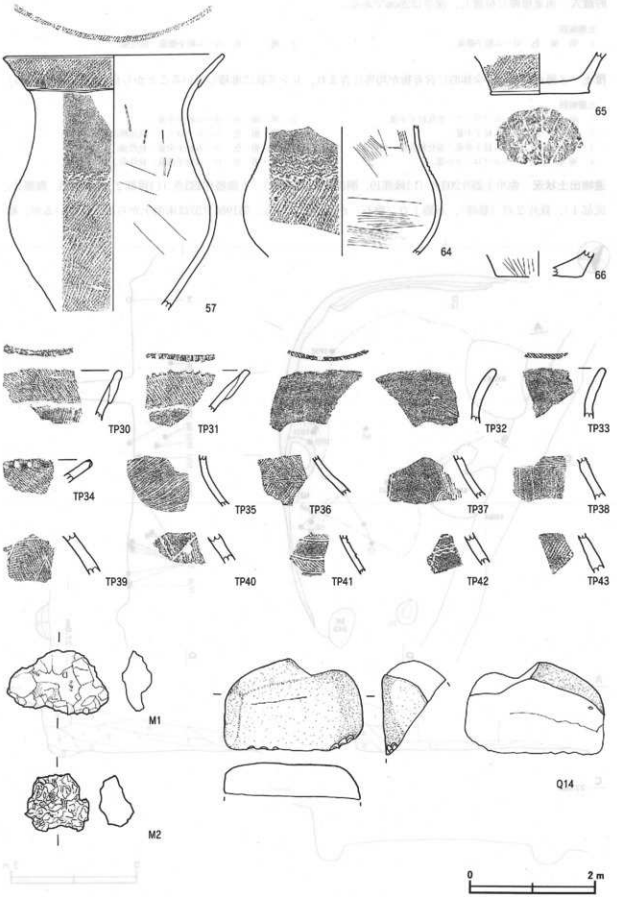
覆土　8層からなる。全体的に含有物が均等に含まれ，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えらる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量。
2　暗　褐　色　ローム粒子中量。
3　褐　　色　ローム粒子多量，炭化物少量。粘性強。
4　極暗褐色　ロームブロック小量。
5　黒　褐　色　ローム粒子少量。
6　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物少量。
7　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性強。
8　暗　褐　色　ローム粒子微量。粘性弱。

遺物出土状況　弥生土器片203点（口縁部19，胴部176，底部8），土師器片433点（口縁部2，体部425，脚部2，底部4），鉄片2点（鉄滓），石器1点（磨石）が出土している。第19図P57は床面上から出土しているが，破



第18図　第140号住居跡実測図



第19図　第140号住居跡出土遺物実測図

片の状態から本跡の廃絶直後に投棄されたものと思われる。またTP31・35は貯蔵穴周辺の床面から，TP36は南東壁の南側床面，Q14は北側床面からそれぞれ出土している。その他の遺物は，本跡の廃絶後に流れ込んだものと思われる。

所見　本跡の時期は，第136号住居跡との重複関係や出土した遺物などから弥生時代後期と考えられる。

第140号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P57	弥生	広口壺	17.2	(20.2)	—	附加条一種附加2条，S字状結節文	石英・雲母	良	明褐色	床面上	80% PL72
P64	弥生	広口壺	—	(10.3)	—	S字結節文，附加条一種附加2条	白色粒子・赤色粒子・雲母	良	橙色	覆土中	15%
P65	弥生	広口壺	—	(3.2)	[7.7]	附加条一種附加2条，底部本葉痕	白色粒子・赤色粒子・雲母	普通	にぶい橙色	覆土中層	10%
P66	弥生	壺	—	(2.1)	[6.7]	ミガキ	長石・雲母	普通	橙色	覆土上層	5%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP30・31	弥生時代後期	附加条一種附加2条。口縁部にも施文。TP30は縦位の櫛描文を施文。	TP31床面	
TP32・33	弥生時代中期後半	口唇部に附加条縄文施文。	TP32上層 TP33下層	
TP34	弥生時代中期後半	口縁部を指頭押捺。	覆土中	
TP35	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	床面	
TP36	弥生時代後期	格子状の平行沈線及び附加条一種施文。	床面	
TP37・38	弥生時代後期	櫛描文施文。TP37は波状文。	覆土上層	
TP39・40	弥生時代後期	羽状縄文を充填した連続山形文施文。	覆土中	
TP41	弥生時代中期後半	沈線区画内にRLの単節斜縄文充填。	覆土中	
TP42・43	弥生時代中期後半	TP42はS字状結節文，TP43は縄文羽状構成。	覆土中	

番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
Q14	磨石	(11.0)	(7.5)	(5.1)	(357)	砂岩	被熱破損	

番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	備考
M1	鉄滓	3.4	5.4	1.6	18.2		
M2	鉄滓	3.0	3.4	1.8	10.2		

第142号住居跡（第20図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南側縁辺部，D7i3区に位置している。周辺からは第143・144・147・148号住居跡などと古墳時代の住居跡が確認されている。

重複関係　第148号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の西側は第148号住居跡に掘り込まれ，南側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸3.06m，短軸1.48mの隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は10～11cmで，外傾して立ち上がり，主軸は北東壁からN－60°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，中央部は踏み固められて硬化している。

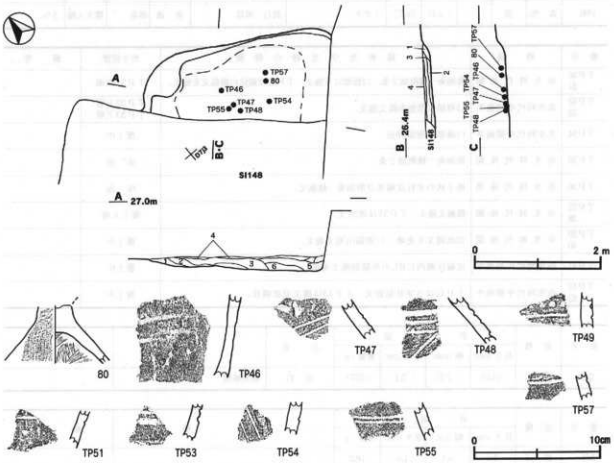
覆土　7層からなる。ロームブロックを含む層が多いことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土小ブロック微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック中量。
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
4　黒　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック微量。
6　暗　褐　色　ロームブロック少量。
7　褐　　色　ロームブロック少量。

遺物出土状況　縄文土器片20点（胴部20），弥生土器片30点（胴部29，底部1），土師質土器片8点（体部7，底部1）が出土している。第20図P80は覆土中層から正位の状態で出土している。TP46～49・51・53～55・57の縄文土器片および土師質土器片は，本跡が埋没する過程で混入したものであろう。

所見　本跡の時期は，出土した遺物と住居の形態から弥生時代後期と考えられる。



第20図　第142号住居跡・出土遺物実測図

第142号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P80	弥生	壺	—	(4.7)	—	LRの単節縄文	石英・長石・雲母	普通	赤褐色	覆土中層	70% PL72

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP46・49・51・53・55・57	縄文時代早期	沈線文及びTP49には刺突文施文。	覆土上～中層	

第151号住居跡（第21図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の基部，Ｄ６h3区に位置している。

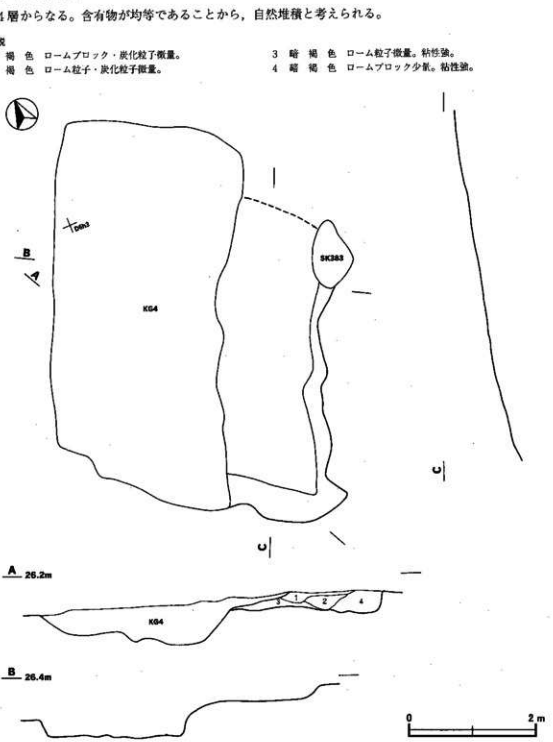
重複関係　第４号虎口跡，第12号堀に掘り込まれ，第383号土坑と重複している。

規模と平面形　第４号虎口跡，第12号堀によって住居跡の北側および西側を破壊されている。残存部の規模は長軸4.32ｍ，短軸1.62ｍで，方形または長方形と推定される。壁高は南東壁で20～30㎝で，外傾して立ち上がり，主軸は南東壁からＮ－59°－Ｗを指すと考えられる。

床　軟弱で，若干傾斜している。

覆土　４層からなる。含有物が均等であることから，自然堆積と考えられる。

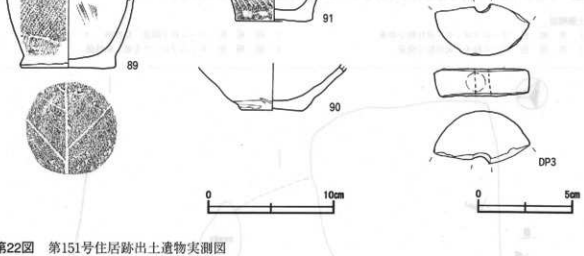
土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。
2　黒　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ローム粒子微量。粘性強。
4　暗　褐　色　ロームブロック少量。粘性強。



第21図　第151号住居跡実測図

遺物出土状況　縄文土器片１点（胴部１），弥生土器片121点（口縁部10，胴部102，底部９），土師器片175点（口縁部２，体部173），土製品１点（紡錘車）が出土している。第22図Ｐ89の広口壺は北東部の覆土下層から出土している。土師器片は，本跡が埋没する過程で混入したものである。

所見　本跡は，第４号虎口跡と軸方向が一致し，床面も傾斜していることから，城跡に伴う遺構の可能性も考慮したが，断面から第４号虎口跡が本跡を掘り込み，また出土した遺物も城跡より先行するものであることなどから住居跡と判断した。本跡の年代は，出土した土器から弥生後期と考えられる。



第22図　第151号住居跡出土遺物実測図

第151号住居跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P89	弥生	広口壺	—	(6.1)	7.5	LRの単節縄文，底部木葉痕	石英・雲母	良	にぶい褐色	覆土下層	30%
P90	弥生	—	—	(3.7)	5.0	ナデ，底部ナデ	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	良	にぶい黄褐色	覆土中	10%
P91	弥生	広口壺	—	(2.3)	6.0	附加条二種附加２条，底部ナデ	石英・雲母	良	にぶい赤褐色	覆土中	10%

番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		上面径(cm)	下面径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
DP3	紡錘車	(4.8)	(4.8)	1.5	(0.8)	(19.6)	土製	繊維混入	45%　PL77

（２）溝跡

第59号溝跡（第23図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南東部，Ｄ７c5区に位置している。本跡は第39号墳の北西部にあたり，南西には第136・138・139・140号住居跡が構築されている。

重複関係　第39号墳下の地山を掘り込んでおり，新旧関係は不明であるが，第136号住居跡と重複している。

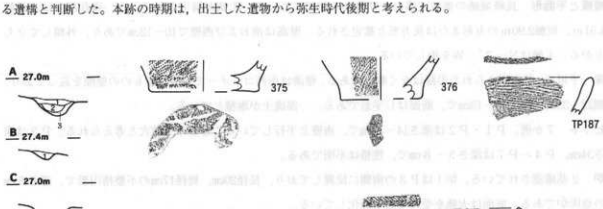
規模と形状　上幅0.32～0.71ｍ，下幅0.09～0.18ｍ，深さ0.12～0.27ｍで長さ6.86ｍが確認され，断面はＵ字形である。ほぼ一直線に走り，主軸はＮ－53°－Ｗである。北西部は長峰城跡築城に伴う工事によって削平され，本来はさらに延びると思われる。

覆土　3層からなり，含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量。
2　褐　　色　ロームブロック少量。粘性強。
3　褐　　色　ローム粒子少量。

遺物出土状況　弥生土器片27点（口縁部3，胴部21，底部3），土師器片14点（体部14）が出土している。第23図P375・376は1層および2層から出土しており，他の遺物も含めて本跡が埋没する過程で流れ込んだものと思われる。

所見　当初，本跡は第39号墳に伴う溝と想定したが，他に確認されないことや，遺物などから古墳より先行する遺構と判断した。本跡の時期は，出土した遺物から弥生時代後期と考えられる。



第23図　第59号溝跡・出土遺物実測図

第59号溝跡出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P375	弥生	広口壺	—	(2.1)	[8.4]	附加条一種附加2条	石英・雲母	普通	褐色	1・2層	10%
P376	弥生	広口壺	—	(3.4)	[6.4]	附加条一種附加2条	白色粒子・石英	良	橙色	1・2層	10%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP187	古墳時代前期	内外面にハケ目。	1・2層	
TP188	古墳時代前期	口縁部に羽状縄文を施文。	1・2層	
TP189	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	1・2層	

2　古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡9軒，古墳1基，溝跡1条が確認されている。竪穴住居跡は第3号塚の墳丘下，Ⅰ郭・Ⅵ郭の縁辺部，溝跡はⅣ郭の縁辺部に位置している。これらは弥生時代の遺構と同じく，後世の削平を受けて遺存状態は良くない。遺物は壺・高坏・埴輪片が出土している。古墳は長峰古墳群に含まれ，次節にその内容を述べる。

（1）竪穴住居跡

第130号住居跡（第24図）

位置及び確認状況　Ⅵ郭を形成している台地縁辺部付近，E 1 f6区に位置している。第3号塚下の黒色土を掘り下げる際にロームブロックを含む土層の落ち込みを認め，精査して確認されたが住居跡の掘り込みは浅く，地山ローム層の上面にとどまっており，東側は壁溝で範囲を確定した。本跡の西側に第133号住居跡が所在している。

重複関係　第3号塚下の黒色土および第131号住居跡，第516号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　長峰城跡の築城工事および後世の改変によって，北側が削平されている。残存部分は，長軸4.51m，短軸2.90mの方形または長方形と推定される。壁高は南および西壁で10～12cmであり，外傾して立ち上がる。主軸はN－3°－Wを指している。

床　平坦で，踏み固められた形跡はなく軟弱である。壁溝は南西コーナーで途切れるものの壁際を巡っており，幅22～35cm，深さ10～13cmで，断面はU字形である。一部焼土が堆積している。

ピット　7か所。P 1・P 2は深さ14～18cmで，南壁と平行していることから主柱穴と考えられる。P 3は深さ34cm，P 4～P 7は深さ5～8cmで，性格は不明である。

炉　2基確認されている。炉1はP 3の南側に位置しており，長径20cm，短径17cmの不整楕円形で，深さ5cmの地床炉である。底面は火熱を受けて若干硬化している。

炉2は炉1の南東，やや東壁寄りに位置しており，長径22cm，短径19cmの楕円形で，深さ5cmの地床炉である。底面は同じく火熱を受けて若干硬化している。

炉1土層解説

1　赤　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック少量。粘性弱，しまり強。
2　赤　褐　色　焼土粒子中量。粘性弱，しまり強。
3　赤　褐　色　焼土粒子中量。しまり強。
4　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子微量。粘性弱。
5　暗赤褐色　焼土粒子微量。
6　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子微量。

炉2土層解説

1　赤　褐　色　焼土粒子中量，ロームブロック微量。粘性弱。
2　暗赤褐色　焼土粒子微量。粘性弱。
3　黒　褐　色　焼土粒子微量。粘性弱。
4　黒　褐　色　焼土粒子微量。

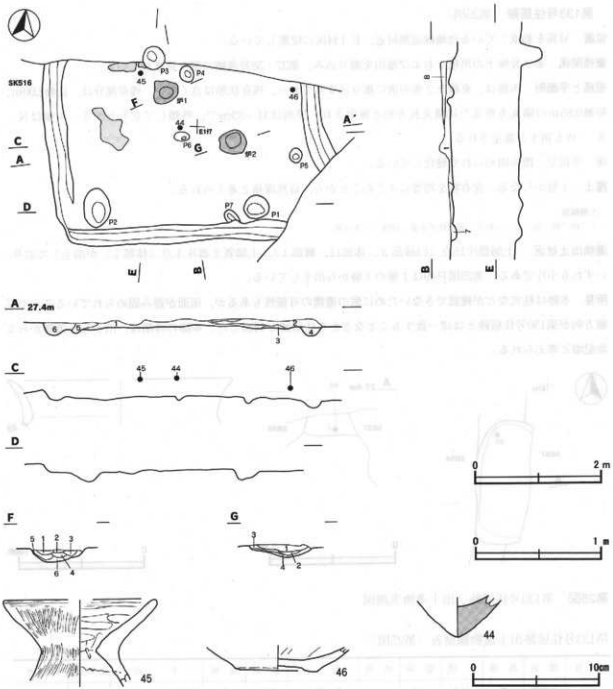
覆土　8層からなる。ロームブロックを含む土層が多く，人為堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2　黒　褐　色　ロームブロック微量。
3　暗　褐　色　ローム粒子微量。
4　黒　褐　色　ローム粒子微量。
5　黒　褐　色　ロームブロック・赤色粒子微量。
6　黒　褐　色　ロームブロック少量。
7　暗　褐　色　ロームブロック微量。
8　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。

遺物出土状況　縄文土器片14点（胴部13，底部1），土師器片56点（口縁部6，体部48，底部2）が出土している。第24図P45は1層の上面，P46は2層の上面からそれぞれ出土している。P44を含む縄文土器片は，本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から5世紀初頭と考えられる。



第24図　第130号住居跡・出土遺物実測図

第130号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P45	土師器	器台	[11.8]	(6.9)	—	石英・長石・雲母	褐色	良	外面ハケ目，内面ナデ	1層	40%
P46	土師器	壺	—	(1.9)	[6.2]	白色粒子・赤色粒子	橙色	良	内外面・底部ナデ	2層	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P44	縄文土器	尖底	—	(3.3)	—	ナデ	石英・長石・雲母・繊維	普通	黒褐色	覆土中層	5%

第133号住居跡（第25図）

位置　Ⅵ郭を形成している台地縁辺部付近，Ｅ１f4区に位置している。

重複関係　第３号塚下の黒色土および地山を掘り込み，第37・38号溝跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は，東西を２条の溝に掘り込まれており，残存状態は良くない。残存部分は，長軸2.00m，短軸0.85mの隅丸方形または隅丸長方形と推定され，壁高は31～33cmで，外傾して立ち上がる。主軸はＮ－８°－Ｗを指すと推定される。

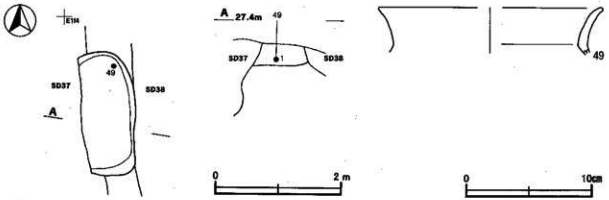
床　平坦で，踏み固められて硬化している。

覆土　１層からなる。含有物を均等にふくむことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子・赤色粒子少量。粘性・しまり弱。

遺物出土状況　土師器片15点（口縁部３，体部11，脚部１），土師質土器片１点（体部１）が出土しており，いずれも小片である。第25図Ｐ49は１層の下層から出土している。

所見　本跡は柱穴などが確認できないために他の遺構の可能性もあるが，床面が踏み固められていることや主軸方向が第130号住居跡とほぼ一致することなどから住居跡と判断した。本跡の時期は，出土した遺物から５世紀頃と考えられる。



第25図　第133号住居跡・出土遺物実測図

第133号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P49	土師器	甕	[17.8]	(3.6)	—	石英・雲母	橙色	良	内外面ナデ	1層	5%

第134号住居跡（第26図）

位置　Ⅵ郭を形成している台地の南側縁辺部，Ｅ１j8区に位置している。

重複関係　第135号住居跡を掘り込み，第547号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の南側は調査区域外に延び，残存部分は長軸5.04m，短軸1.80mの方形または長方形と推定される。壁高は40～50cmで，ほぼ垂直に立ち上がり，主軸はＮ－４°－Ｗを指すと考えられる。

床　平坦で，若干硬化している。

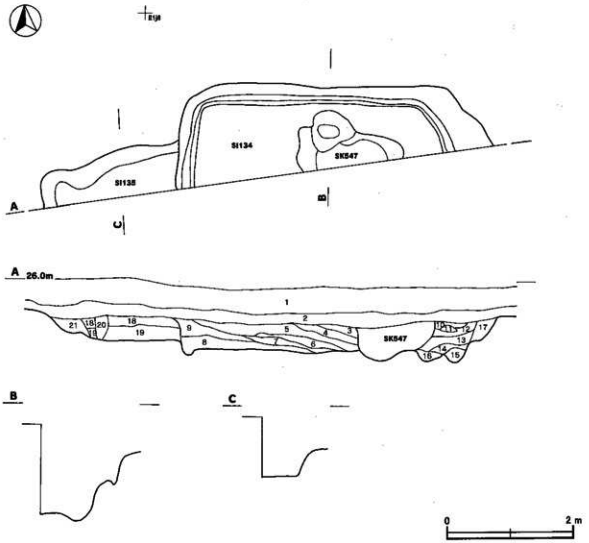
覆土　17層からなる。１・２層は表土層で，本跡は２層の下から掘り込まれている。ロームブロックを含む層が多く，３～８層にかけて黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2 褐 色 ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
3 褐 色 ロームブロック微量。しまり弱。
4 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
5 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
6 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
7 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。粘性強，しまり弱。
8 黒 褐 色 ローム粒子微量。粘性強，しまり弱。
9 暗 褐 色 ローム粒子微量。しまり弱。
10 暗 褐 色 ローム粒子微量。粘性・しまり弱。
11 暗 褐 色 ロームブロック少量。しまり強。
12 黒 褐 色 ローム粒子微量。
13 暗 褐 色 ロームブロック微量。しまり弱。
14 暗 褐 色 ローム粒子微量。しまり弱。
15 褐 色 ロームブロック微量。粘性強。しまり弱。
16 暗 褐 色 ロームブロック微量。粘性強。しまり弱。
17 褐 色 ローム粒子中量。しまり強。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は，第130号住居跡と主軸方向がほぼ一致することや平面形などから古墳時代と推定される。



第26図 第134・135号住居跡実測図

第135号住居跡（第26図）

位置 Ⅵ郭を形成している台地の南側縁辺部，E 1 j7区に位置している。

重複関係 第134号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 本跡の東側は第134号に掘り込まれ，南側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸1.52m，短

軸0.95mの隅丸方形または隅丸長方形と考えられる。壁高は31～42cmで，外傾して立ち上がる。主軸は北壁からN－12°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，若干硬化している。

覆土　4層からなり，含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説

18　褐　　色　ローム粒子少量。粘性強，しまり弱。
19　褐　　色　ロームブロック少量。粘性強。
20　暗　褐　色　ローム粒子少量。しまり弱。
21　褐　　色　ローム粒子中量。しまり強。

遺物　遺物は出土していない。

所見　本跡の時期は，重複関係および平面形などから，古墳時代でも第134号住居跡に先行する時期と推定される。

第143号住居跡（第27図）

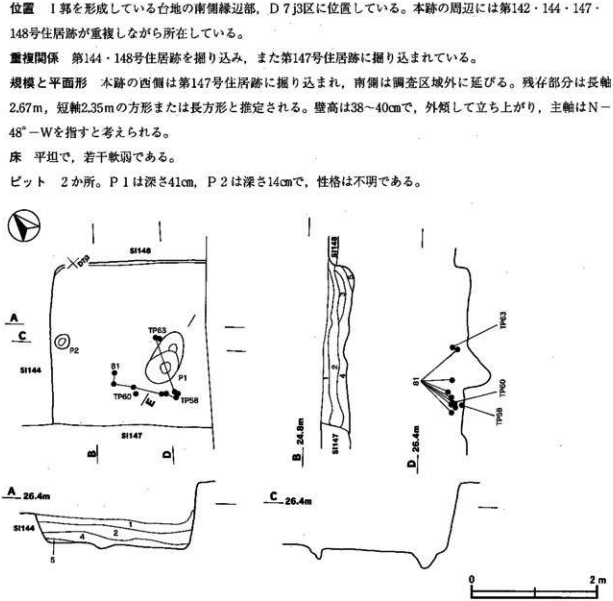
位置　Ⅰ郭を形成している台地の南側縁辺部，D7j3区に位置している。本跡の周辺には第142・144・147・148号住居跡が重複しながら所在している。

重複関係　第144・148号住居跡を掘り込み，また第147号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の西側は第147号住居跡に掘り込まれ，南側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸2.67m，短軸2.35mの方形または長方形と推定される。壁高は38～40cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－48°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，若干軟弱である。

ピット　2か所。P1は深さ41cm，P2は深さ14cmで，性格は不明である。



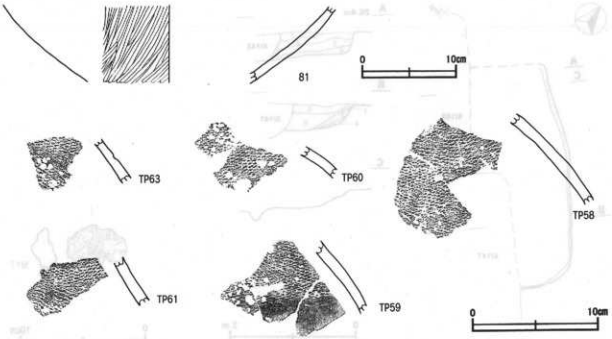
第27図　第143号住居跡実測図

覆土　5層からなる。含有物を均等に含み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ローム ブロック，焼土ブロック・炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ローム ブロック中量。
4　褐　　色　ローム ブロック，炭化粒子微量。
5　褐　　色　ローム ブロック中量。

遺物出土状況　弥生土器片58点（胴部58），土師器片19点（体部19）が出土している。第28図P81，TP58～61・63は4層中のほぼ同じレベルから出土しており，投棄された可能性がある。弥生土器片は小片で，本跡が埋没する過程で混入したものであろう。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から4世紀前葉と考えられる。



第28図　第143号住居跡出土遺物実測図

第143号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P81	土師器	壺	—	（8.0）	—	石英・赤色粒子	にぶい褐色	良	外面ミガキ，内面剥落	11層	10%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP58～61・63	古墳時代前期	壺形土器。体部上段に網目状文施文。体部ヘラミガキ。	覆土上層	

第144号住居跡（第29図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地南側縁辺部，D7j2区に位置している。

重複関係　第148号住居跡を掘り込み，また第143・147号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の西側は後世の遺構によって削平され，南側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸3.37m，短軸1.57mの隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は32～34cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－51°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，若干硬化している。

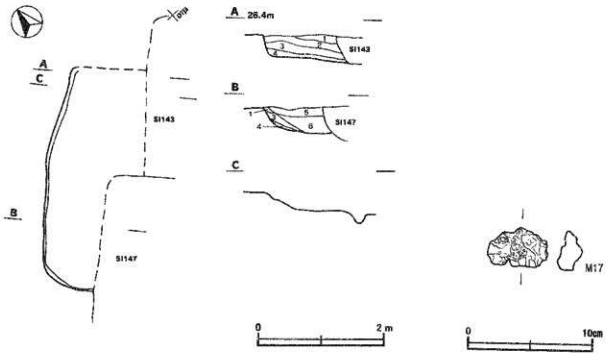
覆土　6層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム ブロック・炭化粒子少量。
2　暗　褐　色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ローム ブロック少量。
4　黒　　色　ローム ブロック少量，炭化粒子微量。
5　黒　褐　色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
6　暗　褐　色　ローム ブロック・炭化粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片23点（胴部23），土師器38点（口縁部1，体部37），陶器片1点，鉄片1点（鉄滓）が出土し，弥生土器片・陶器片・鉄片は埋没する過程で混入したものである。土器は図化できなかった。

所見　本跡の時期は，重複関係および平面形などから古墳時代の遺構と考えられる。



第29図　第144号住居跡・出土遺物実測図

第144号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M17	鉄滓	2.1	3.3	1.3	9.8		

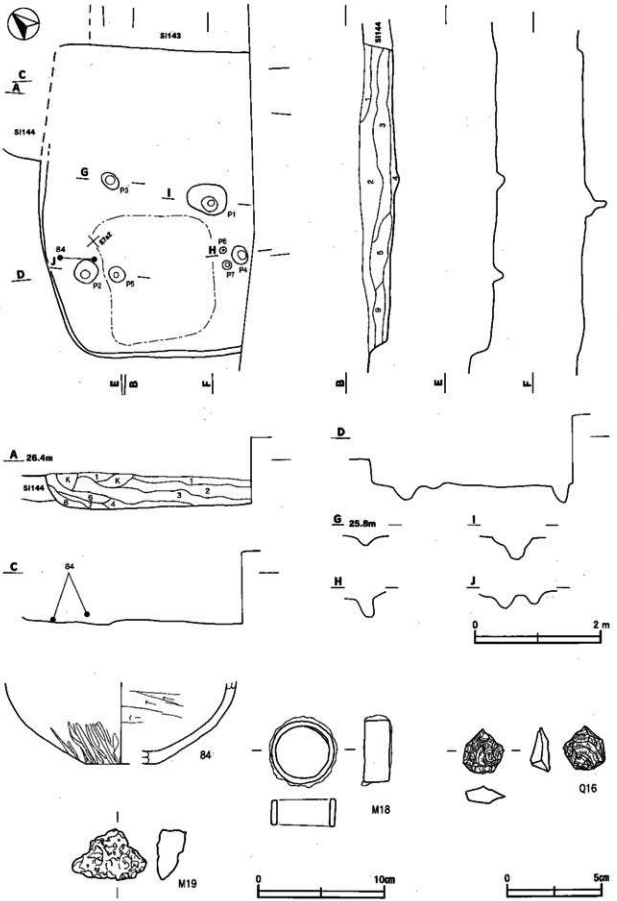
第147号住居跡（第30図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南側縁辺部，E 7 a2区に位置している。

重複関係　第143・144号住居跡を掘り込んでいる。

規模と平面形　本跡の南側は調査区域外に延びる。調査できた部分の形状から長軸4.81m，短軸3.39mの隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は32～45cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－49°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，南西側の部分は硬化している。



第30図　第147号住居跡・出土遺物実測図

ピット　7か所。P１・P２は深さ14～33cmで，南西壁とほぼ並行していることから柱穴の可能性がある。P４は深さ33cm，P３・P５～P７は深さ10～16cmで，性格は不明である。

覆土　9層からなる。含有物が均等に含まれてレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。
4　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。
6　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
7　暗　褐　色　ロームブロック少量。
8　暗　褐　色　ロームブロック微量。
9　暗　褐　色　ローム粒子少量。

遺物出土状況　弥生土器片112点（胴部112），土師器片17点（口縁部２，体部12，底部３），土師質土器片８点，石片１点（剥片），鉄片２点（不明鉄器１，鉄滓１）が出土している。第30図P84は覆土下層から出土しており，本跡に伴う遺物と考えられる。その他の遺物は，覆土上層から分散して出土しており，本跡が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。

所見　本跡の時期は，出土した遺物や重複関係などから４世紀前葉と考えられる。

第147号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P84	土師器	壺	—	(6.5)	[5.6]	炭石・赤色粒子・雲母	にぶい黄橙色	良	外面ナデ・ミガキ，内面ヘラ削り	覆土下層	50%

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q16	剥片	2.3	2.2	1.0	3.54	チャート		

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M18	不明鉄製品	3.3	1.4	0.3	27.6	環状を呈する	
M19	鉄滓	2.7	3.9	1.5	14.3		

第148号住居跡（第31図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南側縁辺部，D７i2区に位置している。

重複関係　第142号住居跡を掘り込み，第143・144号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の西側は後世の遺構によって削平され，南側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸4.98m，短軸3.91mの方形または長方形と推定される。壁高は８～15cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－42°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，若干硬化している。

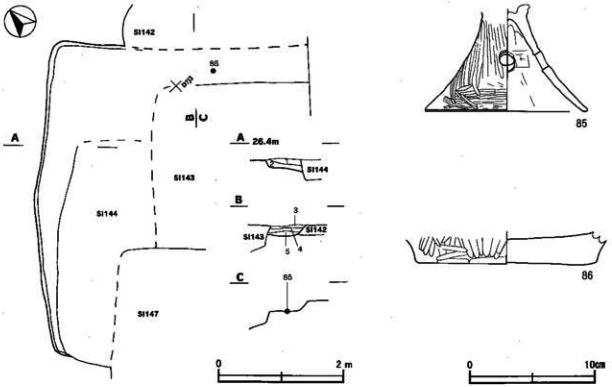
覆土　5層からなる。含有物が均等に含まれてレンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
2　褐　　色　ロームブロック少量。
3　暗　褐　色　ロームブロック少量。
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片３点（胴部３），土師器片４点（体部２，脚部１，底部１）が出土している。第

31図P85は床面上から正位の状態で，P86は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見　本跡の時期は，出土した遺物から4世紀前葉と考えられる。



第31図　第148号住居跡・出土遺物実測図

第148号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P85	土師器	高坏	—	(7.9)	[13.0]	赤色粒子・雲母	橙色	良	外面ミガキ，内面ヘラ削り後ナデ	床面上	50%　PL72
P86	土師器	壺	—	(2.6)	[14.2]	石英	明赤褐色	良	外面ミガキ	覆土中層	5%

第155号住居跡（第32図）

位置及び確認状況　Ⅱ郭を形成している台地の西部付近，D4j0区に位置している。本跡の東に隣接して第464号土坑，西に隣接して第406・408・409・453・454号土坑，南に隣接して第455～457号土坑が構築されている。本跡は炉が確認され，周辺を精査したところ方形に黒色土の落ち込みが認められたため住居跡と判断した。

重複関係　第464号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は長峰城跡の築城の際，上面をかなり削平されている。残存部での規模は長軸2.90m，短軸2.40mの長方形と推定される。壁高は2～3cmで，主軸はN－3°—Wを指すと思われる。

床　平坦で，軟弱である。

ピット　4か所。P1・2は深さ12～22cmで，配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ18cmで，南辺付近に位置することから，出入り口のピットと想定される。P4は深さ29cmで，性格は不明である。

覆土　10層からなる。ロームブロック・焼土ブロックを多く含むことから，人為堆積と思われる。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量。
2 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量。
3 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。
4 にぶい赤褐色 焼土ブロック・炭化物中量。
5 暗 褐 色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量。
6 にぶい赤褐色 ロームブロック多量。
7 暗 赤 褐 色 焼土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化物微量。
8 暗 赤 灰 色 焼土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量。
9 黒 褐 色 焼土ブロック・炭化物中量，ロームブロック微量。
10 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子中量，焼土ブロック微量。

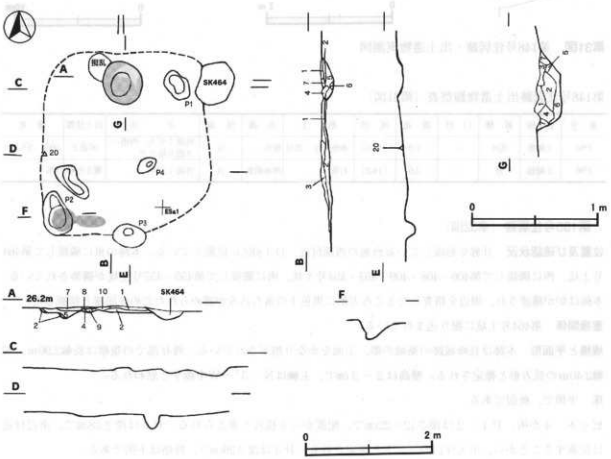
炉 北辺の中央部付近に構築され，長径70cm，短径62cmの楕円形で，深さ20cmの地床炉であり，底面は火熱を受けて硬化している。

土層解説

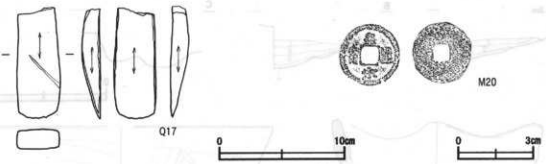
1 暗 赤 褐 色 焼土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化物微量。粘性・しまり弱。
2 暗 赤 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック少量，炭化物微量。粘性弱。
3 暗 赤 褐 色 焼土ブロック・炭化物中量，ロームブロック少量。粘性弱。
4 暗 赤 褐 色 ロームブロック・炭化粒子中量，焼土ブロック少量。粘性弱。
5 褐 色 炭化粒子中量，ロームブロック・焼土ブロック少量。
6 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。
7 褐 色 ロームブロック中量。

遺物出土状況 弥生土器片1点（胴部1），土師器片19点（口縁部3，体部14，底部2），須恵器片1点（脚部1），石製品片1点（砥石1），古銭1点（皇宋通寶1）が出土しており，弥生土器片・石製品片・古銭は本跡の埋没に伴って混入したものである。土器は細片のため，図化できなかった。

所見 本跡は上面を削平されてはいるが，住居の掘り方部分が残存したものと思われる。本跡の時期は，出土した遺物などから古墳時代と考えられる。



第32図 第155号住居跡実測図



第33図　第155号住居跡出土遺物実測図

第155号住居跡出土遺物観察表（第33図）

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q17	砥石	8.7	3.4	1.5	64.4	凝灰岩	4面研磨痕，縦方向の擦痕	

番号	銭名	計測値				材質	初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔径(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		年号	西暦		
M20	皇宋通寶	2.44	0.7×0.7	0.9	2.6	銅	寶元元年	1253	鋳上がりやや不良	PL80

（2）溝跡

第67号溝跡（第34図）

位置及び確認状況　Ⅳ郭の北側縁辺部，E3b0区付近に構築されている。当初Ⅳ郭の整形面と見られたが，壁面がなだらかであることから溝跡と判断した。

規模及び形状　北側は調査区域外に延びる。規模は調査した範囲で，長さ11.6m，幅1.5m，深さ0.4mで，若干北側に湾曲する。断面は弧状と思われ，主軸はN－73°－Eを指すと考えられる。

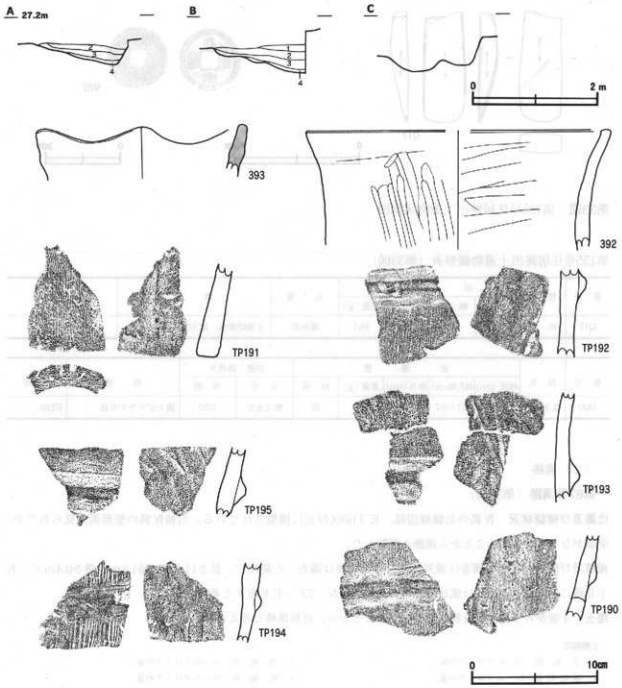
覆土　4層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック少量。
2　暗褐色　ロームブロック中量。
3　黒　褐　色　ロームブロック中量。
4　暗　褐　色　ロームブロック中量。

遺物出土状況　縄文土器片6点（口縁部2，胴部4），土師器片44点（口縁部4，体部36，底部4），埴輪片45点が出土しており，これらは本跡の埋没に伴って流れ込んだものと思われる。第34図TP190～195は，覆土中層から下層にかけて出土している。

所見　本跡はⅣ郭北側縁辺部に構築されており，縁辺部の整形面と考えられたが，覆土は自然堆積であることから溝跡と判断した。また出土した遺物は土師器片，埴輪片が多く，古墳の周溝の可能性も考えられる。本跡の時期は，古墳の周溝であれば，出土した遺物などから6世紀後半と考えられる。



第34図　第67号溝跡・出土遺物実測図

第67号溝跡出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P392	縄文土器	深鉢	[24.0]	(9.2)	—	ナデ・ミガキ	石英・赤色粒子・雲母	良	にぶい橙色	覆土中	早期　10%
P393	縄文土器	深鉢	[16.8]	(3.6)	—	ナデ	赤色粒子・雲母	良	にぶい橙色	覆土中	早期　10%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP190～195	古墳時代後期	円筒埴輪－外面ハケ目，内面ナデ。	TP190～193覆土中	

4　まとめ

長峰遺跡の調査で確認された遺構は，竪穴住居跡18軒・溝跡２条・土坑10基であり，遺物は旧石器時代から古墳時代にかけての資料が出土している。また，遺跡の営まれた台地は，中世の築城工事による大きな改変を受け，遺構の残存状況は良くない。

ここでは，時代別に各時代の主要な遺構と遺物についての概要を述べてまとめとする。

（１）　旧石器時代

旧石器時代の遺物としては，石核・石槍・掻器・剥片が出土している。石器が集中している地点や地層は確認できず，遺物は表土及び後世の遺構の覆土中から出土している。石材はチャート・頁岩・安山岩・瑪瑙・玉随が見られる。

（２）　縄文時代

早期の竪穴住居跡１軒，土坑10基が確認されている。第131号住居跡は第３号塚下に検出され，黒褐色土を掘り込んで構築されている。当住居跡は，調査区域西部の台地が谷によって狭くなった痩せ尾根上に位置している。壁などは明確でなく，柱穴が円形に並ぶものと想定され，床面には硬化面を認められなかった。炉と想定される焼土もなく，住居の使用は比較的短期間にとどまったものと考えられる。また，土坑は住居跡と重複して確認されている。形状は不整形を呈し，遺物は同じく早期の土器が出土している。このほかにも遺構外や後世の遺構の覆土から早期の土器片が少数ながら出土しているため，密度は薄いものの遺構が存在したようである。しかし，その後の時期では遺構・遺物とも確認されず，生活の場として利用された形跡は見られない。

（３）　弥生時代

竪穴住居跡８軒，溝１条が確認されている。遺構は台地が削平されている関係上，長峰第39号墳の墳丘下と台地の縁辺部にだけ残存している。

遺構は遺物から大きく２時期に分類される。Ⅰ期は中期後半で，第136号住居跡が該当する。藤樹居跡は隅丸方形の平面プランを持ち，南関東の宮ノ台期の土器が出土している。調査区域内からは１軒しか確認されなかったが，長峰第39号墳下の旧表土から甕を主体に同時期の土器が出土し，他にも遺構が存在した可能性が考えられる。また，同時期の土器片は調査区域の西部ではほとんど見られずに，東部から比較的多く出土し，東部を中心に遺構が存在した可能性がある。昭和61・62年度の調査でも中期後半の住居跡が３軒調査され[1]，今回の調査の結果，谷の東側にも集落が広がることが確認された。周辺では屋代Ｂ遺跡から住居跡が確認され[2]，また屋代Ａ遺跡でも覆土に混入した遺物が出土しており[3]，沖積地に面する台地上に集落が営まれている。この時期には東京湾周辺からの人と文物の移動があり，小規模な集落が形成されて水田の開発に当たったものと考えられる。

Ⅱ期は弥生後期の遺構で，第125・127・138・139・140・142・151号住居跡，第59号溝跡が該当し，集落は中期とほぼ同じ場所に営まれている。遺構に伴わない土器片は調査区域西部からも出土しており，遺構数の増加がその背景にある。昭和61・62年度の調査区域では，後期になると集落を構成する住居跡の数が増加して規模が拡大傾向にあることが明らかにされている。屋代Ａ遺跡・屋代Ｂ遺跡でも同じ傾向が認められ，後期には遺跡の北側の支谷や南側の沖積地の開発が進んで，Ⅰ期よりもより安定した収穫を得られるようになったこと

が大きく影響したと思われる。遺物では，Ｉ期の遺物が東京湾方面の影響を受けていたのに対して，在地的な様相を強くもつ傾向が認められる。土器は広口壺が主体的な器形となり，これ以外には蓋が１点出土しただけである。器面の文様も，口縁部外面または胴部下半に附加条一種附加２条の縄文を施文するものが主流を占め，附加条一種附加１条を施文するもの，ＬＲあるいはＲＬの単節斜縄文を施文する土器の割合は少ない。また，胴部文様帯と頸部との境界に櫛描波状文を施すものや，櫛描による縦位の平行沈線を施す破片も見られ，これらは十王台式土器の影響を受けたものであろう。

（４）　古墳時代

竪穴住居跡９軒，溝跡１条，古墳１基が確認された。古墳については次節で記述し，ここではそれ以外の遺構について述べる。

遺構は，削平を免れた第３号塚下部，台地縁辺部に位置し，弥生時代後期に引き続いて集落が形成されている。年代が明らかな遺構のうち，第143・147・148号住居跡は４世紀前葉のもので，後述する長峰第39号墳や桜山古墳の築造の母胎となった集落が広がっていたと考えられる。集落は，５世紀初頭に位置付けられる第130号住居跡や第３号塚下から出土した５世紀中葉の土器などから見て，少なくとも中期まで存続したことが裏付けられる。ところが６世紀代に入ると集落を移動したようで，生活の痕跡はほとんど認められなくなる。昭和61・62年度の調査区域でも５世紀中葉を最後に廃絶しており，同一の動きを見せている。その後は古墳が築造され，墓域として利用されている。

このほか遺構に伴うものではないが，第３号塚の旧表土付近から手捏ねの土器が集中して出土し，何らかの儀礼的な行為が行われている。その内容は明らかではないが，第３号塚を古墳と想定することが可能であるなら，地鎮祭的な行為と見ることができるだろう。

本遺跡は，古墳時代にも集落が継続して営まれ，それは長峰第39号墳や桜山古墳の造営の母胎となったものと思われる。集落は，弥生時代に続いて台地の南北に広がる低地に主な生産基盤を置いたと考えられ，何らかの理由で５世紀中葉にはその機能を終えている。後述するように，長峰第39号墳と桜山古墳を造営した首長系列は，中期に入りその勢力を衰退させたものと考えられるが，豪族の動向が集落の消長に影響を与えたと言えるだろう。

註

(1)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19　長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集　1990年

(2)　茨城県教育財団「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17　屋代Ｂ遺跡Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第45集　1988年

(3)　茨城県教育財団「龍ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書６　成沢遺跡・屋代Ａ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第14集　1982年

第4節　長峰古墳群

1　第39号墳（第35・36・37図）

位置　1郭を形成している台地南東部先端付近，D7d5区付近に位置している。本墳は長峰古墳群に属し，その中で最も東側に形成された古墳である。また，本墳の西南西約500mの独立した台地上には桜山古墳が所在し，平成2年に発掘調査が実施された。

重複関係　第136号住居跡，第138～140号住居跡は，本墳下の地山を掘り込んでいる。墳丘上には第281号土坑が構築されている。また本跡の南側には土壇状の第1号基壇が位置しており，この上に長峰地区の鎮守である稲荷神社が鎮座している。

測量の概要　25cmの等高線測量を実施したが，墳丘端部の状況は北側と南側で異なる。また，27.00mの等高線は墳丘の東西及び北側で直線的に走り，北東および北西に明瞭なコーナーを形成している。一方南側では稲荷神社の基壇及びその両側で等高線の張り出しがみられ，稲荷神社建立に伴う改変が認められる。27.25mの等高線はやや直線的に走り，南東および南西コーナーを形成している。このため墳丘端部のラインは，北側は27.00mの等高線，南側は27.25mの等高線がそれぞれ相当すると考えられる。墳頂部の標高は30.10mで，当遺跡では第3号塚についで高い場所となっている。規模は現況で東西14.1m，南北13.7mの方形で，高さは2.9mであり，主軸はN－3°－Wとほぼ真北に近い方向を指している。また28.00mの等高線付近にややフラットな面があり，2段築成の方墳となる可能性が想定されたが，現況から旧状を想定することは困難である。

周溝の調査　周溝を確認するため，墳頂部のD7d5グリッド杭より2m南を中心点として，東西に幅2mでA・B2本のトレンチを設定した。本跡の西側は尾根続きとなるため，測量に現れない周溝の存在が想定された。Aトレンチは中心点から墳丘東側へ18m，Bトレンチは同じく墳丘西側へ17mの長さで設定した。Aトレンチは深さ18～60cmで地山が確認され，台地縁辺部に向かって緩やかに傾斜している。墳丘東側は平坦で，周溝などの落ち込みは確認されなかった。Bトレンチは深さ10～30cmと浅い位置で地山となり，ほぼ平坦である。墳丘端部に沿って第54号溝の落ち込みを確認したが，周溝は確認されなかった。

墳丘の調査　墳丘は中心点を基準に4分割して掘り下げた。本跡の土層は13層からなる。

土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子中量，赤色粒子微量。粘性・しまり弱。
2　褐　　色　ロームブロック多量。粘性・しまり弱。
3　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
4　暗　褐　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性強。
6　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
7　暗　褐　色　ロームブロック多量，炭化粒子微量。しまり強。
8　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
9　黒　褐　色　炭化粒子少量，焼土粒子微量。粘性弱。
10　暗　褐　色　ロームブロック少量。
11　にぶい黄褐色　ロームブロック多量。粘性・しまり強。
12　褐　　色　ロームブロック多量。粘性・しまり強。
13　褐　　色　ロームブロック微量。

7層は盛土の基底部に相当し，これより下位の層は墳丘構築前の土層である。7層下の土層はほぼ水平に堆積しており，墳丘端部ではこれらの土層と地山を削り出すことによって周囲を整形している。しかし，墳丘の外側で対応する土層がみられないことや，前述したように周溝が検出されないことなどから，本墳の周囲は築城の際に大きく削平されたことが確認され，現在の墳形は見かけのものと考えられる。削平の規模は0.4～1.5mに達し，特に北側で顕著である。墳丘構築前の地形は明確ではないものの，断面を観察すると6層は東西方向では東から西に向かって，南北方向では南から北に向かって緩やかに傾斜している。このため本墳は，自然地形の高まりを選んで構築されたと考えられる。現存する墳丘の高さは約2mで，7層を基底部

第35図　第39号墳実測図（1）

とし，6・11～13層を積みあげたのちに4・5層を広く盛って構築している。標高28.00m付近のフラットな面は2段築成によるものとみられたが，4・5層を削って2層が堆積している状況から墳丘構築によるものではないと判断される。1～3層は粘性・しまりが弱いことから，本墳の構築に直接関係する上層ではなく，築城時の改変に伴うものであろう。

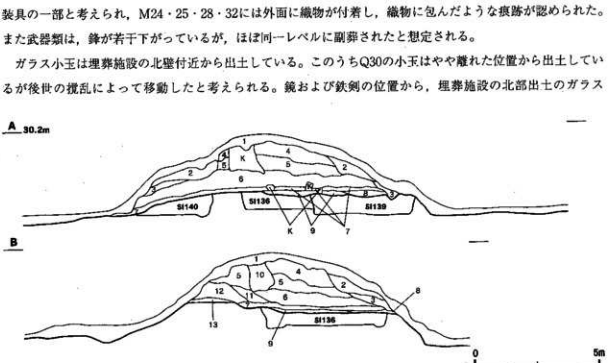
埋葬施設　墳丘の南側斜面から確認され，5層の上面に構築されている。大半は後世の削平によって破壊され，盂宗竹の根が繁茂していたことから遺存状態は良くない。墓壙の掘り込みや棺を固定する痕跡も確認できなかった。現存する規模は長さ60cm，幅90cmで，深さは10～20cmである。主軸は剣の出土状況からN－42°－Eと推定される。断面は2段に掘り込まれており，木棺の可能性が考えられる。

土層解説
1 暗　褐　色　ローム粒子少量。しまり弱。

埋葬施設遺物出土状況　鏡1面，鉄剣2口，短剣約3口，鏃片3点，鉄器片1点（刀装具片1），ガラス小玉56点が出土している。M23は白銅質の内行花文鏡で，表土除去の際に竹を伐採したところ根に破片の一部が付着して出土した。鏡は数片に割れてその内2片は鏡面に錆着しており，紐の部分は失われている。周囲の緑青や残存した破片の状態から，鏡は鏡背を上面に向けて副葬されていたと想定され，内区の文様は八花に復元でき，鏡面は光沢を帯びている。

鉄剣はM23の西側から出土している。M24は鋒を地表に露出させており，表土を除去したところさらにM25を確認した。2口の鉄剣は，鞘の木質が良好に残っている。鋒を同一方向（N－42°－E）にそろえられているものの，M24は鋒付近の刃部が横位の，茎側の刃部が縦位の状態であったのに対し，M25はほぼ刃部を横位の状態で出土している。短剣は完形1口，鋒片1，関部片1が出土している。M27はM24に錆着した状態で出土し，鞘の木質が残存している。M31はM24の鋒の下から鉄剣と方向をほぼそろえて出土し，またM28は鋒を交差した状態でM25の下から出土している。M32は鉄剣の茎に相当する位置から出土しており，刀装具の一部と考えられ，M24・25・28・32には外面に織物が付着し，織物に包んだような痕跡が認められた。また武器類は，鋒が若干下がっているが，ほぼ同一レベルに副葬されたと想定される。

ガラス小玉は埋葬施設の北壁付近から出土している。このうちQ30の小玉はやや離れた位置から出土しているが後世の攪乱によって移動したと考えられる。鏡および鉄剣の位置から，埋葬施設の北部出土のガラス



第36図　第39号墳実測図（2）

小宅はほぼ原位置を保っていると推定される。またガラス小玉は第1号墓壇からも10点出土しており，これらは本墳の埋葬施設の破壊に伴って混入したものである。

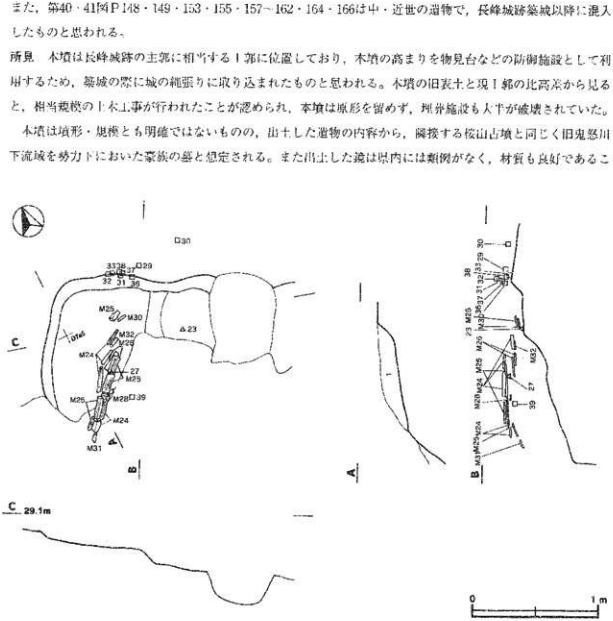
墳丘出土遺物　縄文土器片24点（口縁部4，胴部20），弥生土器片982点（口縁部107，胴部827，底部48），土師器片142点（口縁部7，体部132，脚部7，底部46），埴輪片1点，土師質土器片40点（口縁部1，体部34，底部5），常滑片36点（口縁部3，体部33），陶磁器片59点（口縁部13，体部27，底部19），石器片7点（磨石1，石臼片3，砥石片2，砥石1），瓦片1点，古銭23点（皇宋通寶1，寛永通寶10，文久永寶1，銭名不明11）が出土している。縄文土器片及び弥生土器片は主に6層下の旧表土中から出土し，中世以降と思われる土師質土器片・常滑片・陶磁器片・瓦片及び古銭は，1～4層中から出土している。

土師器の多くは小片で，全体の形状を復元できるものはない。第40図P145～P147は盛土中から出土しており，本墳に供献された可能性は少ない。P144は埴輪片で，これも後世の撹乱によって混入したものと思われる。

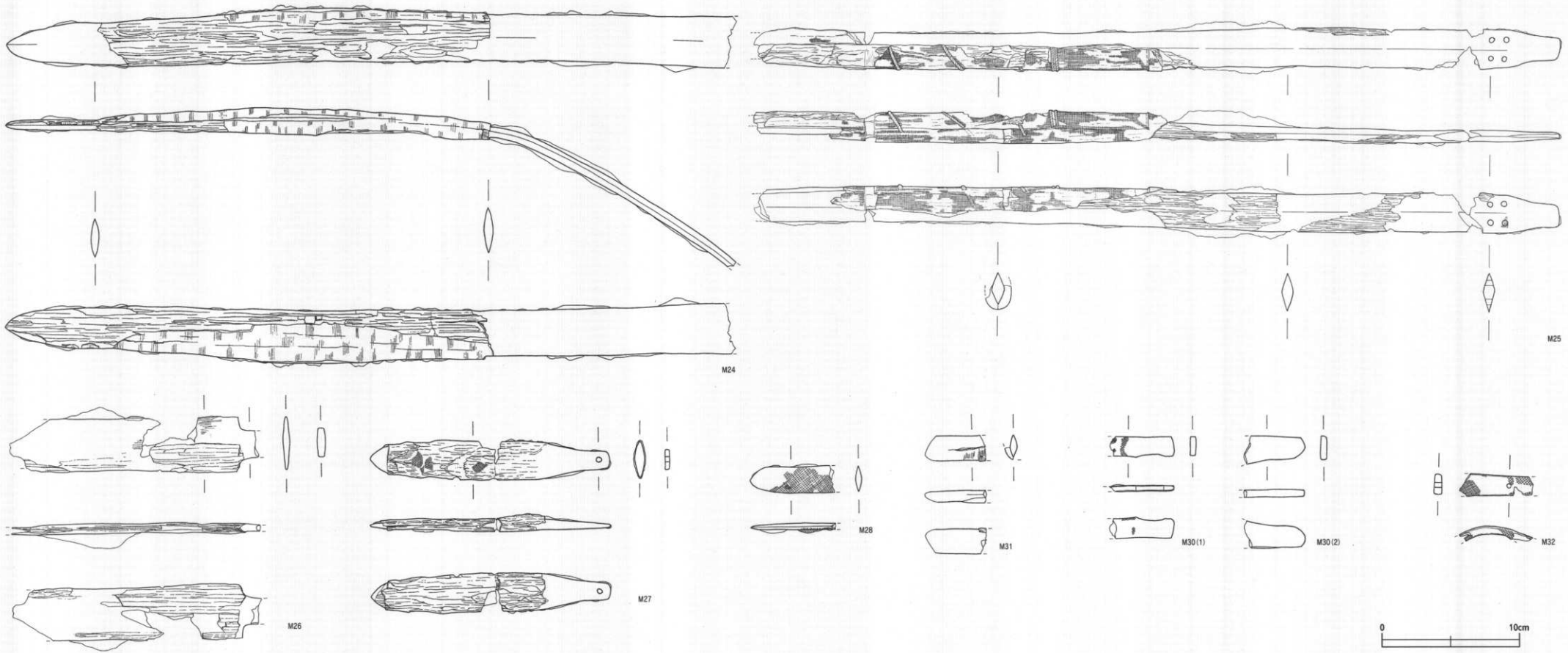
P135・137～P143，TP86～116は旧表土中・封土上層から出土しており，本墳の構築以前の遺物である。また，第40・41図P148・149・153・155・157～162・164・166は中・近世の遺物で，長峰城跡築城以降に混入したものと思われる。

所見　本墳は長峰城跡の主郭に相当する1郭に位置しており，本墳の高まりを物見台などの防御施設として利用するため，築城の際に城の縄張りに取り込まれたものと思われる。本墳の旧表土と現1郭の北高差から見ると，相当規模の土木工事が行われたことが認められ，本墳は原形を留めず，埋葬施設も大半が破壊されていた。

本墳は墳形・規模とも明確ではないものの，出土した遺物の内容から，隣接する桜山古墳と同じく旧鬼怒川下流域を勢力下においた豪族の墓と想定される。また出土した鏡は県内には類例がなく，材質も良好であるこ

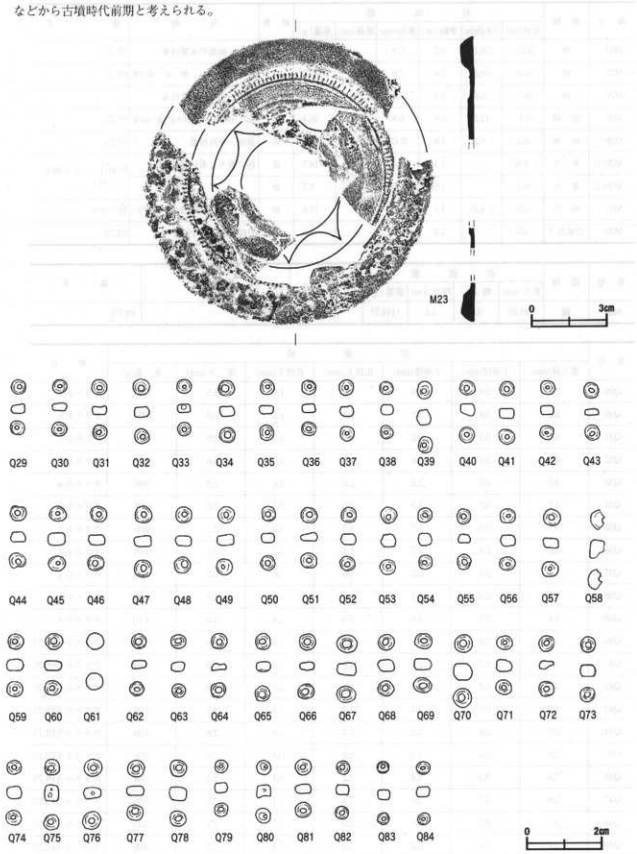


第37図　第39号墳埋葬施設実測図



第38図　第39号墳埋葬施設出土遺物実測図（1）

とから舶載鏡の可能性があり，常陸の古墳時代を考える上で貴重な資料である。本墳の時期は，出土した遺物などから古墳時代前期と考えられる。



第39図　第39号墳埋葬施設出土遺物実測図（2）

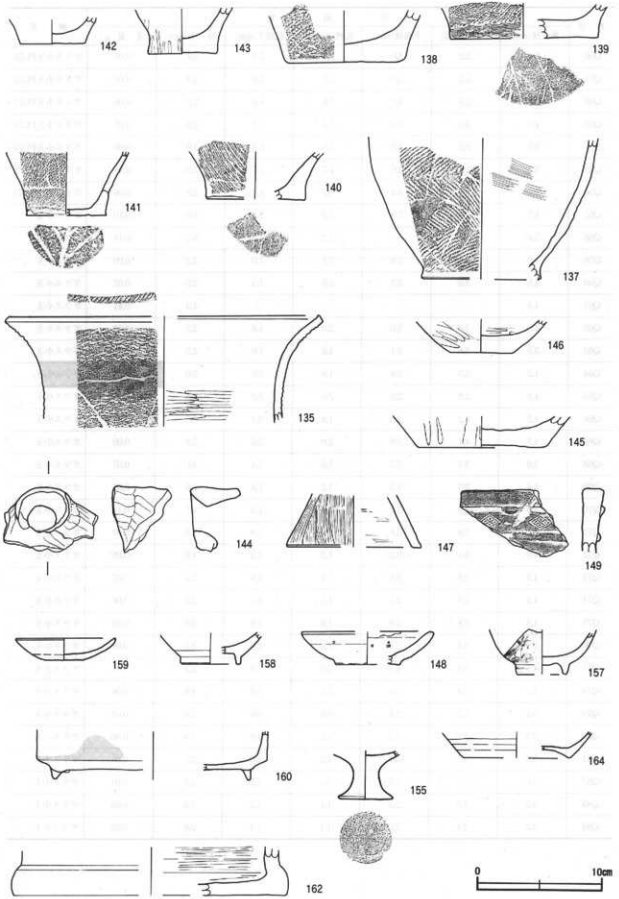
第39号墳埋葬施設　出土遺物観察表（第38・39図）

番号	器種	計測値 全長(cm)	刀身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	茎長(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
M24	剣	(55.1)	(55.1)	3.3	0.8	—	397.1	鉄	錆弱，鞘部の木質付着	PL73
M25	剣	(58.3)	(54.8)	2.8	2.8	3.5	389.8	鉄	錆強，目釘穴4，鞘・布・紐付着	PL73
M26	剣	(18.0)	(16.6)	4.1	0.6	(1.4)	109.1	鉄	錆弱，鞘部の木質付着	
M27	短剣	17.3	12.5	2.6	0.8	4.8	56.4	鉄	錆弱，目釘穴あり，鞘部の木質付着・布付着	PL73
M28	短剣	(6.2)	(6.2)	1.8	0.45	—	11.3	鉄	錆弱，布片付着	PL73
M30(1)	茎片	(4.65)	—	1.4	0.4	(4.65)	16.7	鉄	抉り有り，布付着	M30(1)・(2)は錆着して出土
M30(2)	茎片	(4.4)	—	1.65	4.5	(4.4)	8.7	鉄		
M31	剣片	(4.6)	(4.6)	1.1	5.2	—	11.8	鉄	錆強，鞘部木質付着，先端部欠	接合せず
M32	刀装具？	(5.3)	—	1.4	5.0	—	7.6	鉄	目釘穴あり，布片付着	PL73

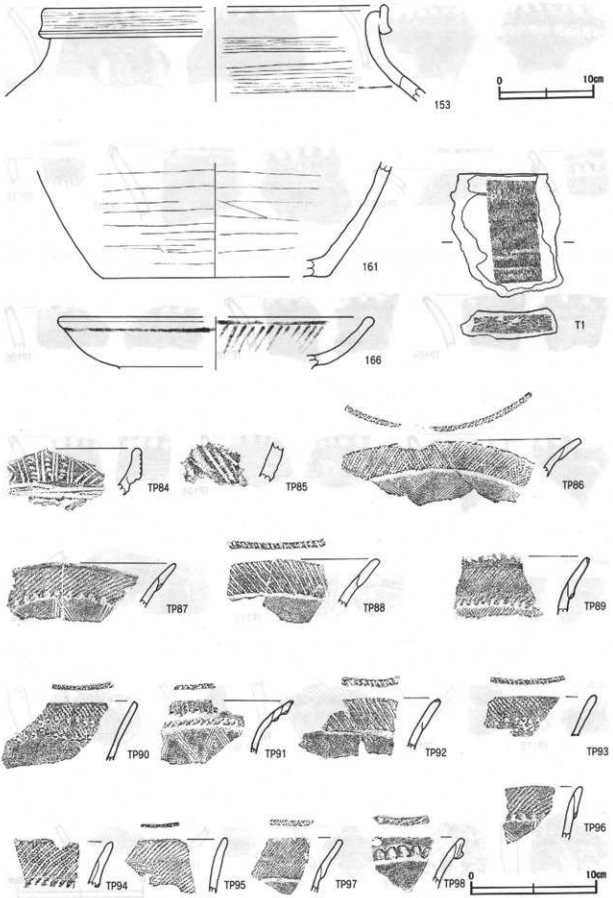
番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
M23	鏡	[11.5]	5.8	1.1	(174.7)	青銅	内行花文鏡	PL73

番号	計測値 最大径(mm)	上面径(mm)	下面径(mm)	孔径上(mm)	孔径下(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
Q29	3.8	2.9	2.9	1.8	1.9	2.5	0.05	ガラス小玉
Q30	3.6	2.8	3.0	1.4	1.3	2.0	0.04	ガラス小玉
Q31	3.8	3.3	3.2	1.6	1.5	2.0	0.04	ガラス小玉
Q32	4.1	2.6	2.6	1.6	1.5	2.6	0.05	ガラス小玉
Q33	3.9	2.0	2.2	1.3	1.2	2.3	0.05	ガラス小玉
Q34	4.1	3.2	3.2	2.3	2.1	2.6	0.06	ガラス小玉
Q35	3.7	2.6	2.7	1.3	1.3	2.1	0.05	ガラス小玉
Q36	3.6	2.8	2.7	1.4	1.2	2.1	0.04	ガラス小玉
Q37	3.6	2.6	2.5	1.6	1.6	2.5	0.06	ガラス小玉
Q38	3.5	2.5	2.1	1.4	1.4	2.5	0.05	ガラス小玉
Q39	4.4	2.1	3.0	1.5	1.4	3.9	0.10	ガラス小玉
Q40	3.9	2.9	3.3	1.3	1.2	3.3	0.07	ガラス小玉PL73
Q41	3.4	2.7	2.5	1.6	1.3	2.9	0.04	ガラス小玉PL73
Q42	3.4	2.6	2.6	1.5	1.3	1.8	0.03	ガラス小玉PL73
Q43	3.5	2.9	2.7	1.1	1.1	2.5	0.05	ガラス小玉PL73
Q44	2.9	2.6	3.2	1.7	1.6	2.8	0.06	ガラス小玉PL73
Q45	3.8	3.5	3.5	0.8	0.8	2.6	0.06	ガラス小玉PL73
Q46	3.8	3.3	3.4	1.2	1.4	2.3	0.04	ガラス小玉PL73
Q47	3.8	3.7	3.5	1.4	1.4	2.5	0.05	ガラス小玉PL73
Q48	3.5	2.2	2.1	1.0	1.1	2.6	0.05	ガラス小玉PL73
Q49	3.7	2.4	2.3	1.0	[1.1]	2.5	0.06	ガラス小玉PL73

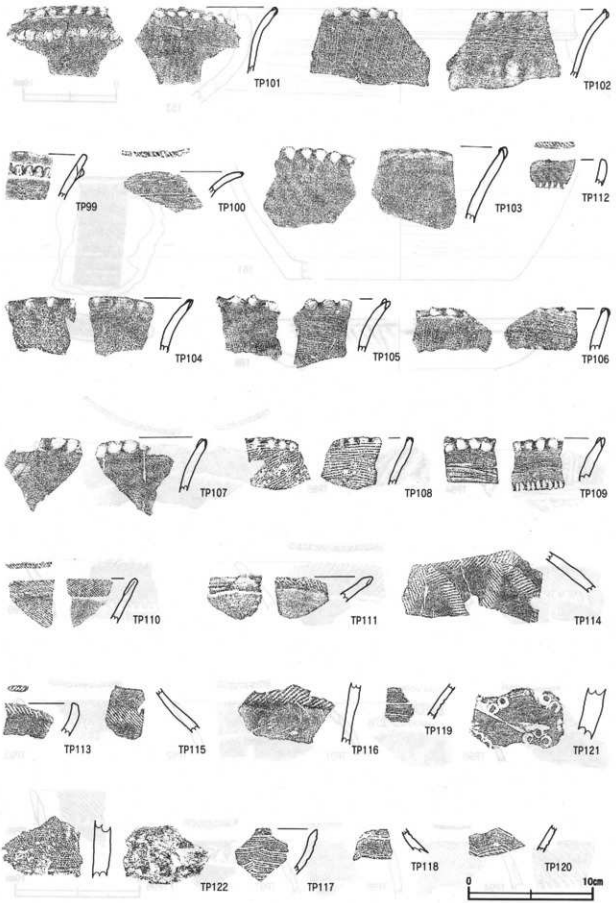
番号	計測値							備考
	最大径(mm)	上面径(mm)	下面径(mm)	孔径上(mm)	孔径下(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	
Q50	3.4	3.2	3.0	1.5	1.5	2.4	0.05	ガラス小玉PL73
Q51	3.6	3.1	3.3	1.7	1.6	2.3	0.04	ガラス小玉PL73
Q52	3.8	2.9	3.2	1.6	1.6	2.7	0.06	ガラス小玉PL73
Q53	4.2	3.0	3.3	1.2	1.1	2.9	0.07	ガラス小玉PL73
Q54	3.3	2.5	1.9	1.5	1.3	3.0	0.06	ガラス小玉PL73
Q55	3.5	2.2	2.6	1.7	1.7	2.0	0.04	ガラス小玉PL73
Q56	4.2	3.2	3.4	1.3	1.4	2.8	0.06	ガラス小玉PL73
Q57	4.7	2.7	2.9	1.2	1.2	3.0	0.10	ガラス小玉
Q58	(5.8)	(3.2)	—	(1.3)	(1.2)	(5.2)	(0.14)	ガラス小玉
Q59	4.0	2.2	2.8	1.1	1.0	3.3	0.09	ガラス小玉
Q60	4.5	3.5	3.3	2.0	1.3	2.5	0.07	ガラス小玉
Q61	4.3	—	—	—	—	4.3	0.44	ガラス小玉
Q62	4.0	3.0	3.0	2.0	1.8	2.5	0.05	ガラス小玉
Q63	3.9	2.8	2.4	1.8	1.6	2.5	0.04	ガラス小玉
Q64	4.2	3.5	3.8	1.8	2.0	2.0	0.03	ガラス小玉
Q65	4.0	2.8	2.5	2.0	2.0	2.5	0.03	ガラス小玉
Q66	4.5	3.2	3.5	1.8	2.1	2.0	0.05	ガラス小玉
Q67	4.5	4.4	3.9	2.0	2.0	3.4	0.09	ガラス小玉
Q68	3.9	3.7	3.7	1.6	1.4	3.0	0.07	ガラス小玉
Q69	4.4	3.5	4.3	1.2	1.8	2.6	0.07	ガラス小玉
Q70	4.9	2.9	3.0	1.4	1.3	4.1	0.14	ガラス小玉
Q71	4.1	2.8	2.8	1.0	1.0	3.5	0.07	ガラス小玉
Q72	4.0	3.0	(3.1)	1.3	1.3	1.9	(0.05)	ガラス小玉
Q73	4.3	2.6	2.8	1.7	1.6	3.3	0.07	ガラス小玉
Q74	4.2	2.9	2.7	1.5	1.5	3.2	0.06	ガラス小玉
Q75	4.5	2.8	2.9	1.9	1.9	3.9	0.10	ガラス小玉
Q76	4.9	3.4	3.1	2.2	2.0	3.2	0.08	ガラス小玉
Q77	4.5	3.4	4.7	2.0	1.9	2.3	0.06	ガラス小玉
Q78	4.2	2.4	2.5	1.5	1.9	4.0	0.08	ガラス小玉
Q79	3.2	1.5	2.4	0.6	0.5	2.8	0.03	ガラス小玉
Q80	3.5	3.3	3.3	1.1	1.0	3.3	0.06	ガラス小玉
Q81	3.8	3.5	3.4	1.2	1.0	2.1	0.04	ガラス小玉
Q82	3.6	2.7	2.6	1.4	1.5	2.5	0.04	ガラス小玉
Q83	3.5	2.6	2.5	1.1	1.2	3.0	0.05	ガラス小玉
Q84	3.5	2.4	3.0	1.4	1.4	2.6	0.05	ガラス小玉



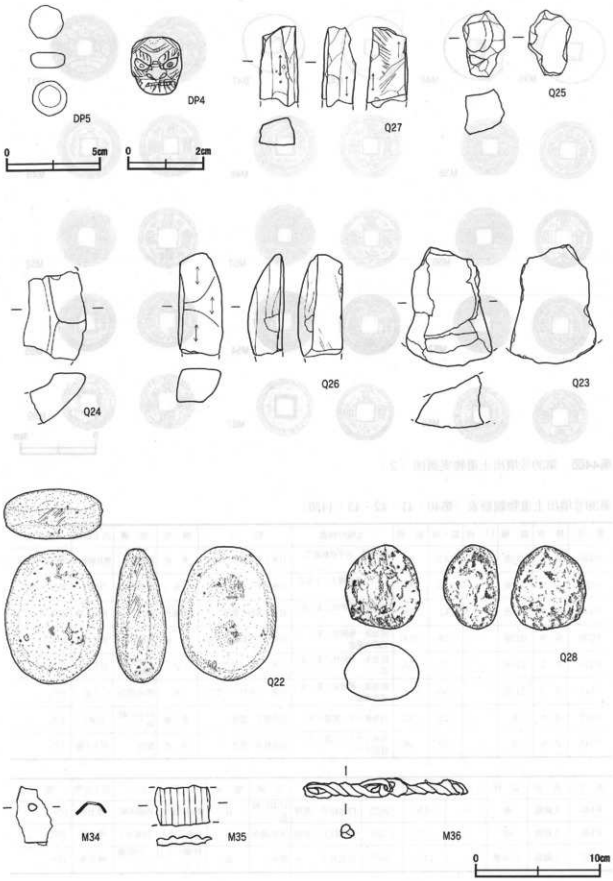
第40図　第39号墳出土遺物実測図（1）



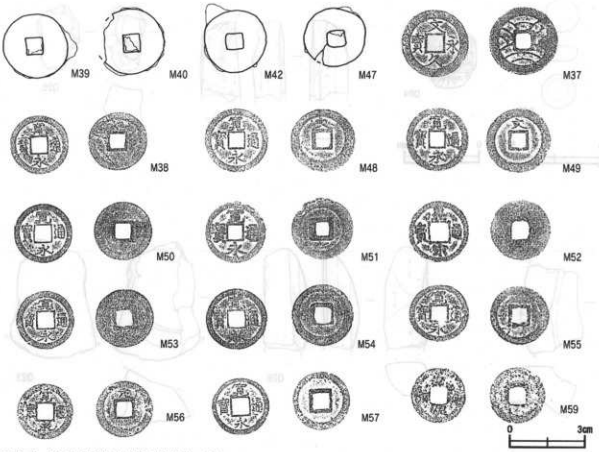
第41図　第39号墳出土遺物実測図（2）



第42図　第39号墳出土遺物実測図（3）



第43図　第39号墳出土遺物実測図（4）



第44図　第39号墳出土遺物実測図（2）

第39号墳出土遺物観察表（第40・41・42・43・44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P135	弥生	広口壺	[24.6]	(8.5)	—	LR単節，S字状結節文，内面ミガキ	石英・赤色粒子・雲母	普通	明赤褐色	墳丘裾表土	30% PL72
P137	弥生	広口壺	—	(11.3)	[9.6]	LR・RL単節縄文による刻状文	白色粒子・雲母	良	明赤褐色	旧表土	25% PL72
P138	弥生	広口壺	—	(4.1)	[9.6]	櫛加条一種附加1条，底部砂目？	石英・雲母　普通	明褐色	橙色	封土上層	20%
P139	弥生	広口壺	—	(2.8)	[11.8]	櫛加条一種附加1条？，底部木葉痕	石英・白色粒子・雲母	普通	明赤褐色	封土上層	10%
P140	弥生	広口壺	—	(3.7)	[7.8]	櫛加条一種附加2条，底部？	石英・長石・雲母	良	にぶい赤褐色	封土上層	10%
P141	弥生	広口壺	—	(5.0)	[6.4]	櫛加条一種附加1条，底部木葉痕	石英・白色粒子・雲母	良	明赤褐色	6層	10%
P142	弥生	壺	—	(2.1)	5.2	内外面ナデ，底部ナデ。	白色粒子・雲母	普通	にぶい橙色	旧表土	5%
P143	弥生	壺	—	(3.6)	(5.4)	外面ミガキ，内面ナデ，底部ナデ。	白色粒子・雲母	普通	橙色	封土上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P145	土師器	壺	—	(2.5)	[10.2]	白色粒子・雲母	にぶい橙色	良	外面ミガキ，内面不明	封土中	5%
P146	土器師	壺	—	(2.7)	[5.0]	白色粒子・雲母	明赤褐色	良	外面ミガキ，内面ナデ	墳丘裾	10%
P147	土師器	台坏類	—	(4.2)	[10.5]	白色粒子	橙色	良	外面ハケ目，内面横ナデ	墳丘裾	10%

番号	種別	器種	高さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P144	形象埴輪	犬カ	(5.2)	(4.7)	—	白色粒子	赤褐色	良	ナデ	封土上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P148	土師質土器	かわらけ	[10.4]	2.6	「5.2]	白色粒子	褐灰色	良	内外面ロクロナデ，底部糸切り	境乱部表土	25%，金属質の付着物有
P149	土師質土器	甕	—	(5.2)	—	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	黄灰色	良	ナデ，印文有り	封土上層	5%
P153	常滑	甕	[35.4]	(10.0)	—	石英・長石・黒色粒子	灰色	良	内外面ナデ	境丘裾	5%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P155	陶器	仏飯器か	—	(3.9)	4.1	—	—	—	暗灰黄色	—	近代カ	表土	50%
P157	陶器	中碗	—	(3.5)	[4.5]	砂粒	灰白色	有	明緑灰色	—	—	表土	15%
P158	陶器	中碗	7.9	(2.5)	[4.8]	砂粒	黄橙色	—	黄橙色	—	—	表土	10%
P159	陶器	灯明皿	—	1.7	2.9	砂粒	灰白色	—	赤褐色	—	—	表土	65%
P160	陶器	—	—	(3.9)	[15.6]	赤色粒子	淡黄色	—	黒褐色	在地系カ	近代カ	封土上層	5%
P161	陶器	甕	—	(9.0)	[17.8]	白色礫	灰褐色	—	暗褐色	在地系カ	—	表土	10%
P162	陶器	壺	—	(3.8)	[21.8]	雲母	黒色	—	—	在地系カ	近世カ	表土	10%
P164	陶器	中瓶カ	—	(2.1)	[8.6]	砂粒	灰黄色	—	灰黄色	瀬戸・美濃	近世	封土上層	5%
P166	青磁	皿	[24.8]	(14.1)	—	—	灰白色	—	オリーブ灰色	—	14世紀	封土上層	10% PL72

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP84	縄文時代前期	刺突文・沈線を施す。	旧表土	
TP85	縄文時代早期	田戸下層　沈線を施す。	封土上層	
TP86・87・96	弥生時代後期	附加条一種附加２条。斜位の平行沈線を施す。	旧表土	
TP88・92・97	弥生時代後期	附加条一種附加２条。胴部無文。	旧表土	
TP89	弥生時代後期	附加条一種附加２条。	旧表土上	
TP90・93	弥生時代後期	ＲＬの単節斜縄文，刺突文を施す。	旧表土	
TP91	弥生時代後期	Ⅱ線部下端に刻み目，ＬＲの単節斜縄文，胴部に斜位の平行沈線を施す。	6層	
TP94	弥生時代後期	附加条一種附加２条。口縁下端に刻み目を施す。	旧表土	
TP95	弥生時代後期	ＬＲの単節斜縄文を施す。	旧表土	
TP98・99	弥生時代後期	Ⅱ線下端に指頭押捺。ＴＰ98は口縁端部にＬＲの単節斜縄文を施す。	6層	
TP100・117～120	弥生時代中期後半	半截竹管による沈線を施す。	旧表土～旧表土上	
TP101～109	弥生時代中期後半	口縁端部に押捺。	旧表土	
TP110～112	弥生時代中期後半	ＴＰ110は内外面に羽状縄文，ＴＰ111・112は内面にＲＬの単節斜縄文を施す。ＴＰ112は赤彩。	封土上層・旧表土	
TP113・115	弥生時代中期後半	ＲＬの単節斜縄文を施す。ＴＰ115は赤彩。	封土上層・旧表土	
TP114	弥生時代中期後半	口縁部付近にＬＲの単節斜縄文を施す。	旧表土上	
TP116	弥生時代中期後半	ＬＲの単節斜縄文による結縄文を施す。赤彩。	旧表土	
TP121	中世	花文か。	封土上層	
TP122	不明	瓦。布目痕あり。	封土上層	

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
DP4	泥面子	2.3	2.1	0.5	3.04	叡カ	100% PL72
DP5	不明土製品	1.6	1.6	0.8	2.26	刺突文を施す	

遺物番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
Q22	磨石	10.5	7.9	4.1	471	安山岩	側面に擦痕有り	
Q23	石臼	(9.3)	(6.8)	(4.0)	209	安山岩	下臼か	
Q24	石臼	(7.0)	(4.5)	(3.9)	102.7	安山岩	下臼か	
Q25	石臼	(5.2)	(3.4)	(3.5)	49.1	安山岩	下臼か	
Q26	砥石	(8.0)	3.5	2.6	92.3	凝灰岩	石材の加工痕あり	PL72
Q27	砥石	(6.3)	2.8	2.2	57.9	凝灰岩	斜め方向の擦痕あり	PL72
Q28	軽石	6.6	4.4	4.4	103.7	安山岩		PL78

番号	器種	計測値 全長(cm)	刃身長(cm)	身幅(cm)	重ね(cm)	茎長(cm)	重量(g)	材質	特徴	備考
M34	刀装具カ	(3.0)	—	(1.9)	0.1	—	5.0	鉄	目釘穴あり	墳丘表土より出土

番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	特徴	備考
M35	不明	(2.7)	2.1	0.4	(4.1)	波状に加工	
M36	鎖	8.7	0.7	0.7	8.8	2本交差している	

番号	銭名	計測値 銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	初鋳・鋳造年 年号	西暦	特徴	備考
M37	文久永寶	2.68	0.7×0.7	1.0	3.9	銅	文久3年	1863	鋳上がり良	
M38	寛永通寶	2.35	0.7×0.7	0.9	2.5	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	
M39	不明	2.57	0.7×0.7	1.2	2.9	鉄			銭名不明	
M40	不明	2.70	—×—	1.8	3.3	鉄			銭名不明	
M41	不明	[2.70]	[0.7×0.7]	1.4	3.2	鉄			図化できず	
M42	不明	[2.50]	[0.7×0.7]	1.2	3.4	鉄			銭名不明	
M43	不明	—	—×—	1.8	3.2	鉄				図化できず
M44	不明	[2.60]	—×—	1.9	3.3	鉄				図化できず
M45	不明	—	—×—	—	1.9	鉄				図化できず
M46	不明	[2.80]	—×—	2.0	1.7	鉄				図化できず
M47	不明	[2.40]	—×—	1.2	2.2	鉄			銭名不明	
M48	寛永通寶	2.54	0.6×0.6	1.1	3.5	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M49	寛永通寶	2.54	0.6×0.6	1.3	3.2	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M50	寛永通寶	2.33	0.7×0.7	1.0	3.0	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M51	寛永通寶	2.40	0.6×0.6	1.0	3.3	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M52	皇宋通寶?	2.39	0.7×0.7	0.7	2.7	銅	寶元元年	1253	鋳上がりやや不良	PL72
M53	寛永通寶	2.34	0.7×0.7	1.0	2.9	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M54	寛永通寶	2.43	0.7×0.7	0.8	2.7	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M55	寛永通寶	2.33	×	0.9	2.6	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M56	寛永通寶	2.60	0.7×0.7	1.1	2.3	銅	寛永3年	1636	鋳上がり若干不良	PL72
M57	寛永通寶	2.32	0.7×0.7	1.4	3.0	銅	寛永3年	1636	鋳上がり良	PL72
M58	不明	[3.10]	—×—	1.6	1.7	鉄				図化できず
M59	不明	2.20	0.7×0.7	1.4	1.8	銅			銭名不明・鋳上がり不良	PL72

2　まとめ

長峰第39号墳は後世の改変を受けて，築造時の墳形や規模を復元することはできなかった。また埴葬施設も大半が破壊されていたが，出土した遺物から前期古墳と確認された。以下若干の検討を加えてまとめとする。

本墳は細長い台地の先端付近に位置しており，その築造には自然地形の利用を念頭に置いている。本墳の盛土は約２ｍほど残存し，地山を削りだした上に盛土して墳丘を築いたと想定される。埋葬施設は木棺で，旧表土上約１ｍに設置されている。

副葬品は鏡・鉄剣・ガラス小玉などが出土している。鏡は内行花文鏡で，県内では八郷町丸山１号墳[1]，大洗町鏡塚古墳[2]に続いて３例目となる。内区の文様は八花に復元され，銅も精良なものが使われていることから，舶載鏡の可能性が指摘されている[3]。鉄剣は鐔が明瞭で断面菱形（M25）と，鐔が不明瞭で断面がレンズ状（M24・26）の２種があり，いずれも鞘材が残存している。また，M25・27・28には布が付着している。M25は布を紐紐で巻いており，剣の拵かあるいは布製の袋に入れて副葬したものと考えられる。M28は鞘はなく，直接剣身を布で巻いている。鉄剣・短剣は同じ場所に副葬されたにも関わらず，布が見られないものもあり，異なる扱いを受けていたと考えられる。

本墳の周辺には，西方に前期の所産とされる桜山古墳[4]が所在し，その北側に後期から終末期に形成された長峰古墳群[5]が位置する。古墳群は東に広がり，長峰城跡内にも埴輪片が出土し，古墳状の高まりがいくつか見られる。また，対岸の龍ヶ崎市半田町からは滑石製の石枕が出土し[6]，付近に有力な古墳が存在したことが窺える。

本墳と桜山古墳は同じ首長系列に属すると考えられ，前後関係が問題となる。桜山古墳は盛土が薄く，地形を最大限に利用して構築され，埋葬施設は粘土槨を採用している。一方，本墳は立地こそ台地の先端部を占めるが墳丘は盛土の比重が高く，埋葬施設も木棺で粘土槨と比べて簡略化されている。遺物からの判断は難しいが，墳丘の構築状況，埋葬施設などから見て，本墳は桜山古墳よりも後出的な様相を持つと言える。また，石枕を保有していた古墳は中期と考えられ，本墳に続いて築造された古墳であろう。このように長峰は前期から中期にかけて三世代にわたって首長墓が造営された地域と想定される。しかし，中期以降は急速に勢力を失い，後期に古墳の造営が再開されるが，その被葬者は前期の被葬者と異なる階層に属し，その性格も同じではない。

長峰周辺は古来から交通の要衝である。律令期の東海道はこの近くを通り，常陸最初の駅である榎浦駅は東方５kmの江戸崎町下君山付近に比定されている。本墳を築造した首長は旧香取の海の北岸を支配し，西方から進出した大和政権にとって無視できない地理的な位置を占めていたと考えられる。このことが本墳の被葬者に舶載鏡が与えられた最大の理由であろう。

註

(1)　後藤守一・大塚初重　「常陸丸山古墳」　1957年

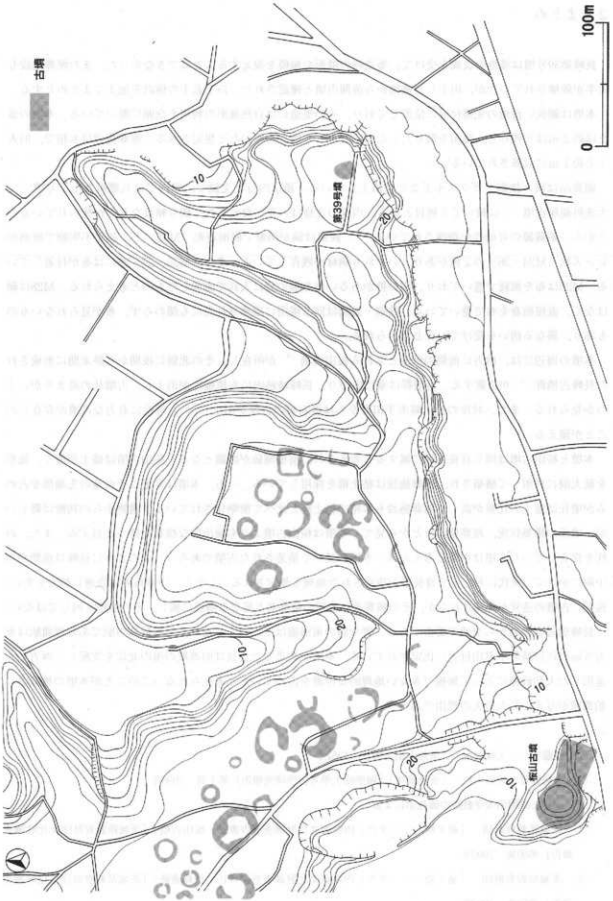
(2)　大場巌雄・佐野大和　「常陸鏡塚」『國學院大學考古学研究報告』第１冊　1956年

(3)　小林三郎明治大学教授の御教示による。

(4)　茨城県教育財団　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書20　桜山古墳」『茨城県教育財団文化財調査報告』第60集　1990年

(5)　茨城県教育財団　「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19　長峰遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第58集　1990年

(6)　根本康宏　「内原町出土の石枕について―（茨城県内出土石枕集成）―」『内原町史研究』２　1993年



第45図　長峰古墳群分布図

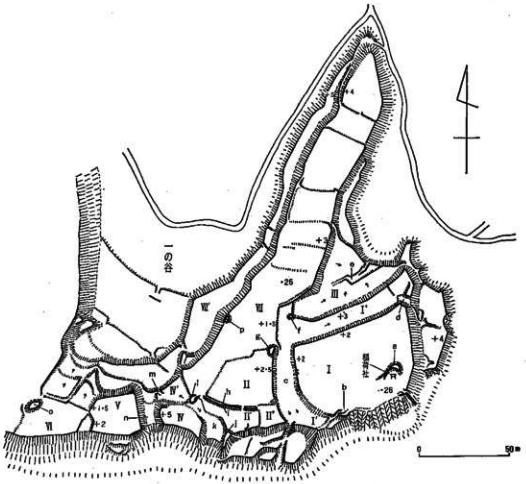
第5節　長　峰　城　跡

長峰城跡は，東西に延びる標高25mほどの半島状の台地先端を利用して築かれている。台地の基部付近には貝塚原城跡が，本跡と対する台地上に登城山城跡・要害城跡が所在している。また本跡の西方約1.5kmに外歴代城跡，約2kmに歴代城跡が所在している。

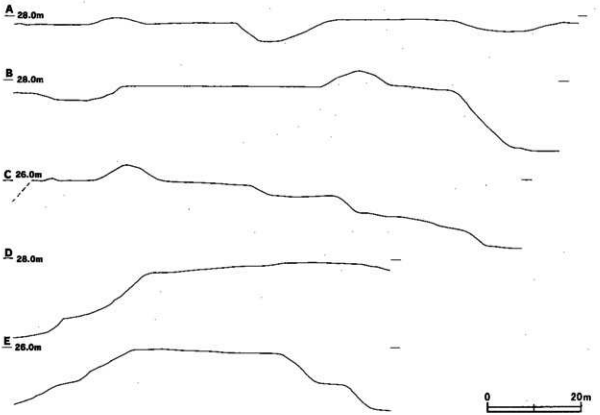
本跡は常総地域に多く見られる台地を利用した城郭であり，各郭は尾根を堀で切断することによって形成され，主要な郭は地形上の理由から東西に並んでいる。郭の名称は龍ヶ崎市が行った城郭調査の結果を基本としている（第47図，注）。

調査された遺構は，郭7か所，堀7条，腰曲輪2か所，土橋3か所，礎石建物跡1棟，掘立柱建物跡4棟，木橋跡3か所，道路跡1か所，井戸跡2基，その他が確認された。以下，その内容を記述する。

注　藤本正行　「長峰城跡」『龍ヶ崎の中世城郭跡』龍ヶ崎市史　別編II　龍ヶ崎市教育委員会　1987年



第47図　長峰城跡縄張り図（「龍ヶ崎の中世城郭跡」龍ヶ崎市史　別編IIより転載）



第48図　長峰城跡全測図（付図２第46図参照）

１　Ⅰ郭（第49・50・51図）

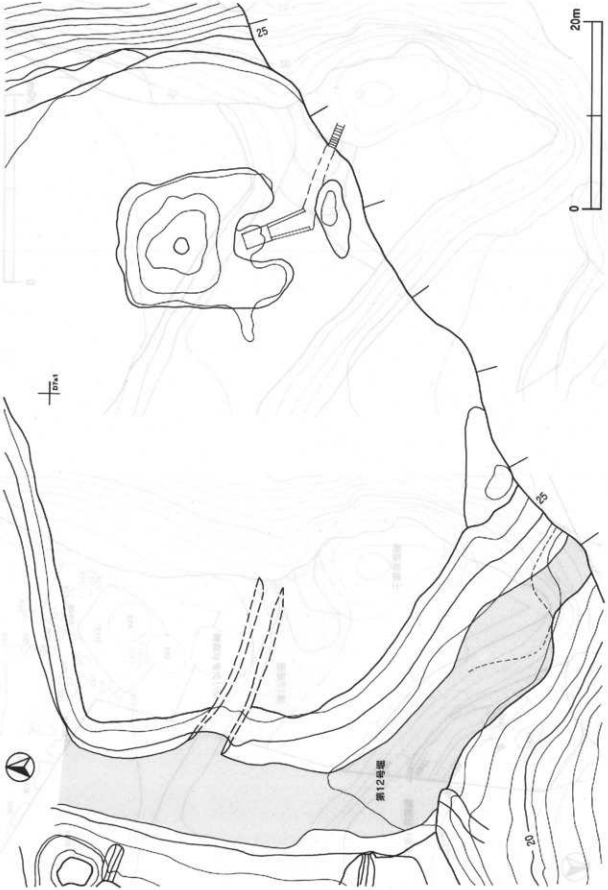
概要　本跡は長峰城跡が築かれた台地の先端に位置しており，城跡を構成する主要な郭の中で最も東側に築かれている。規模と形状は，本跡の平坦部で長辺約71ｍ，短辺約49ｍの長方形で，北側は若干屈曲し，西側ではやや突出している。面積は約2997.5㎡で，このうち北西部を除いた約2246.5㎡が調査の対象となった。

本跡は，現況で幅14.5～20ｍ，深さ２～2.5ｍの第12号堀によって西側のⅡ郭と分断されており，東側では約13ｍ下がって１号腰曲輪が，また北側では間に幅９～13ｍの帯曲輪状の平坦部をおいて2.5～４ｍ下がってⅢ郭が，南西側約12ｍ下がって２号腰曲輪が形成されている。この平坦部は当初帯郭と想定していたが，調査の結果後述するように埋没していた堀であることが明らかになり，第12号堀は本跡の北部と西部でほぼ直角に巡っているものと想定される。

現況で観察された遺構は，中央部やや東側に第39号墳が構築されており，その南側縁辺部に土塁の痕跡が認められた。また南西コーナーには第40号墳が構築されている。それ以外の郭縁辺部は平坦であり，土塁等の痕跡は確認できなかった。北側の一段下がった平坦部の北東隅には土壇状の高まりが残存し，その高さはⅠ郭の平坦部とほぼ同じレベルである。また，Ⅰ郭と土壇状の高まりの間は幅約1.5ｍで，１号腰曲輪にむかって緩やかに傾斜し，斜面には腰曲輪に降りる通路が設けられている。Ⅰ郭平坦部へは，郭北西付近に第12号堀から平坦部へ登る坂道が通じている。しかし龍ヶ崎市の調査では第40号墳の北側に通路を想定しており，坂道は作成された図にも見られないことから，近年つけられたものと思われる。また南側斜面には長峰集落から第39号墳の南に建立された稲荷神社への石段が設置され，Ⅰ郭への通路となっている。

郭の南側は平地面との比高は約17ｍで，ほぼ垂直に切り立った崖となっており，一部崩落などによってオーバーハングしている部分も認められる。

第49図　Ⅰ・Ⅲ郭測量・遺構配置図



第50図　1郭測量図

第51図　Ⅰ郭遺構配置図

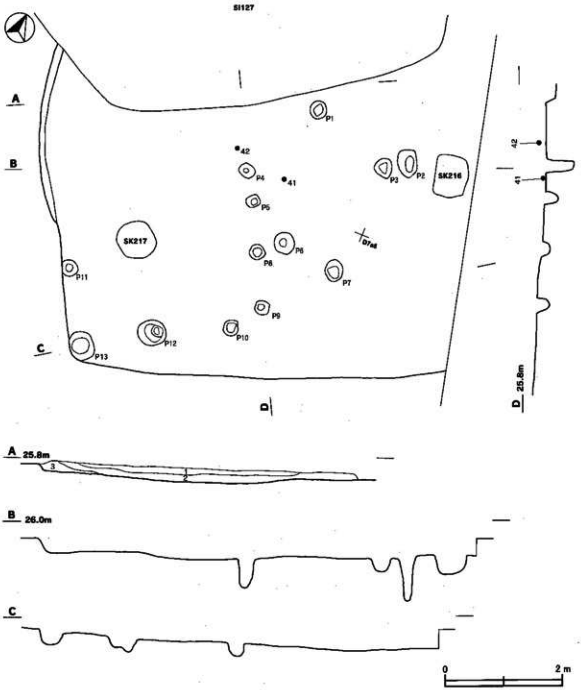
(1) 竪穴住居跡

第128号住居跡（第52図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の先端付近，Ｄ７a7区に位置している。本跡の北側には第１・２号井戸跡が位置している。

重複関係　第127号住居跡を掘り込み，第214～217号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　北西側及び南東側は削平され，また北東側は調査区域外に延びていることから，規模は不明である。現存している部分は長軸6.73m，短軸5.02mの方形または長方形と推定される。壁高は12～20cmで外傾



第52図　第128号住居跡実測図

して立ち上がり，主軸は残存する南西壁からN－27°－Wを指すと考えられる。

床　平坦で，あまり踏み固められていない。

ピット　13か所。配列に規則性がみられず，性格は不明である。深さは15～78cmである。

覆土　3層からなる。レンズ状に堆積し，含有物も均等に含まれていることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2　褐　　色　ロームブロック中量。しまり弱。
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。しまり弱。

遺物出土状況　弥生土器片4点（胴部4），土師器片26点（口縁部1，体部25），土師質土器片9点（口縁部4，体部2，底部3）が出土しており，弥生土器片・土師器片は本跡が埋没する過程で混入したものであろう。第53図P41・42はP4付近の2層中から出土しており，本跡に伴う遺物と思われる。

所見　本跡は2基の井戸跡の南側に構築されていることから，水飲み場など井戸と関連のある竪穴状の施設と考えられる。本跡の時期は，出土した土器から中世と考えられる。

第128号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P41	土師質土器	かわらけ	6.8	2.3	3.7	長石・赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	2層	100%　PL73
P42	土師質土器	かわらけ	[6.6]	2.1	3.5	赤色粒子	にぶい橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	2層	55%

第53図　第128号住居跡出土遺物実測図

第129号住居跡（第54図）

位置　Ⅰ郭の中央やや西側，D6h8区に位置している。

重複関係　第279・344・345・365・423号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形　長径5.50m，短径4.00mの楕円形である。壁高は14～27cmで，緩やかに外傾して立ち上がり，主軸はN－60°－Wを指している。

床　平坦で，若干踏み固められている。

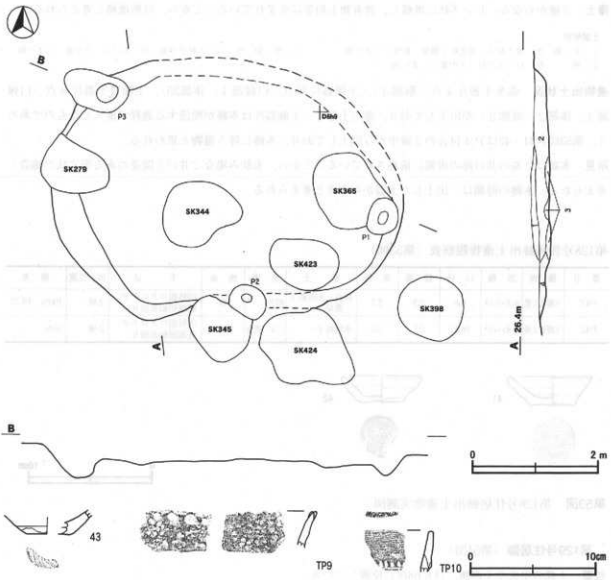
ピット　3か所。壁際に位置しており柱穴の可能性がある。深さは23～24cmである。

覆土　4層からなる。含有物を均等に含み，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック少量。
3　にぶい黄褐色　ロームブロック少量。
4　暗　褐　色　ロームブロック微量。

遺物出土状況　弥生土器片18点（口縁部3，胴部15），土師器片51点（体部50，底部1），土師質土器片16点（口縁部5，体部9，底部2），陶器片1（口縁部1）が出土している。弥生土器片・土師器片は，本跡が埋没する過程で流れ込んだものと考えられる。第54図P43は覆土中層から出土している。

所見　本跡は竈・壁溝などを欠いていることから，竪穴状の施設と思われる。本跡の時期は，出土した土器などから中世と考えられる。



第54図　第129号住居跡・出土遺物実測図

第129号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P43	土師質土器	かわらけ	—	（1.9）	［3.4］	石英	にぶい黄橙色	良	内外面ロクロナデ，底部糸切り	覆土中層	15%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP9	弥生時代中期後半	口唇部に指頭押捺。	覆土中	
TP10	弥生時代後期	口縁部に櫛描波状文，口唇部に縄文原体押圧。	覆土中	

第145号住居跡（第55図）

位置　Ⅰ郭の北東部，Ｄ７a3区に位置しており，西側に隣接して第146号住居跡が位置している。

規模と平面形　本跡の北側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸1.90m，短軸1.80mの方形または長方形と推定される。壁高は18～24cmで，外傾して立ち上がり，主軸は東壁からＮ－15°－Ｗを指すと考えられる。

床　平坦で，若干硬化している。

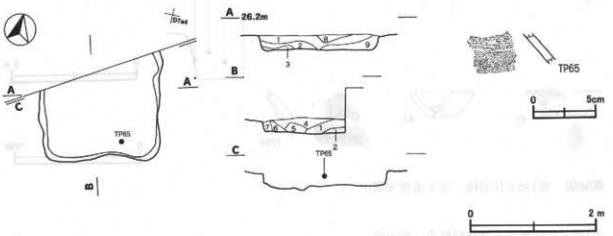
覆土　９層からなる。ロームブロックおよび粘土ブロックを含む層が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1	暗　褐　色	ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量。	6	暗　褐　色	ローム粒子微量。
2	暗　褐　色	ロームブロック・炭化物微量。	7	褐　　色	ロームブロック微量。
3	褐　　色	ロームブロック微量。	8	暗　褐　色	炭化粒子微量。
4	黒　褐　色	ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量。	9	暗　褐　色	ローム粒子微量。しまり弱。
5	暗　褐　色	ロームブロック微量。			

遺物出土状況　縄文土器片１点（胴部１），弥生土器片３点（口縁部１，胴部２），土師器片８点（体部８）が出土している。いずれも小片であり，本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。

所見　本跡は床面が若干硬化しており，使用された痕跡が認められるが，住居跡としては小型で柱穴も確認されない。そのため，住居として使用されたことについては検討する必要があり，竪穴状の遺構と考えられる。本跡の時期は，隣接する第146号住居跡と形態・主軸が類似していることなどから，これに近い時期と考えられる。



第55図　第145号住居跡・出土遺物実測図

第145号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP65	弥生時代後期	沈線で区画内に，羽状縄文を施す。	覆土中層	

第146号住居跡（第56図）

位置　Ⅰ郭北東部，Ｄ７a3区に位置しており，本跡の東側に第145号住居跡が位置してている。

規模と平面形　本跡の北側は調査区域外に延びる。残存部分は長軸2.40m，短軸1.35mの方形または長方形と推定される。壁高は50～72cmでほぼ垂直に立ち上がり，主軸は東壁および南壁からＮ－10°－Ｗを指すと考え

られる。

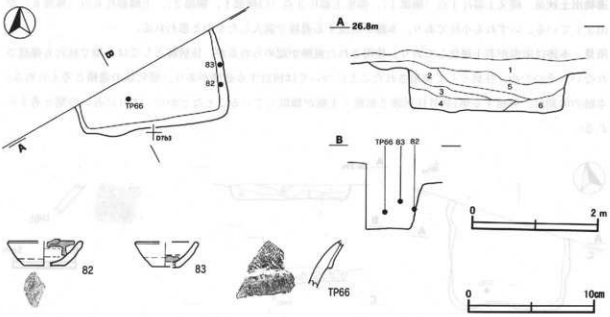
床　平坦で，硬化している。

覆土　6層からなる。ロームブロック・粘土ブロックを含む層が見られることから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量。
2　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック少量。
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
6　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。

遺物出土状況　縄文土器片1点（胴部1），弥生土器片3点（胴部3），土師器片4点（体部4），土師質土器片4点（口縁部1，底部3）が出土している。縄文土器片・弥生土器片・土師器片は，本跡が埋没する過程で混入したものと考えられる。第56図P82・83は2層付近から出土している。

所見　本跡は床に硬化面があるものの，小型で柱穴も確認されないことから，人の居住を目的とした施設ではないと考えられる。本跡の年代は，出土した遺物などから中世と考えられる。



第56図　第146号住居跡・出土遺物実測図

第146号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P82	土師質土器	かわらけ	［6.0］	1.9	［3.4］	白色粒子	褐灰色	良	内外面ロクロナデ，底部不明	2層付近	40%　金属質の付着物有
P83	土師質土器	かわらけ	［5.1］	2.0	［2.2］	白色粒子	褐色	良	内外面ロクロナデ，底部不明	2層付近	35%　金属質の付着物有

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP66	弥生時代後期	口縁部に附加条一種附加2条。	覆土中層	

第150号住居跡（第57図）

位置　Ⅰ郭西部，D6g5区に位置しており，本跡の西側に第2号虎口跡が位置している。

重複関係　第393号土坑が本跡の南壁を掘り込んでいる。また第390号土坑と重複している。

規模と平面形　長軸4.06m，短軸3.35mの東壁が張り出した五角形を呈している。壁高は14～34cmで，緩やかに外傾して立ち上がり，主軸はN－75°－Wである。

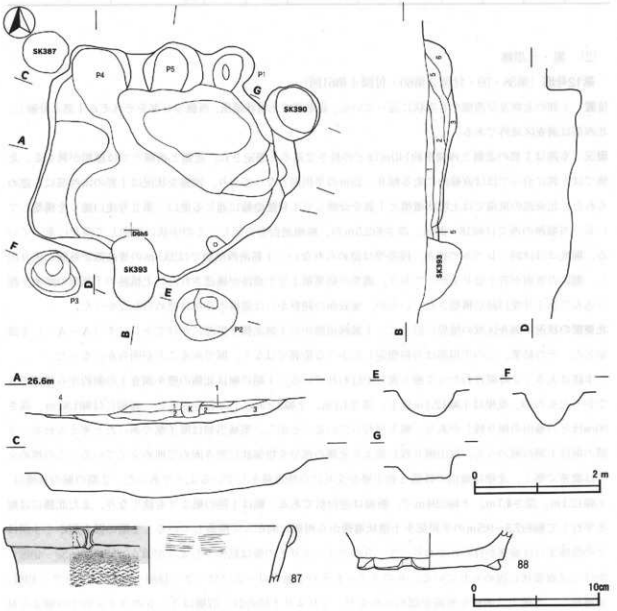
床　平坦ではなく，北東側に向かって緩やかに傾斜を示し，若干硬化している。

ピット　5か所。P1・4・5は北壁に沿って並び，P2・3は南壁の外側に位置しており，本跡のプランと比較すると若干南側に片寄っているが，関連するピットと考えられる。第390号土坑はP5に対応する位置にあるが，本跡を掘り込んでいるため別個の遺構と考えられる。また，ピット間は2.2～3.6mで，深さ30～54cmである。本跡に接している第387・390号土坑も本跡に関連のある遺構の可能性がある。

覆土　6層からなる。含有物が均等に含まれ，レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

1	暗褐色	ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。	4	にぶい黄褐色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，炭化物微量。
2	暗褐色	ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。	5	にぶい黄褐色	ローム ブロック少量，炭化粒子微量。しまり強。
3	暗褐色	ローム ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量。	6	暗褐色	ローム ブロック少量，炭化粒子微量。



第57図　第150号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　弥生土器片61点（口縁部４，胴部57），土師器片３点（口縁部２，底部１），土師質土器片１点（口縁部１）が出土している。弥生土器片・土師質土器片は本跡が埋没する過程で混入したものと考えられる。第57図Ｐ88は１層中から正位の状態で出土している。

所見　本跡は床面に起伏があり，平面形も方形ではないことから通常の住居跡の可能性は低い。ただ，ピットが本跡の掘り込みを覆うような配置を見せていることから，小屋掛けなどの仮設的な施設であることが想定される。本跡の時期は出土した土器などから中世と考えられる。

第150号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P87	弥生	広口壺	[21.8]	（4.5）	—	S字状結節文	赤色粒子・雲母	良	にぶい橙色	覆土中	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P88	土師質土器	皿	—	（3.1）	11.2	白色粒子・雲母	橙色	普通	外面調整不明，内面ナデ	1層	30%

(2)　堀・土塁跡

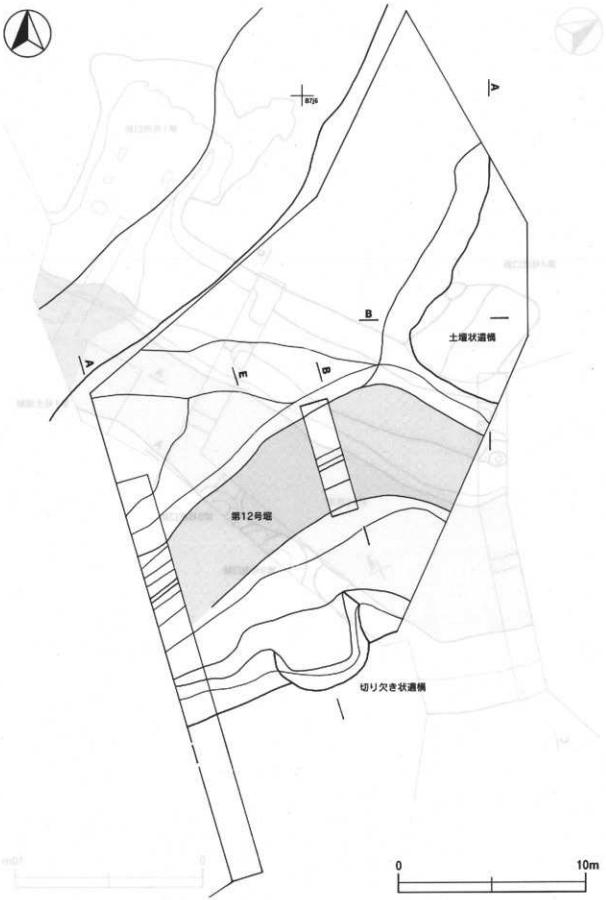
第12号堀（第58・59・付図３第60・付図４第61図）

位置　Ⅰ郭の北側及び西側をL字状に巡っている。北東部で土壇状遺構，西側でⅡ郭をそれぞれⅠ郭と分断し，北西部は調査区域外である。

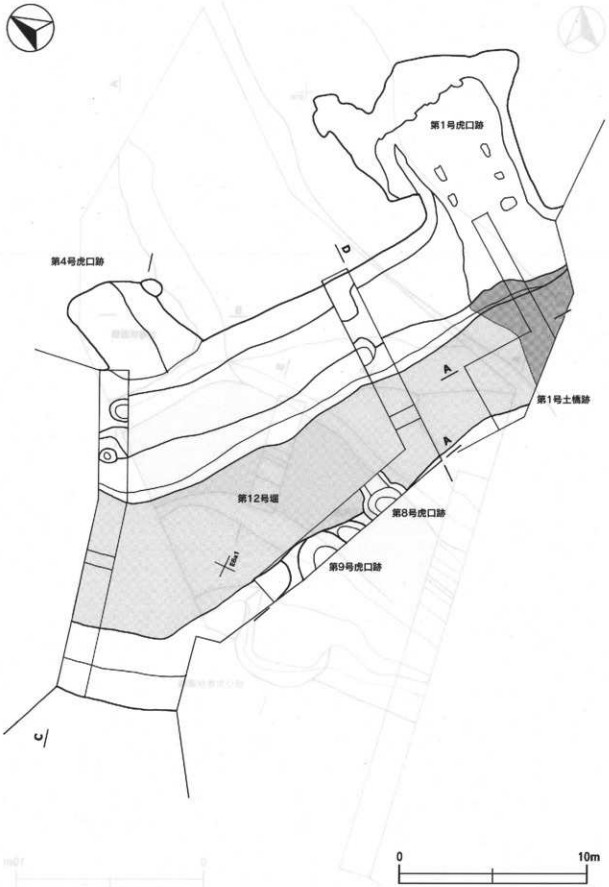
現況　本跡はⅠ郭の北側と西側を約140mほどの長さで巡ると想定され，北側と西側とでは様相が異なる。北側ではⅠ郭に沿ってほぼ直線的に走る幅９～13mの平坦面となっており，同様な状況はⅠ郭の南西部にも認められた。北東部の東端では土壇状遺構とⅠ郭を分断して１号腰曲輪に通じる虎口（第２号虎口跡）を構築している。当堀跡の西では幅18～20m，深さ約2.5mの，断面逆台形を呈し，くの字状に屈曲して南北に走っている。堀底はほぼ同一レベルで続き，段差等は認められない。Ⅰ郭南西部側では23.5mの等高線が外側に張り出し，堀底の底面が若干盛り上がっており，調査の結果第１号土橋跡が確認された。土橋跡のⅠ郭側の壁面を掘り込んで第１号虎口跡が構築されているが，地表面の観察からは遺構の存在は認められなかった。

北東部の状況　調査区域の境界に沿って，Ⅰ郭縁辺部からⅠ郭北側平坦部にかけてトレンチ（A－A′）を設定した。その結果，この平坦部は当初想定したような帯郭ではなく，堀であることが明らかになった。

本跡は大きく２時期にわたって掘り直しが行われている。１期の堀は北側の壁を調査上の制約から確認できなかったものの，規模は上幅12.1m以上，深さ4.7m，下幅3.2m以上と想定される。底面には幅1.84m，高さ90cmほどの地山の掘り残しがあり，堀と平行していることから，築城当初は障子堀であったと考えられる。２期の堀は１期の堀のうち，地山掘り残し部より北側の部分を版築状に突き固めて埋め立てている。この埋め立ては緻密で堅く，北壁は地山の砂層と粘土層が交互に自然堆積をしているようであった。２期の堀の規模は，上幅12.1m，深さ4.7m，下幅0.94mで，断面は逆台形である。幅は１期の堀よりも狭くなり，また北側には堀と平行して幅約7.5～9.5mの平坦部を土壇状遺構から西側に向かって構築している。２期の堀も細かく４回ほどの改修または廃棄が行われており，３～５のラインより下の層は粘性・しまりが強く，特に20・35～40層にかけては版築状に固められている。６のラインもその上面でロームブロック（18層）・粘土ブロック（19層）が堆積し，土層上は明瞭な相違が認められるが，これより下位の21～27層は３～５のラインの下の層より粘性・しまりは弱い。このため，本跡の最終使用面は３～５のラインの上面と想定される。６のラインを最終



第58図　第12号堀北東部実測図（付図3第60図参照）



第59図　第12号堀南西部実測図

使用面と考えることも可能であるが，18・19層も含めて21～27層はⅠ郭から投げ込まれたような土層の堆積状況を示し，本跡の廃棄作業の工程によって生じた境界面と考えられる。

壁はⅠ郭側の南壁を1期・2期とも共有しているが，1期の北壁の状況は不明であり，2期の堀では南壁の立ち上がりが北側に比べて急な傾斜となっている。また，上端部付近に幅約2.5mの平坦面が認められる。

2期の堀の状況をみるために東側にもトレンチを設定し（B－B′）土層を観察した。北壁は標高21.2m付近から上を版築状に固められ，この付近でも1期の堀を埋めて2期の北壁が構築されていることが確認された。また，標高21.2m以下の北壁は，障子堀と思われる地山掘り残しと考えられる。この部分でも4回ほどの改修または廃棄が行われており，10～13・17～20層は人為的に土層を交互に積み上げている。特に17～20層では粘性・しまりの強い土層が多く，版築状に固めた状況が見られる。

A－A′土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子中量。しまり弱。
2 暗 褐 色 ローム・ブロック多量。
3 褐 色 ローム粒子少量。
4 暗 褐 色 ローム・ブロック中量。粘性弱。
5 褐 色 ローム・ブロック多量，粘土ブロック少量。粘性強。
6 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子中量。
7 灰 褐 色 粘土ブロック中量，ローム・ブロック少量，焼土粒子微量。粘性・しまり強。
8 黒 褐 色 ローム粒子中量，ローム・ブロック微量。
9 灰 褐 色 粘土ブロック・赤色粒子少量，炭化粒子微量。粘性強。
10 黒 褐 色 ローム・ブロック・炭化粒子微量。
11 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量。しまり強。
12 褐 色 ローム・ブロック中量。
13 暗 褐 色 ローム粒子中量，粘土粒子少量。しまり強
14 黒 褐 色 粘土ブロック微量。
15 灰 褐 色 ローム粒子・炭化粒子中量，ローム・ブロック・粘土ブロック少量。
16 灰 褐 色 ローム・ブロック・粘土ブロック中量，炭化粒子微量。
17 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，ローム粒子中量。粘性・しまり強。
18 褐 色 ローム・ブロック中量。粘性・しまり弱。
19 灰 褐 色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
20 極 暗 褐 色 ローム・ブロック・粘土ブロック微量。粘性強。
21 灰 褐 色 ローム粒子中量，粘土ブロック少量，ローム・ブロック微量。
22 にぶい黄褐色 ローム・ブロック・粘土ブロック微量。
23 黒 褐 色 粘土粒子中量，粘土ブロック微量。
24 暗 褐 色 ローム・ブロック・炭化粒子中量，粘土ブロック少量。
25 灰 褐 色 粘土ブロック多量，ローム・ブロック少量。粘性強。
26 暗 褐 色 ローム・ブロック・炭化粒子中量，粘土ブロック少量。
27 暗 褐 色 ローム・ブロック少量，粘土ブロック・炭化粒子微量。
28 褐 色 粘土ブロック少量，ローム・ブロック微量。粘性強。
29 褐 色 ローム・ブロック多量，粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
30 灰 褐 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
31 灰 褐 色 砂質粘土粒子多量。粘性強。
32 灰 褐 色 砂質粘土粒子多量，焼土ブロック微量。粘性・しまり強。
33 灰 褐 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
34 暗 褐 色 粘土ブロック微量。しまり強。
35 灰 褐 色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
36 褐 灰 色 砂質粘土粒子多量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
37 灰 黄 褐 色 砂質粘土粒子多量。粘性強。
38 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量。粘性強。
39 褐 灰 色 粘土粒子中量。粘性強。
40 灰 黄 褐 色 ローム粒子中量，粘土ブロック少量，炭化粒子微量。粘性強。
41 灰 褐 色 粘土ブロック中量，炭化粒子少量。粘性・しまり強。
42 灰 褐 色 ローム粒子多量，粘土ブロック・炭化粒子中量。粘性強。
43 褐 灰 色 粘土ブロック中量。
44 灰 褐 色 ローム粒子・粘土粒子中量，炭化粒子微量。
45 にぶい黄橙色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
46 灰 黄 褐 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
47 黄 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子多量。粘性・しまり強。
48 にぶい黄橙色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
49 にぶい黄褐色 粘土ブロック・砂質粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
50 褐 色 粘土粒子中量，炭化粒子微量。
51 にぶい黄褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量。
52 明 褐 灰 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
53 灰 黄 褐 色 粘土粒子多量。粘性強。
54 褐 色 粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
55 オリーブ褐色 粘土粒子中量。粘性・しまり強。
56 オリーブ褐色 粘土粒子多量，粘土ブロック中量。粘性・しまり強。

B－B′土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 粘土ブロック少量。
4 褐 色 ローム粒子多量。粘性・しまり弱。
5 褐 色 ローム・ブロック多量。粘性・しまり弱。
6 暗 褐 色 粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
7 灰 褐 色 粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
8 褐 色 ローム粒子中量，粘土粒子微量。粘性弱。
9 オリーブ褐色 炭化粒子微量。粘性・しまり強。
10 にぶい褐色 粘土ブロック中量。粘性弱。
11 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量。粘性弱。
12 灰 褐 色 粘土ブロック少量。粘性弱。
13 にぶい黄色 粘土ブロック中量。
14 暗 褐 色 ローム・ブロック・粘土ブロック中量。
15 褐 色 ローム・ブロック少量，粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
16 褐 色 ローム粒子中量。粘性弱。
17 灰 褐 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
18 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量。粘性弱。

19 褐　　色 ローム粒子多量。しまり強。
20 褐　　色 ロームブロック中量。粘性・しまり強。
21 灰 褐 色 粘土ブロック中量。
22 オリーブ褐色 粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
23 オリーブ褐色 粘土粒子多量。
24 灰黄褐色 粘土粒子少量。粘性・しまり強。
25 オリーブ褐色 粘土粒子少量。
26 灰黄褐色 粘土粒子微量。粘性・しまり強。

南西部の状況　本跡は Ⅰ 郭と Ⅱ 郭の間でくの字状に屈曲しており，屈曲点から南側が調査区域である。本跡南端の北東壁の縁辺に第１号虎口跡が位置し，その前面には本跡を埋めて第１号土橋跡が構築され，南西壁の上端部には２号腰曲輪への通路である第８・９号虎口跡が構築されている。また本跡の南西壁上端部は Ⅱ 郭から Ⅰ 郭に至る通路と，２号腰曲輪への連絡路との連結部と想定される。

本跡は現況で Ⅰ・Ⅱ 郭間の堀と確認されていたので，構築状況を見るため，調査区域の境界に沿って Ⅰ・Ⅱ 郭の縁辺部（C－C′）と中央部付近（D－D′）にトレンチを設定した。規模は，上幅20.3m，下幅0.8m，深さ6.8m で断面は逆三角形である。Ⅰ・Ⅱ 郭はほぼ同一レベルであるが，Ⅱ 郭は南側に向かって傾斜しているため，本跡の南部では2.1m ほど Ⅰ 郭側が高い。C－C′ の土層断面では，北東部のように２期にわたる掘り直しは確認できず，１度の掘り込みによって構築され，堀の移動や埋め戻しを伴う大きな改修は行われなかったようである。

本跡は廃絶までに４回ほど改修または廃棄が行われており，北東部２期の堀の状況にほぼ対応している。２のライン以下の層（30・31層）は粘性・しまりが強いために堀の改修によって埋められた層と考えられる。また，２・３ラインの間の土層は，ロームブロック・粘土ブロックを含んで粘性・しまりが強い土層が多いことから，人為的に埋められた可能性が強く，D－D′ の断面の観察結果と併せて改修に伴う土層と考えられる。一方，これより上面では14・15層など一部に粘性・しまりの強い層が見られるものの，人為的に突き固めた痕跡は見られない。本跡の最終使用面は３のラインにあたり，４・５のラインは廃絶の作業工程によって生じた境界面と思われる。

D－D′ での堀の幅は，上幅・下幅ともに狭くなり，壁の立ち上がりも急で，ここでも掘り込みは１度しか認められない。１～３のラインはそれぞれC－C′ のものと対応すると思われ，３のラインには改修の跡が認められ，38層には投棄されたと思われる雲母片岩が確認された。

壁は東西ともほぼ同じ角度で立ち上がるが，D－D′ では Ⅰ 郭側が若干急である。また Ⅰ 郭側に幅2.7～3.2m の平坦部が確認され，その壁は高さ1.2～1.7m ではほぼ垂直に立ちあがる。この平坦部はロームブロック・粘土ブロックを含む土層が充填されていることから人為堆積と考えられ，改修に伴って埋め戻されたものと考えられる。

C－C′ 土層解説

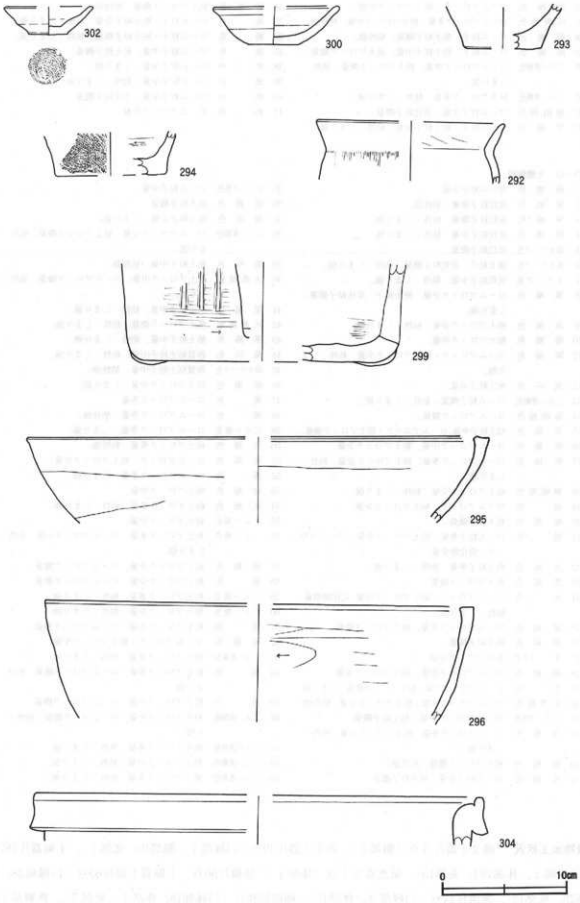
1 黒 褐 色 赤色粒子少量。粘性・しまり弱。
2 黒 褐 色 粘土粒子微量。しまり弱。
3 黒 暗 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子微量。
4 灰 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック微量。粘性強。
5 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子中量。粘性強。
6 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック微量。粘性強。
7 褐　　色 粘土ブロック少量。粘性強。
8 黒 褐 色 炭化粒子少量，ロームブロック微量。
9 褐 灰 色 炭化粒子少量，粘土ブロック・焼土粒子微量。粘性強。
10 にぶい黄褐色 焼土粒子多量，炭化粒子微量。粘性強。
11 黒 褐 色 ロームブロック多量，粘土粒子微量。
12 黒 褐 色 ローム粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
13 褐　　色 ロームブロック中量，粘土ブロック微量。
14 褐　　色 ロームブロック多量，粘土ブロック中量。粘性強。
15 灰黄褐色 粘土粒子中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
16 暗 褐 色 ローム粒子中量，粘土粒子少量，ロームブロック微量。
17 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック中量。
18 褐　　色 ローム粒子少量，粘土ブロック微量。
19 暗 褐 色 ロームブロック少量。
20 黒 褐 色 ローム粒子中量。
21 にぶい黄褐色 粘土粒子微量。粘性強。
22 褐　　色 ローム粒子微量。
23 褐 灰 色 ロームブロック中量，粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
24 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック微量。
25 灰黄褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量。粘性強。

26 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック中量。
27 灰黄褐色 ロームブロック多量。粘土ブロック中量。粘性強。
28 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量。粘性強。
29 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子中量，粘土ブロック微量。
30 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
31 にぶい黄橙色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
32 極暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量。
33 黒 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量。粘性・しまり強。
34 暗 褐 色 粘土ブロック微量。粘性弱。
35 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量。粘性・しまり強。
36 褐 色 ローム粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり強。
37 褐 色 ローム粒子中量，粘土粒子微量。
38 黒 色 ローム粒子少量。しまり弱。
39 褐 色 ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
40 褐 色 ローム粒子少量，炭化粒子微量。
41 褐 色 ロームブロック少量。

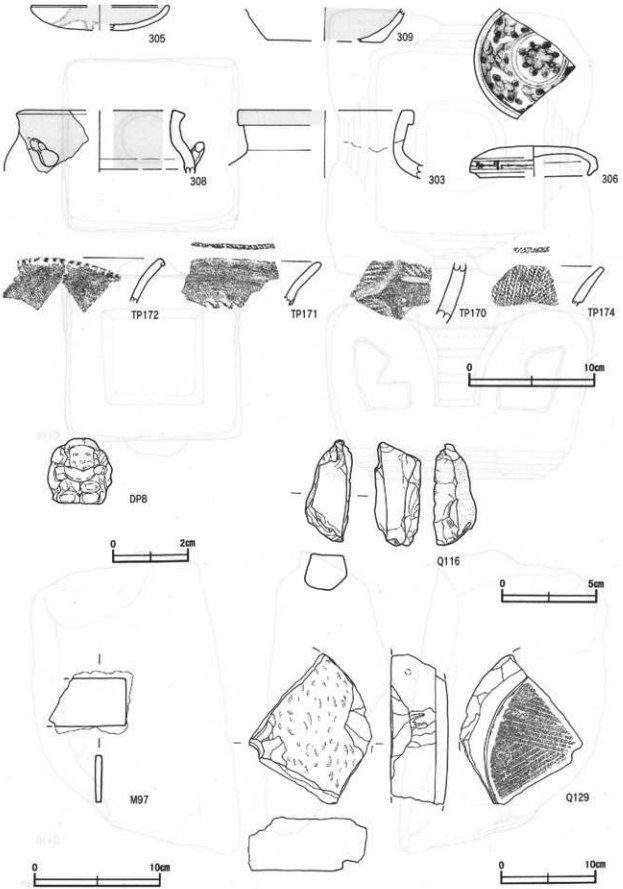
D－D′土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子少量。
2 黒 褐 色 炭化粒子微量。粘性弱。
3 黒 褐 色 炭化粒子微量。粘性・しまり強。
4 暗 褐 色 炭化粒子少量。粘性・しまり強。
5 暗オリーブ色 炭化粒子微量。
6 灰オリーブ色 焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
7 オリーブ色 炭化粒子少量。粘性・しまり強。
8 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。しまり強。
9 灰 褐 色 粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
10 暗 褐 色 粘土ブロック中量。
11 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性・しまり弱。
12 褐 灰 色 粘土粒子中量。
13 にぶい黄褐色 ローム粒子微量。粘性・しまり弱。
14 極暗褐色 ロームブロック微量。
15 黒 褐 色 粘土粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック微量。
16 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック少量。
17 暗 褐 色 ロームブロック多量，粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
18 極暗褐色 粘土ブロック少量。粘性・しまり弱。
19 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。
20 暗 褐 色 粘土粒子微量。
21 褐 色 ローム粒子多量，粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化物少量。
22 灰 褐 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
23 黒 褐 色 粘土ブロック微量。
24 灰 色 ロームブロック・粘土ブロック中量，炭化物微量。粘性・しまり強。
25 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
26 暗 褐 色 粘土粒子微量。
27 オリーブ黒色 粘土ブロック中量。
28 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック少量。
29 黒 色 ロームブロック中量，粘土ブロック微量。しまり強。
30 灰黄褐色 ロームブロック中量，粘土ブロック少量。粘性強。
31 オリーブ黒色 ロームブロック少量，粘土粒子微量。
32 黒 褐 色 ロームブロック多量，粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
33 暗 褐 色 粘土ブロック微量。粘性強。
34 暗 褐 色 ローム粒子少量，粘土粒子微量。
35 オリーブ黒色 ローム粒子少量。
36 暗 褐 色 粘土粒子微量。
37 褐 灰 色 粘土粒子少量。しまり強。
38 にぶい黄褐色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
39 褐 灰 色 粘土粒子中量。粘性強。
40 灰黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
41 黒 褐 色 粘土粒子中量。粘性・しまり強。
42 灰黄褐色 粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
43 黒 褐 色 粘土粒子少量。粘性・しまり強。
44 褐 灰 色 砂質粘土粒子中量。粘性・しまり強。
45 暗オリーブ色 砂質粘土粒子中量。粘性強。
46 暗 褐 色 粘土ブロック少量。しまり弱。
47 褐 色 ロームブロック多量。
48 褐 色 ロームブロック多量。粘性強。
49 にぶい褐色 ロームブロック多量。しまり強。
50 灰 褐 色 粘土ブロック多量。粘性強。
51 灰 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。
52 褐 色 ロームブロック多量。しまり弱。
53 暗 褐 色 粘土ブロック少量。
54 灰 褐 色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
55 にぶい褐色 粘土ブロック中量。
56 にぶい褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性・しまり強。
57 暗 褐 色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
58 褐 色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
59 にぶい褐色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
60 にぶい褐色 粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
61 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。
62 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。
63 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
64 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
65 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。
66 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
67 にぶい黄橙色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
68 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
69 にぶい黄橙色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。

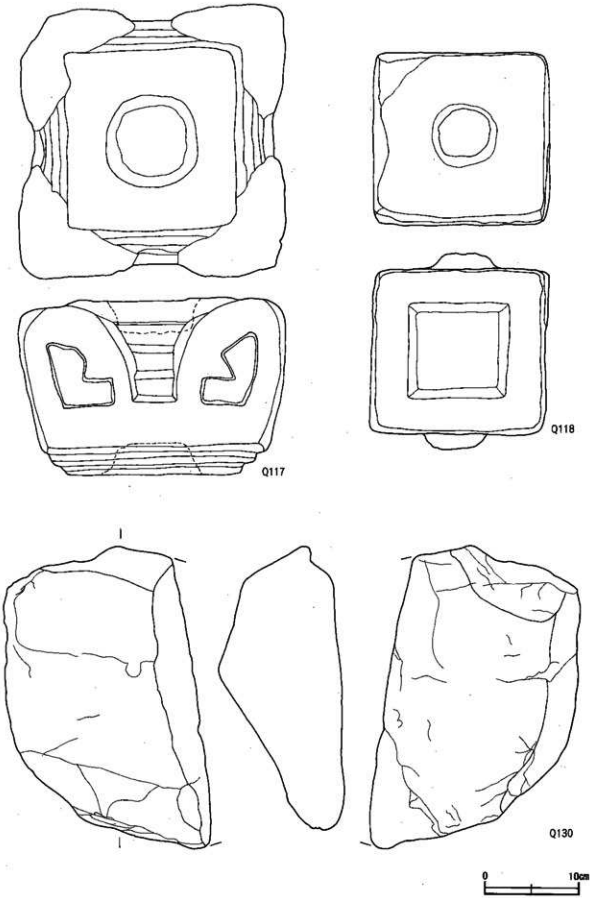
遺物出土状況　縄文土器片３点（胴部３），弥生土器片49点（口縁部７，胴部40，底部２），土師器片187点（口縁部１，体部171，底部15），須恵器片１点（体部１），埴輪片56点，土師質土器片65点（口縁部28，体部25，底部12），常滑片17点（口縁部２，体部15），陶磁器26点（口縁部18，体部１，底部７），鉄製品１点（不明１），古銭２点，石製品９点（石塔片８，不明石製品１）が出土している。縄文土器片・弥生土器片・



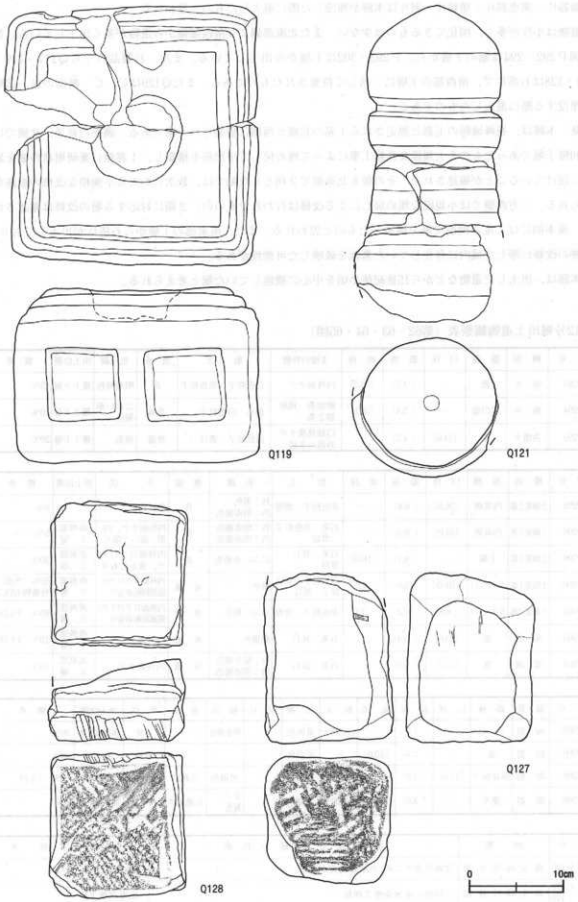
第62図　第12号堀出土遺物実測図（1）



第63図　第12号堀出土遺物実測図（2）



第64図　第12号堀出土遺物実測図（3）



第65図　第12号堀出土遺物実測図（4）

土師器片・須恵器片・埴輪片・剥片は本跡が埋没した際に混入したものと思われる。

遺物は小片が多く，図化できるものは少ない。また北東部側より南西部側から遺物が多く出土している。第62図P292・294は堀の下層から，P293・302は上層から出土している。また，石製品のうちQ117～119・121・128は石塔片で，南西部の下層に一括して投棄されたものである。またQ129はC－C′断面の11～23層が埋没する際に混入したものである。

所見　本跡は，長峰城跡の主郭と想定される I 郭の北側と西側に構築された堀である。調査の結果，北側では当初障子堀であったものを大規模な改修工事によって埋め戻して平坦部を構築し，I 郭側に薬研状の堀を新たに設けていることが確認された。その後も北東部で2期とした堀では，数次にわたる小規模な改修の痕跡が見られる。一方西側では小規模な埋め戻しによる改修は行われたものの，2期に対応する堀の改修は確認されず，基本的には1度の開削で堀を構築したものと思われる。また，南東部の下層から石塔片が出土しており，本跡の改修に際して城内に存在していた墓地を破壊した可能性がある。

本跡は，出土した遺物などから15世紀後半頃を中心に機能していた堀と考えられる。

第12号堀出土遺物観察表（第62・63・64・65図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P293	弥生	壺	—	(4.7)	(3.3)	内外面ナデ	白色粒子・黒色粒子	良	明黄褐色	覆土上層	15%
P294	弥生	広口壺	—	(3.4)	[8.7]	附加条一種附加2条	長石・白色粒子	普通	にぶい赤褐色	覆土下層	10%
P292	古墳カ	甕	[14.9]	(4.7)	—	口縁部横ナデ，外面ハケ目	白色粒子・雲母	普通	橙色	覆土下層	20%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P295	土師質土器	内耳鍋	[36.5]	(6.8)	—	赤色粒子・雲母	外：黒色 内：明赤褐色	良	内外面ナデ		5%
P296	土師質土器	内耳鍋	[24.0]	(9.3)	—	石英・赤色粒子・雲母	外：暗赤褐色 内：明赤褐色	良	内外面ナデ，内面一部ヘラ削り	南西部下層	5%
P299	土師質土器	七輪	—	(8.1)	[18.0]	石英・長石・雲母	にぶい赤褐色	良	内外面ロクロナデ，透かし有り	北東部上層	10%
P300	土師質土器	かわらけ	[10.0]	3.0	4.0	白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	南西部下層	65%　内面に付着物有PL73
P302	土師質土器	かわらけ	[6.8]	2.2	3.1	赤色粒子・雲母	にぶい橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	南西部上層	65%　PL73
P303	常滑	壺	[13.6]	(5.4)	—	石英・長石	暗褐色	普通	内外面ナデ	南西部下層	10%　PL74
P304	常滑	甕	(25.2)	(3.8)	—	石英・長石	外：暗赤褐色 内：明赤褐色	普通	内外面ナデ	北東部上層	10%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P305	陶器	小皿	[11.0]	1.9	—	白色粒子	黄灰色	—	暗赤褐色	—	近世	南西部上層	30%
P306	磁器	壺	—	2.4	[10.0]	—	灰白色	—	—	—	近世	表土中	40%
P308	陶器	四耳壺カ	[12.0]	(4.9)	—	砂粒	灰白色	—	黒褐色	古瀬戸	15世紀	北東部上層	10%　PL74
P309	陶器	鬼カ	—	(2.6)	[9.0]	赤色粒子	黄褐色	—	オリーブ褐色	在地系カ	—	南西部上層	5%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP170	縄文時代中期	沈線区画内にRLの単節縄文を充填。	南西部上層	
TP171・172	弥生時代後期	口唇部に附加条縄文押捺。	北東部覆土中	
TP174	弥生時代後期	附加条一種附加2条。口唇部に附加条縄文を施文。	北東部上層	

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
DP8	混面子	2.6	2.5	0.5	10.1	大型カ	100% PL77

遺物番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q116	不明石製品	5.4	2.4	2.3	35	泥 質	柱状に加工されたものカ	
Q117	宝篋印塔	28.2	28.2	18.4	22400	花崗岩	笠部	PL78
Q118	宝篋印塔	18.5	18.5	20.5	11800	花崗岩	塔身部 上下に突起あり	PL79
Q119	宝篋印塔	27.1	26.5	18.0	17700	花崗岩	基礎部	PL78
Q121	宝篋印塔	(33.5)	[17.0]	[17.0]	(5900)	花崗岩	相輪部	PL79
Q127	五輪塔	(17.5)	13.3	13.3	(4460)	砂 岩	地輪カ	
Q128	五輪塔	15.3	14.3	(7.7)	(2490)	砂 岩	地輪カ	PL79
Q129	石 臼	(15.5)	(12.8)	6.0	(1070)	安山岩		
Q130	石 片	(31.3)	(21.6)	(13.1)	(9200)	砂 岩	礫石カ	

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M97	不 明	(4.0)	2.5	0.3	(24.5)	板状	

第1号土塁跡（第51・66図）

位置　Ⅰ郭南側縁辺部，D7h5区に位置しており，北側には第39号墳が所在している。

規模と平面形　長さ8.2m，最大幅3.2mの長楕円形で，最大高0.6mの低い塚を呈している。主軸はN－77°－Eを指す。

構築状況　基底部の幅は2.7mで，断面は緩やかな盛り上がりが認められた。本跡の盛土は2層からなり，3層は地山ロームである。盛土はしまりが弱く，地山を掘り込んで基底部を補強する地業を行った痕跡は確認されなかった。

土層解説
1　黒　褐　色　ローム粒子微量。
2　褐　　色　ロームブロック少量。
3　褐　　色　ローム粒子多量。粘性・しまり強。

遺物出土状況　遺物は出土していない。

所見　土層の観察から本跡の盛土は突き固められた痕跡が認められず，土塁本体と判断するには若干疑問の余地が残り，稲荷神社建立の際に破壊された第39号墳の残土か，あるいは長峰城を破脚した際の土塁残土の可能性が考えられる。

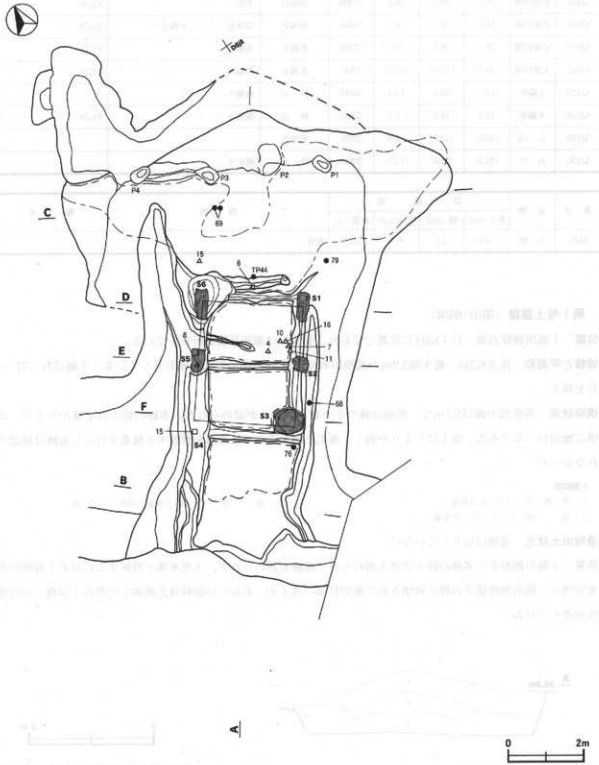
第66図　第1号土塁跡実測図

(3)　虎口跡

第１号虎口跡（第67・68図）

位置　Ⅰ郭の南西部縁辺部，Ｅ６a7区に位置しており，第12号堀北東壁に接して構築されている。本跡の南東部には隣接して塚状遺構（第40号墳）が，前面には第１号土橋跡，南西側９ｍの位置には第４号虎口跡がそれぞれ構築されている。

重複関係　第12号堀の北東壁を掘り込んで構築されている。

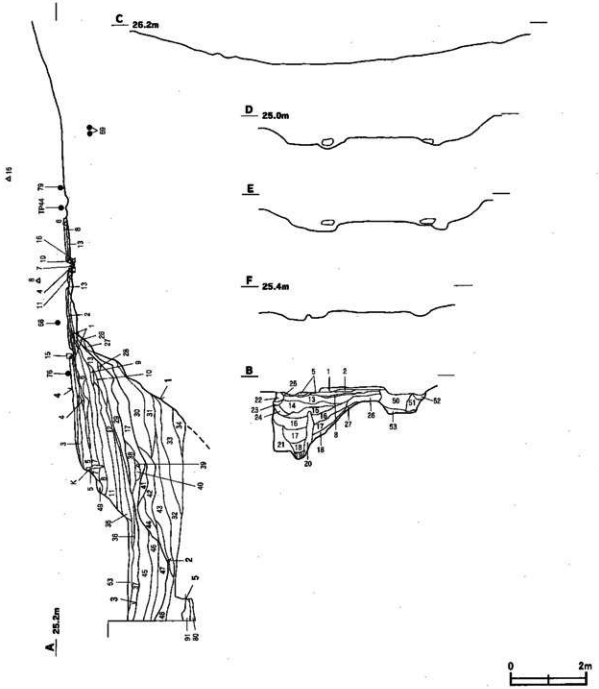


第67図　第１号虎口跡実測図（1）

規模と形状　長さ12.3m，幅10.4mのT字形を呈している。壁高は北西壁22～44cm，南東壁40～54cmで緩やかに外傾して立ち上がる。北東方向は，壁の立ち上がりが明瞭ではなく，底面は若干角度を変えながらスロープ状に緩やかに立ち上がり，主軸はN－35°－Eを指す。後述するように，礎石建物跡・溝・柱穴など本跡に関連する施設が構築されている。

礎石建物跡　虎口跡の中央部やや南西よりから礎石を検出した。礎石は5個出土し，礎石4に相当する礎石はすでに抜き取られていた。礎石の配置から，桁行3.12m，梁行2.62mの2×1間の建物が想定される。礎石1・6，2・5，3・4の間は，長さ1.85～2.48m，幅20～32cm，深さ10～18cmで，断面逆台形の溝によって結ばれており，模太などの建物部材が渡されていたと思われる。主軸はN－38°－Eを指す。

溝　中央部から南西部にかけて，礎石建物跡の両脇から2条の溝が確認された。南西側は長さ6.2m，幅0.26～



第68図　第1号虎口跡実測図（2）

0.42m，深さ8～20cm，北西側は長さ9.2m，幅0.30～1.28m，深さ10～22cmで，断面形は逆台形またはU字形であり，これらは側溝と考えられる。

ピット　4か所。P 1～4は深さ10～15cmで，1.4～1.8mの間隔をおいて一直線に並んでおり，虎口跡の主軸にほぼ直交している。これらは，柵または塀の柱穴と思われる。

床　本跡の主軸方向に沿って緩やかに傾斜しており，上端部と下端部の比高差は1.37mである。下端部と第1号土橋跡の間には主軸にほぼ直交する形で二ヶ所の段差があり，高さは36cmと60cmである。礎石建物跡の前面からピットの付近にかけて，踏み固められて硬化し，その範囲はT字状に広がる。

構築状況　主軸に沿ってトレンチを設定して構築状況を観察したが，約3m掘り下げたところで崩落の危険が生じたので，それ以上の調査を中止した。そのため基底部の状況は不明である。

本跡は，基本的に地山を掘り込んで構築されている。礎石3・4より北側では掘り込んだ面をそのまま床面として利用し，礎石建物跡付近には貼床が施されている。礎石3・4より南側では，第12号堀南西壁を深さ3m以上掘り込んでロームブロック・粘土ブロックを含む層を交互に積み，または両者を混合した土層を版築状に積み上げている。本跡の構築土（32・37・45～48層）は第1号土橋跡へも続き，3のラインまで本跡と第1号土橋跡の構築は一連の作業として行われている。下層の状況は明確でないが，2のラインは積み上げの工程を示すものと思われ，その後4のラインまで主として粘土ブロックを含む土層を積み上げ，礎石建物跡を構築している。構築土の含有物が3のラインの上下で異なるため，一時この面が虎口の床面であった可能性も考えられる。

土層解説（土層番号は第1号土橋跡と通し番号）

1　褐　色　粘土ブロック・ローム粒子中量，炭化物少量。しまり強。
2　にぶい黄褐色　粘土ブロック・炭化粒子少量。粘性弱，しまり強。
3　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック多量，炭化物少量。粘性・しまり強。
4　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子・炭化粒子少量，焼土ブロック微量。
5　褐　色　粘土ブロック多量，ローム粒子中量，炭化物微量。粘性・しまり強。
6　褐　色　粘土ブロック多量，炭化粒子少量。粘性・しまり強。
7　暗　褐　色　粘土ブロック多量，砂粒ブロック・炭化粒子少量。しまり強。
8　黒　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性強。
9　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量，炭化粒子微量。
10　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化物少量。しまり強。
11　黒　褐　色　粘土ブロック中量，炭化物少量，焼土ブロック微量。
12　黒　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子少量。
13　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック中量。粘性・しまり強。
14　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，炭化粒子少量・砂粒ブロック微量。粘性・しまり強。
15　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。
16　暗　褐　色　ロームブロック多量，粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。
17　暗　褐　色　ロームブロック多量，粘土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性強。
18　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。粘性強。
19　にぶい黄褐色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。
20　暗　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック中量。粘性強。
21　にぶい黄褐色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
22　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック・炭化粒子少量。
23　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量。
24　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
25　暗　褐　色　ロームブロック少量。
26　褐　色　ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量。
27　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子多量，炭化粒子少量。粘性・しまり強。
28　黒　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子少量。
29　暗　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
30　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，砂質粘土ブロック少量。
31　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，砂質粘土ブロック微量。
32　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・砂粒ブロック少量。粘性・しまり強。
33　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・砂粒ブロック中量。しまり強。
34　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土ブロック・砂粒ブロック少量。粘性・しまり強。
35　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，炭化粒子少量，焼土ブロック微量。しまり強。
36　にぶい黄褐色　粘土ブロック中量，砂粒ブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。
37　暗　褐　色　粘土ブロック中量，砂粒ブロック少量，炭化粒子微量。しまり強。
38　褐　色　ロームブロック多量，粘土ブロック中量。しまり強。
39　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，粘土ブロック微量。しまり強。
40　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量。しまり強。
41　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・砂粒ブロック中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
42　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。

43 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック多量，炭化粒子微量。
44 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック中量，砂粒ブロック少量。しまり強。
45 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック中量，砂粒ブロック少量。しまり強。
46 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック多量，砂粒ブロック中量。粘性・しまり強。
47 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・砂粒ブロック少量。しまり強。
48 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック少量。
49 暗 褐 色 ローム粒子中量，粘土ブロック少量，炭化粒子微量。
50 暗 褐 色 ロームブロック多量，粘土ブロック中量。
51 褐 色 ローム粒子多量，粘土粒子少量。しまり強。
52 褐 色 ローム粒子多量，ロームブロック少量。
53 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・砂粒ブロック少量。しまり強。
80 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
91 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。

遺物出土状況　弥生土器片170点（口縁部23，胴部144，底部３），土師器片454点（口縁部１，体部429，底部24），埴輪片14点，土師質土器片168点（口縁部59，体部65，底部44），陶磁器片12点（口縁部２，体部９，底部１），常滑片13点（口縁部２，体部10，底部１），鉄製品片14点（釘11，鎹カ１，不明２），銅製品片２点（不明２），古銭１点，石器片１点（石臼１），金属滓５点が出土している。

弥生土器片・土師器片・埴輪片・石器片は，本跡が埋没する過程で混入したものである。第69図P67・70・71・78は構築土中に混入していたもので，P69はＰ３の床面付近，P68は南東側の溝の内部，P79は北東側の溝の中層からそれぞれ出土している。P67・68は内部に金属質の付着物があり，坩堝に転用されたものと思われる。

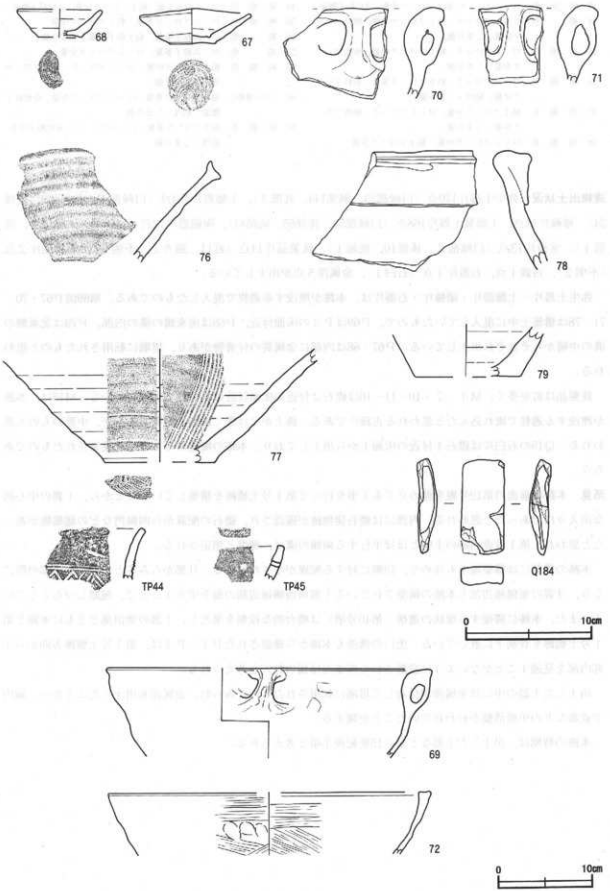
鉄製品は釘が多く，Ｍ４・７・10・11・16は礎石２付近の床面付近に集中して出土している。M15は，本跡が埋没する過程で流れ込んだと思われる古銭片である。鋳上がりは悪く銭名も不明であるが，中世のものと思われる。Q15の石臼片は礎石４付近の床面上から出土しており，本跡の廃絶にともなって投棄されたものであろう。

所見　本跡は前面の第12号堀を埋め立てる工事を行って第１号土橋跡を構築していることから，Ｉ郭の中心的な出入り口であったと思われる。内部には礎石建物跡が確認され，礎石の配置から四脚門などの建築物があったと思われ，第１号虎口跡の主軸とほぼ平行する両側の溝は，側溝と想定される。

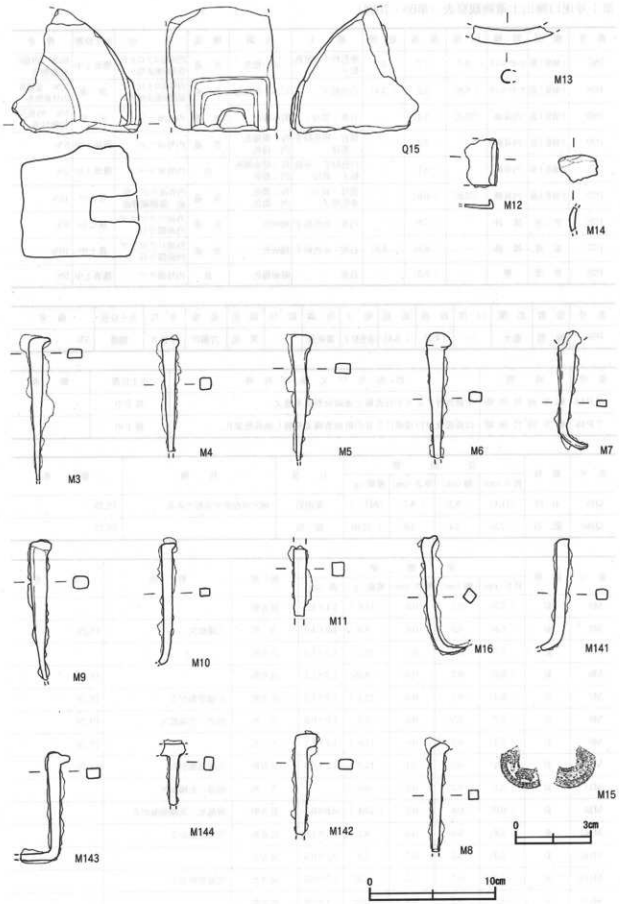
本跡の構築には構築場所も含めて，防御に対する配慮がなされている。II郭からみるとＩ郭の突出部の除になり，II郭の東側縁辺部と本跡の構築されているＩ郭南西側縁辺部の軸をずらすことで，視認しづらくしている。また，本跡に隣接する塚状の遺構（第40号墳）は櫓台的な役割を果たし，Ｉ郭の突出部とともに本跡と第１号土橋跡を管制下に置いている。虎口の構造も本跡から確認されたＰ１～Ｐ４は，第１号土橋跡方向からＩ郭内部を見通すことがないように設置された塀または柵の柱穴と考えられる。

出土した土器の中には金属滓が付着して坩堝に転用されたものがみられ，金属滓も出土したことから，城内で武器などの生産活動が行われていたことが窺える。

本跡の時期は，出土した土器などから15世紀後半頃と考えられる。



第69図　第１号虎口跡出土遺物実測図（1）



第70図　第１号虎口跡出土遺物実測図（2）

第1号虎口跡出土遺物観察表（第69・70図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P67	土師質土器	かわらけ	8.7	2.7	3.7	赤色粒子・黒色粒子	にぶい橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	構築土中	85% 内面に付着物有
P68	土師質土器	かわらけ	[6.8]	2.2	[3.4]	白色粒子	にぶい黄橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	雛溝	30% 金属質の付着物有
P69	土師質土器	内耳鍋	[33.8]	(9.4)	—	石英・雲母	明赤褐色	普通	内外面ナデ	床面	5% 外面炭化物付着
P70	土師質土器	内耳鍋	—	(7.2)	—	長石・黒色粒子・雲母	外：黒褐色 内：橙色	普通	内外面ナデ	構築土中	5%
P71	土師質土器	内耳鍋	—	(6.1)	—	白色粒子・赤色粒子・雲母	外：暗赤褐色 内：橙色	良	内外面ナデ	構築土中	5%
P72	土師質土器	内耳鍋	[33.8]	(6.6)	—	雲母・長石・赤色粒子	外：黒色 内：褐色	普通	内外面ナデ，外面一部指頭押捺	覆土中	15%
P76	常滑	擂鉢	—	(7.8)	—	石英・赤色粒子	褐灰色	普通	外面ロクロナデ内面擂り目	覆土中	5%
P77	常滑	擂鉢	—	(8.9)	(8.8)	石英・赤色粒子	褐灰色	普通	外面ロクロナデ内面擂り目	覆土中	10%
P78	常滑	甕	—	(9.5)	—	石英	暗赤褐色	良	内外面ナデ	構築土中	5%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考	
P79	陶器	壺か	—	(4.1)	[8.4]	赤色粒子	黄灰色	—	黒色	古瀬戸	中世か	雛溝	5%	

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP44	弥生時代中期	半截竹管により平行沈線と連続山形文を施文。	覆土中	
TP45	弥生時代後期	口唇部及び口辺部にLRの附加条縄文を施し他成後穿孔。	覆土中	

番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴	備考
Q15	石臼	(11.4)	(9.3)	(8.7)	(847)	安山岩	軸穴の台座が方形である	PL78
Q184	砥石	(7.5)	3.4	1.6	(51.0)	砂岩		PL77

番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	頭(cm)	断面	特徴	備考
M3	釘	(7.5)	0.7	0.5	(11.6)	1.1×1.2	長方形		
M4	釘	(6.8)	0.6	0.6	(9.8)	1.0×1.0	方形	先端部欠	PL79
M5	釘	(6.7)	0.7	0.5	(10.1)	1.3×1.1	長方形		
M6	釘	(6.7)	0.7	0.5	(8.55)	1.3×1.1	長方形		PL79
M7	釘	(6.4)	0.5	0.4	(12.1)	1.3×1.3	長方形	先端部曲がる	PL79
M8	釘	(5.7)	0.5	0.5	(9.9)	1.0×0.8	方形	頭部・先端部欠	PL79
M9	釘	(7.3)	0.8	0.6	(11.8)	1.1×1.1	方形		PL79
M10	釘	(6.4)	0.5	0.4	(11.0)	1.1×0.8	長方形	先端部曲がる	PL79
M11	釘	(3.1)	0.7	0.7	(0.6)	—	方形	頭部・先端部欠	
M16	釘	(6.0)	0.8	0.7	(10.4)	0.8×0.7	長方形	頭部欠。先端部曲がる	
M141	釘	(5.8)	0.6	0.5	(8.1)	0.7×1.0	長方形	先端部曲がる	
M142	釘	(5.3)	0.7	0.5	(7.9)	0.7×0.5	長方形		
M143	釘	(5.7)	0.7	0.5	(8.35)	0.7×0.5	長方形	先端部曲がる	
M144	釘	(3.2)	0.7	0.5	(3.52)	1.1×0.8	長方形		

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
M12	鎌	(1.2)	0.1	2.4	2.2	鉄	刃部の大半を欠く	

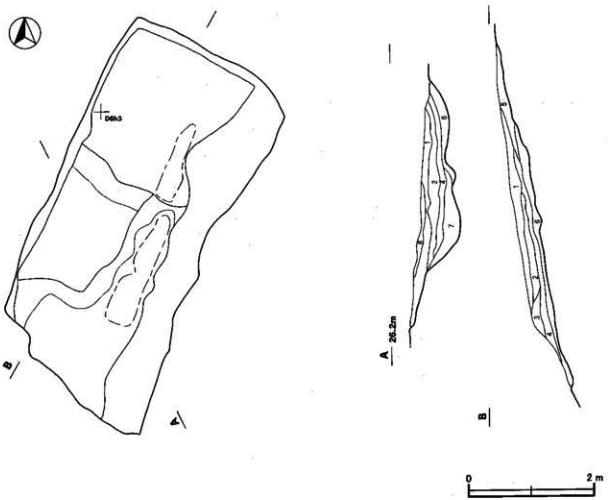
番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M13	不明	(4.3)	0.7	0.5	(1.7)	銅製品，断面U字形，飾り金具か	
M14	不明	(2.1)	(1.4)	0.4	(2.8)	銅製品，彎曲している，飾り板か	

番号	銭名	計測値				材質	初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		年号	西暦		
M15	—	[2.5]	0.7×0.7	0.75	0.6	銅	—	—	銭名不明	

第4号虎口跡（第71図）

位置　Ⅰ郭の西側縁辺部，D6h3区に位置しており，第12号堀の屈曲点付近に構築されている。本跡の南東に第1号虎口跡が所在している。

重複関係　第12号堀に接して構築されており，第151号住居跡を掘り込んでいる。



第71図　第4号虎口跡実測図

規模と形状　長さ5.75m，幅2.96mの長方形である。壁高は北西側24～40cm，南東側73～79cmで，外傾して立ち上がり，主軸はN－30°－Eを指す。

覆土　8層からなる。レンズ状に堆積し，含有物も均等に含まれていることから，自然堆積と考えられる。

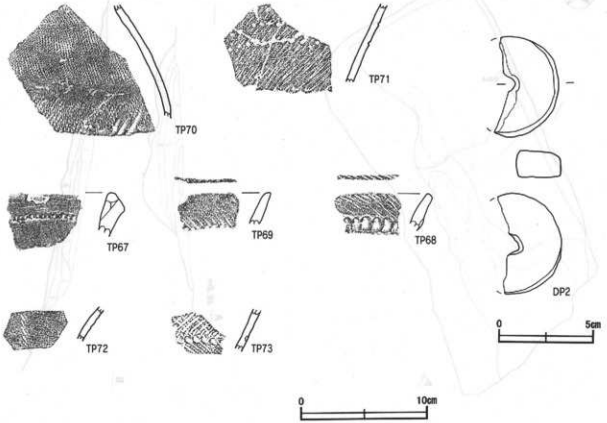
土層解説

1	黒褐色	ロームブロック少量，炭化物微量。		5	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量。	
2	黒褐色	ロームブロック・炭化物微量。		6	黒褐色	ロームブロック微量。	
3	暗褐色	ロームブロック微量。		7	黒褐色	ロームブロック中量，炭化粒子微量。	
4	暗褐色	ロームブロック少量。しまり弱。		8	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量。	

床　本跡の主軸方向に沿って緩やかに傾斜しており，上端部と下端部の比高差は1.2mである。中央部と南部に主軸と直交する形で15～20cmの段差が認められ，さらに南東壁際が8～21cm深くなり床面も踏み固められて硬化している。溝・柱穴などの施設は確認されなかった。

遺物出土状況　弥生土器片117点（口縁部2，胴部108，底部7），土師器片204点（口縁部4，体部200），土製品1点（紡錘車1）が出土している。本跡に伴うと思われる遺物は見られず，いずれも本跡が埋没する過程で混入したものであり，第71図TP67～73の弥生土器片やDP2の紡錘車は第151号住居跡から流れ込んだ可能性がある。

所見　本跡は第1号虎口跡に比較して規模が小さく，簡素な構造となっている。本跡に伴う遺物は見られないことから時期は不明であるが，本跡の前面に第12号堀を横断する土橋や木橋跡などの施設が確認されないことから，第1号虎口跡より時期的に先行する遺構と考えられる。



第72図　第4号虎口跡出土遺物実測図

第４号虎口出土遺物観察表（第72図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP67	弥生時代中期後半	口辺部下端に刻目，内面赤彩。	覆土中	
TP68	弥生時代後期	附加条一種附加２条，口辺部下端に押捺。	覆土中	
TP69	弥生時代後期	附加条一種附加２条，口辺部下端に刻目。	覆土中	
TP70	弥生時代後期	LR・RLの単節斜縄文を羽状に施文。	覆土中	
TP71	弥生時代後期	LRの無節の縄文と刺突文を施文。	覆土中	
TP72	弥生時代後期	LRの縄文を縦位に施文。	覆土中	
TP73	弥生時代後期	附加条一種附加２条。刺突文を施文。	覆土中	

番号	器種	計測値					材質	特徴	備考
		上面径(cm)	下面径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
DP2	紡錘車	(5.2)	(5.2)	1.6	(0.9)	(27.3)	土製	円板状	50% PL77

第８号虎口跡（第59・73図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南西縁辺部，E６b2区に位置しており，２号腰曲輪に臨んでいる。Ⅰ郭とは第12号堀によって分断され，本跡の北西に隣接して第９号虎口跡が位置し，南東に第１号土橋，また本跡直下には第３号虎口跡がそれぞれ構築されている。

規模と形状　本跡の南西側は調査区域外に延びる。本跡は第12号堀南西壁に直交する形で掘り込んでおり，残存部分は幅2.7m，長さ1.1mの楕円形と推定され，断面はU字形である。壁高は1.3～1.5mで外傾して立ち上がり，主軸はN－24°－Eを指すと考えられる。本跡の第12号堀側には幅1.6mの溝状の遺構が連続し，竪堀状に延びると推定される。

床　踏み固められて硬化している。

覆土　19層からなる。１～３層は表土層で，４～19層が覆土である。粘性・しまりが強く，粘土ブロックを多く含んでいることから，人為堆積と考えられる。第９号虎口跡の上層に堆積している23層を掘り込んで構築されていることから，本跡の方が新しく構築された虎口跡であろう。

土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
4　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり弱。
6　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
7　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。
8　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
9　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
10　褐　　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性強。
11　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。しまり弱。
12　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。
13　褐　　色　粘土ブロック多量。粘性強。
14　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
15　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック微量。
16　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり強。
17　褐　　色　粘土ブロック多量。粘性強。
18　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量。しまり強。
19　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。しまり強。

遺物出土状況　本跡からは，遺物は出土していない。

所見　本跡は第３号虎口跡と対応する位置にあることから，Ⅰ郭から２号腰曲輪へ通じる虎口跡であり，ま

たⅡ郭からⅠ郭への通路を横断して掘り込んで構築されていることから，堅堀のような防御的な性格も持っていたと考えられる。本跡の時期は不明であるが，第９号虎口跡の埋没後に構築され，長峰城跡の廃絶までの期間に存続した遺構と思われる。

第９号虎口跡（第59・73図）

位置　Ⅰ郭を形成している台地の南西部縁辺，Ｅ６a1区に位置しており，２号腰曲輪に臨んでいる。Ⅰ郭とは第12号堀によって分断され，本跡の南西部に隣接して第８号虎口跡，さらにその先９ｍの位置に第１号土橋跡が，また本跡直下には第３号虎口跡がそれぞれ構築されている。

規模と形状　本跡の南西側は調査区域外に延びる。本跡は第12号堀南西壁を掘り込んでおり，残存部は長さ1.5ｍ，幅4.4ｍの隅丸方形または隅丸長方形と推定される。壁高は32～63cmで緩やかに外傾して立ち上がる。主軸はＮ－30°－Ｅを指すと考えられる。

床　南東部は平坦であるが，北西部はこれより20cmほど深く，断面は緩やかなＵ字形である。底面は踏み固められて硬化している。

覆土　13層からなる。含有物を均等に含み，レンズ状に堆積している事から，自然堆積と考えられる。本跡の上層に堆積している23層は隣接している第８号虎口跡に掘り込まれている。

土層解説

20　暗　褐　色　ローム粒子少量，炭化粒子微量。しまり強。
21　暗　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量。しまり強。
22　暗　褐　色　ローム粒子微量。しまり強。
23　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
24　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
25　褐　　色　ロームブロック・粘土粒子少量。しまり強。
26　暗　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子微量。
27　褐　　色　ロームブロック微量。しまり弱。
28　褐　　色　ローム粒子少量。しまり強。
29　褐　　色　ローム粒子・粘土粒子微量。
30　褐　　色　ローム粒子少量。しまり強。
31　にぶい褐色　ローム粒子・粘土粒子微量。
32　にぶい黄褐色　粘土粒子中量。

遺物出土状況　本跡からは，遺物は出土していない。

所見　本跡は第３号虎口跡と対応する位置にあることから，Ⅰ郭から２号腰曲輪へ通じる虎口跡と思われる。本跡の時期は不明であるが，土層の堆積状況から隣接する第８号虎口跡に先行する遺構であろう。

(4)　土橋跡

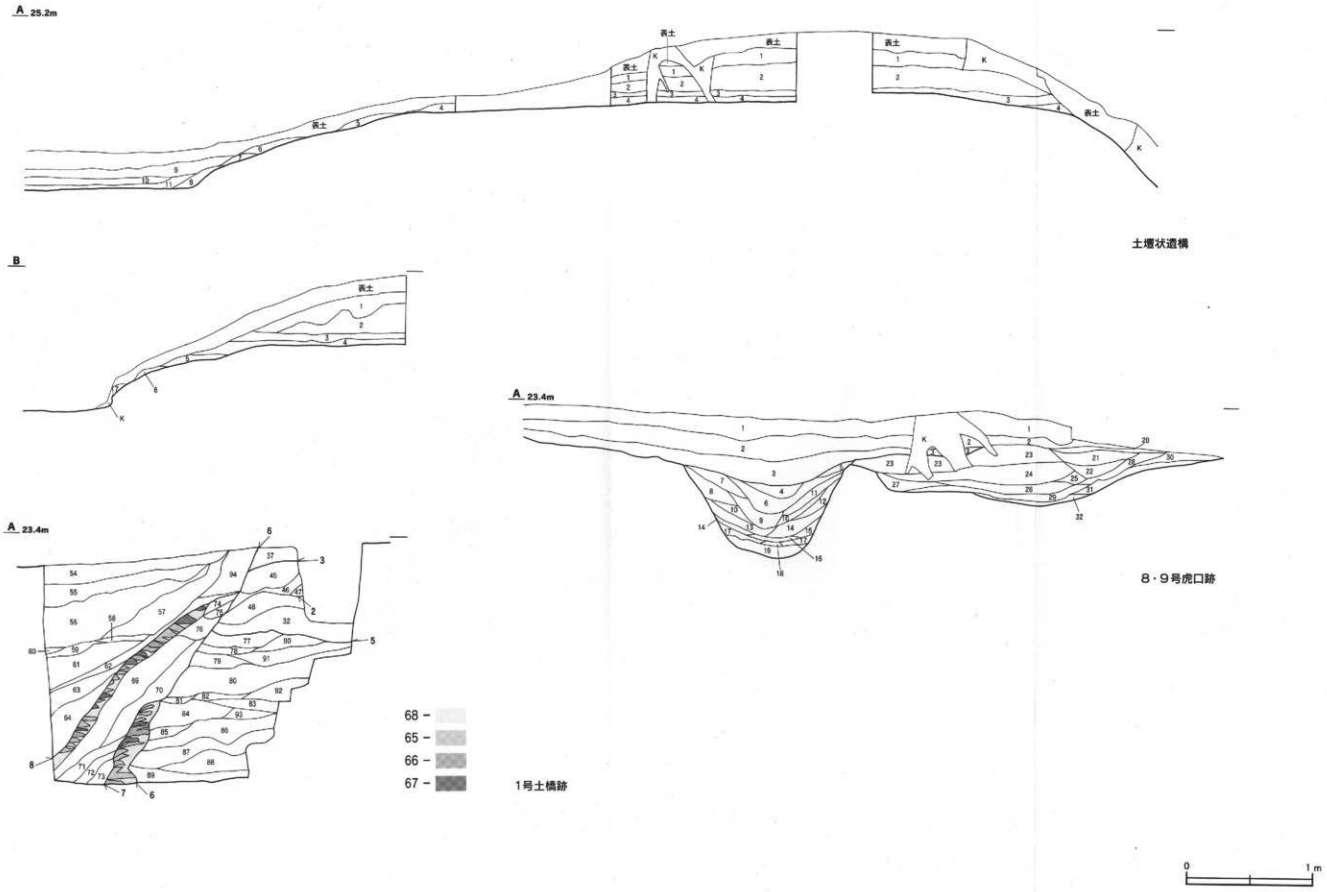
第１号土橋跡（第59・73図）

位置及び確認状況　Ⅰ郭を形成している台地南西部縁辺の，Ｅ６c5区に位置している。第12号堀の南端部付近に当たり，第１号虎口跡の構築状況を調査するために，第12号堀に平行するトレンチを設定したところ土橋跡の盛土を確認した。調査前の状況では，第12号堀の底面が若干高くなっており，標高23.5ｍの等高線が外側に張り出していた。本跡のⅠ郭側に接して第１号虎口跡，北西９ｍに第８号虎口跡，さらに隣接して第９号虎口跡がそれぞれ構築されている。

重複関係　本跡は，第12号堀を埋めて構築されている。

規模及び形状　調査区域の制約から調査は北西側部分に限られ，また安全対策上の問題によって第12号堀の底面までは調査することができなかった。本跡は上幅２ｍ以上，下幅４ｍ以上，高さ3.8ｍ以上で，断面は台形と考えられ，主軸はＮ－35°－Ｅで，第１号虎口跡と方向がほぼ一致している。

構築状況　第12号堀の底面から土盛りを施しているものと考えられる。５のライン以下は粘土ブロックを多量



第73図　第８・９号虎口跡・第１号土橋跡・土壇状遺構実測図

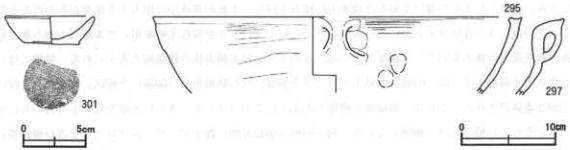
に含み，粘性・しまりの強い土層をほぼ水平に積み上げて，土橋の基底部に相当する地業が行われたと思われる。その後，3・5のライン間にロームブロックと粘土ブロックを含む土層を用いて本跡の上部と第1号虎口跡の基底部を一体のものとして構築している。6のラインは土橋本体の構築面と考えられる。外側には，弧状に黒色土や暗褐色土（65～67層）と粘土ブロックを多量に含む暗褐色土（69層）を楔状に交互に貼り付けた盛土が2条確認された。これは，基底部を構築したあとに7のラインを，さらに上部を積み上げたのちに8のラインをそれぞれ積み上げて補強している。54～64層は第12号堀の覆土で，ロームブロックを含む層が多いことから，人為的に掘め戻したものと思われる。

土層解説（土層番号は第1号虎口跡と通し番号）

54 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量，炭化物微量。しまり強。
55 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量。
56 暗 褐 色 ロームブロック多量，粘土ブロック少量，炭化物・焼土粒子微量。
57 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子少量，焼土ブロック微量。
58 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化物微量。
59 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック多量，炭化粒子少量。粘性強。
60 暗 褐 色 ローム粒子多量，炭化粒子微量。
61 暗 褐 色 ローム粒子中量，粘土ブロック・炭化物微量。
62 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子少量。粘性強。
63 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化物微量。
64 暗 褐 色 ロームブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子微量。
65 黒 色 ロームブロック・焼土粒子微量。
66 暗 褐 色 ロームブロック少量。
67 黒 褐 色 ロームブロック微量。
68 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量。粘性強，しまり弱。
69 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量炭化物微量。粘性・しまり強。
70 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量。粘性・しまり強。
71 黒 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。
72 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量。炭化粒子微量。粘性・しまり強。
73 にぶい黄褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
74 灰 黄 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック中量，炭化物微量。粘性強。
75 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量・炭化物微量。粘性強。
76 暗 褐 色 粘土ブロック・ロームブロック中量，炭化物微量。粘性強。
77 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性・しまり強。
78 灰 黄 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
79 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
80 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
81 灰 黄 褐 色 粘土ブロック中量。粘性強。しまり弱。
82 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。
83 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
84 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性・しまり強。
85 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化物少量。粘性・しまり強。
86 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量。粘性・しまり強。
87 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性強。
88 暗 褐 色 粘土粒子多量，ロームブロック少量。粘性強。
89 暗 褐 色 粘土ブロック多量。粘性強。
90 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，炭化粒子少量。粘性強。
91 暗 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。
92 灰 黄 褐 色 粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性・しまり強。
93 灰 黄 褐 色 粘土ブロック多量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
94 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック微量。

遺物出土状況　土師質土器片8点（口縁部5，体部3）が出土している。本跡の構築土層に混入していたもので，第74図P297は87層付近，P301は8のライン最下層付近からそれぞれ出土している。

所見　本跡は第12号堀を埋め立てて第1号虎口跡とII郭を結ぶ位置に構築されていることから，II郭から1郭へ至る主要通路と想定される。構築に当たっては土橋本体の崩落を防ぐ工夫が見られ，また本跡と第1号虎口跡は一部共通する構築土を持つため，その企画や設定にあたって一体のものと認識されて構築されたと思われる。本跡の時期は，出土した土器及び第1号虎口跡との関連などから，15世紀後半頃を中心に機能していたと思われる。



第74図　第１号土橋跡出土遺物実測図

第１号土橋跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P297	土師質土器	内耳鍋	〔38.9〕	（8.1）	—	長石・雲母	外：黒褐色 内：明褐色	良	内外面ナデ，内面一部指頭押圧	87層付近	5%
P301	土師質土器	かわらけ	7.2	2.3	4.4	白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部静止糸切り	構築土中	60%　PL73

(5)　土壇・塚

土壇状遺構（第58・73図）

位置　Ⅰ郭北東側の台地突端部，Ｃ７c8区に位置し，第12号堀によってⅠ郭と分断されている。本跡の北西側にⅢ郭，南東側に１号腰曲輪が構築され，第12号堀の対岸には切り欠き状遺構が位置している。調査前の現況は本跡とⅠ郭の間には第２号虎口跡が形成され，１号腰曲輪との連絡路が通じており，本跡の西側は幅９～13mの平坦面となっていた。

規模と形状　現況では長径17.5m，短径9.2mの楕円形で，高さ2.1mの塚状であった。表土を除去した結果，長辺11.8m，底辺7.4mの三角形状で，長辺は第12号堀にほぼ直交している。東側は崩落している可能性があり，本来は長方形と想定される。主軸はN－28°－Eを指す。

構築状況　本跡の頂部の高さはⅠ郭とほぼ同一である。本跡は地山を削りだして構築され，特に第12号堀側の成形が顕著である。２～８層は地山の土層で水平に堆積しており，人為的に手を加えられた痕跡は確認できなかった。２・３層のしまりは弱いが，これは植物の根が繁茂したことによると考えられる。本跡の上面からは建物など施設の痕跡は認められなかった。また本跡の西側に続く平坦面は版築状に積みあげて構築されている。

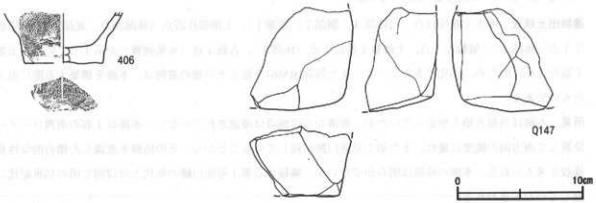
土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
2　褐　色　ロームブロック多量。粘性・しまり弱。
3　褐　色　ロームブロック多量。しまり弱。
4　褐　色　ロームブロック中量，橙色粒子少量。
5　褐　色　ロームブロック多量。
6　にぶい褐色　ロームブロック・粘土粒子多量，粘土ブロック中量。粘性強。
7　にぶい褐色　粘土ブロック多量。粘性強。
8　にぶい褐色　粘土ブロック多量。粘性強。
9　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
10　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
11　褐　色　ロームブロック中量，粘土粒子・炭化粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片２点（底部２），石製品１（五輪塔カ１）が出土し，弥生土器片は本跡を構築する際に混入したものである。第75図Q147は盛土中から出土している。

所見　本跡は北東方向への眺望に優れ，正面に登城山城跡を望む。また１号腰曲輪を管制する位置を占めてお

り，Ⅰ郭との間には虎口跡が存在し，1号腰曲輪へ連絡する通路が降りていることなどから，建物跡などの構造物は確認されていないが，櫓台的な性格をもった施設と考えられる。



第75図　土壇状遺構出土遺物実測図

土壇状遺構出土遺物観察表（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P406	弥生土器	広口壺	—	（3.9）	【6.3】	附加条一種附加2条	石英・長石・雲母	普通	橙色	盛土中	10%

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q147	五輪塔カ	（8.1）	（8.0）	（5.5）	(319)	砂岩	地輪カ	

第40号墳（第51・76図）

位置　Ⅰ郭南西部のコーナー付近，E 6 b9区に位置している。本跡は，長峰の集落から南に遠く下総台地を望み，西に2号腰曲輪を見下ろし，北西に隣接して第1号虎口跡，第1号土橋跡が構築されている。

規模と形状　調査前の状況では，長さ12.7m，幅5.3mの三角形で，高さ0.6mの塚状を呈している。

構築状況　本跡の東から南にかけては崩落の危険があるため，L字状にトレンチを設定して北西方向を中心に調査を行った。当初古墳の可能性を想定していたものの，周溝その他の施設は確認されなかった。土層は18層からなり，植物の根が繁茂していたため粘性・しまりの弱い土層が多い。断面を観察すると，A－A´では褐色・暗褐色・黒褐色土が層状に積み上げられており，B－B´では，7・8層はほぼ水平であるが，3～6・11～13層は傾斜しており，外側から投入されたような堆積状況を見せている。また，8層は粘性・しまりが他の土層よりも強いことから，地山の可能性がある。このため，8層の上面が本跡の基底部に当たり，その上に層状に積み上げて構築されたものと考えられる。

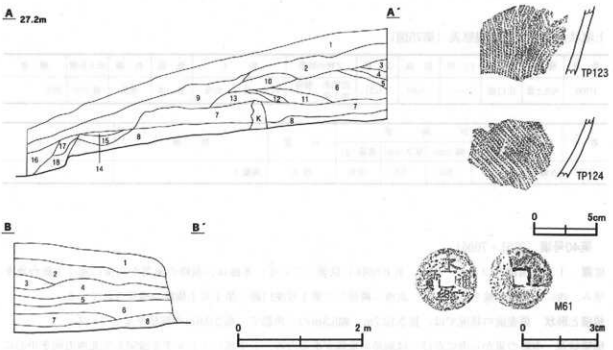
土層解説

1　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
3　黒　褐　色　ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
4　褐　　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
5　暗　褐　色　ロームブロック少量。粘性・しまり弱。
6　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物微量。粘性・しまり弱。
7　褐　　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。
8　褐　　色　ロームブロック多量。
9　暗　褐　色　ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
10　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
11　暗　褐　色　ロームブロック少量。粘性・しまり弱。
12　褐　　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。

13　暗　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
14　暗　褐　色　ロームブロック少量。
15　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
16　暗　褐　色　ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
17　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
18　褐　　色　ロームブロック多量。

遺物出土状況　弥生土器片11点（口縁部３，胴部７，底部１），土師器片27点（体部26点，底部１点），須恵器片１点（体部１），埴輪片１点，土師質土器片１点（体部１），古銭１点（永楽通寶）が出土している。土師質土器片は小片のため，図化できなかった。また第76図M61を除くその他の遺物は，本跡を構築する際に混入したものである。

所見　本跡は当初古墳と想定していたが，周溝などの施設は確認されていない。本跡はⅠ郭の南西コーナーに位置して南方向の眺望に優れ，また第１号虎口跡に接していることから，その防御を意識した櫓台的な性格の施設と考えられる。本跡の時期は明らかでないが，隣接する第１号虎口跡の年代とほぼ同じ頃の15世紀代に機能していたと思われる。



第76図　第40号墳・出土遺物実測図

第40号墳出土遺物観察表（第76図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP123	弥生時代後期	附加条一種附加２条。	構築土中	
TP124	弥生時代後期	附加条一種附加２条。	構築土中	

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径（cm）	銭孔縦cm	厚さ（mm）	重量（g）	材質	年号	西暦		
M61	永楽通寶	2.53	0.6×0.6	1.5	2.3	銅	永楽６年	1408	鋳上がりやや不良	PL80

(6) 溝跡

第54号溝跡（第51・77図）

位置 Ⅰ郭中央部付近，D 7 d3区に位置している。本跡の東側に隣接して第39号墳が，西端付近に第61号溝跡が構築されている。

重複関係 第39号墳西側墳裾，第61号溝跡を掘り込み，第342・418号土坑と重複している。

規模と形状 長さ25m，上幅0.45～0.70m，下幅0.10～0.50m，深さは0.30～0.50mで，断面は逆台形である。主軸は第39号墳西側でN－2°－E，D 7 e3グリッド付近で西南西に向きを変えN－73°－Eを指している。

覆土 7層からなる。3～7層がブロック状に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量。
2 褐 色 ロームブロック中量。
3 暗 褐 色 ロームブロック微量。
4 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。
5 暗 褐 色 ロームブロック微量。しまり弱。
6 褐 色 ロームブロック微量。粘性強。
7 褐 色 ロームブロック少量。粘性強。

遺物出土状況 弥生土器片1点（胴部1），土師器片9点（体部9），埴輪片3点，土師質土器片3点（口縁部2，体部1），陶磁器4点（口縁部1，体部2，底部1），鉄製品1点（帯留め金具）が出土している。第77図M106は1層中から出土している。その他の遺物は小片で図化できるものはなく，いずれも覆土上層から出土し，覆土中に混入していたものと思われる。

所見 本跡は，東側の主軸が第39号墳の現存している墳丘の西側のラインとほぼ一致していることから，第39号墳の整形に関連する遺構と思われる。本跡の時期は，出土した遺物などから近世には廃棄されたと考えられる。

第55号溝跡（第51・77図）

位置 Ⅰ郭南部，D 7 f4区に位置している。本跡の北側に第54号溝跡，南西側に第56号溝跡が構築されている。

重複関係 第244・245号土坑を掘り込み，第274号土坑と重複している。

規模と形状 長さ6.24m，上幅0.40～0.56m，下幅0.10～0.30m，深さは0.06～0.20m，断面は浅い皿状であるが，東側で逆三角形で深い部分がある。主軸はN－26°－Eを指す。

覆土 1層からなる。含有物が均等に含まれることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 本跡は隣接する第56号溝跡と約100°の角度で交差することから，これの構築と関連があると思われる。本跡の時期はこのことから，中世以降と考えられる。

第56号溝跡（第51・77図）

位置 Ⅰ郭南部，D 7 g2区に位置している。本跡の東に隣接して第55号溝跡，北に第54号溝跡が構築されている。

重複関係 第254号土坑と重複している。

規模と形状 長さ10.2m，上幅0.32～1.04m，下幅0.72m，深さは0.27～0.45m，断面は逆台形である。主軸はN－72°－Wを指す。

覆土　5層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量。
2　褐　　色　ロームブロック中量。
3　褐　　色　ロームブロック少量。
4　褐　　色　ローム粒子中量。
5　褐　　色　ロームブロック少量。

遺物出土状況　弥生土器片4点（胴部4），土師器片42点（口縁部2，体部40），土師質土器片2点（体部2），瓦片1点が出土しており，弥生土器片，土師器片は埋没する過程で流れ込んだものと思われる。第77図T2は1層から出土している。

所見　本跡は，隣接する第55号溝跡と約100°の角度で交差することから，これと関連がある遺構と思われる。本跡の時期は，出土した遺物などから，中世以降と考えられる。

第60号溝跡（第51・77図）

位置　Ⅰ郭中央部，D6g9区に位置している。本跡の東側にほぼ平行して第61・62号溝跡が走り，南端部西側に第129号住居跡が構築されている。

重複関係　第392号土坑を掘り込み，第278・422号土坑と重複している。

規模と形状　長さ9.42m，上幅0.52～0.88m，下幅0.30～0.60m，深さは0.25～0.40m，断面は逆台形及びU字形である。主軸はN－3°－Eを指す。

覆土　1層からなる。含有物が均等に含まれていることから，自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。

遺物出土状況　磁器片1点（体部1）で，第77図P377は覆土中から出土している。

所見　本跡の主軸は第61・62号溝跡とほぼ一致することから，同一企画のもとで構築されていると考えられる。本跡の時期は第61号溝跡の関係や出土した遺物などから中世以降と思われる。

第61号溝跡（第51・77図）

位置　Ⅰ郭中央部，D6d0区に位置している。本跡南端部東側に第54号溝跡，西側にほぼ平行して62号溝跡が構築されている。

重複関係　第62号溝跡を掘り込み，第248・261・361・418号土坑と重複している。

規模と形状　現存する規模は，長さ11.5m，上幅0.96～0.98m，下幅0.46～0.77m，深さは0.24～0.28m，断面はU字形である。主軸はN－2°－Wを指す。

覆土　3層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量，焼土粒子微量。
2　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量。
3　褐　　色　ロームブロック中量。

遺物出土状況　弥生土器片1点（胴部1），土師質土器片9点（口縁部2，体部7），陶磁器片4点（口縁部1，体部3）が出土しており，弥生土器は流れ込んだものと思われる。いずれも小片で，図化できなかった。

所見　本跡は第60号溝跡とほぼ同じ主軸を持つことから，同一企画のもとで構築されたものと思われる。また，第62号溝跡を平行して掘り込んでいることから，同溝跡の掘り直しと想定される。本跡の時期は，出土した遺物などから中世以降と思われる。

第62号溝跡（第51・77図）

位置　Ⅰ郭中央部，Ｄ６f0区に位置している。本跡の東側に交差して第54号溝跡が，また平行して第60号溝跡が構築されている。

重複関係　第61号溝跡・第416号土坑に掘り込まれ，第54号溝跡，第248・360・417・419号土坑と重複している。

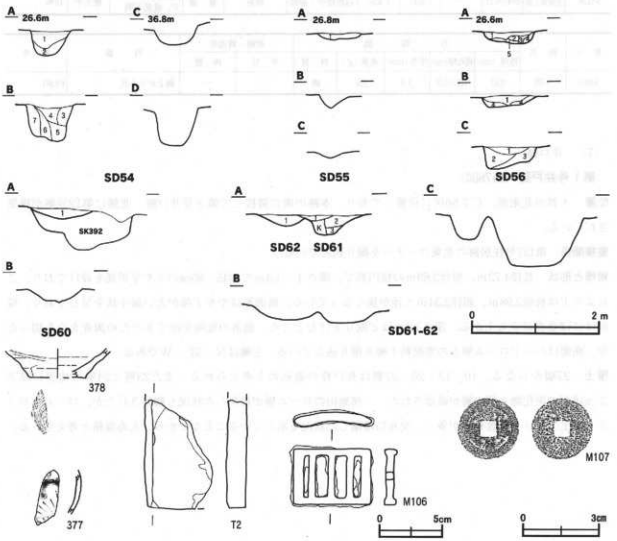
規模と形状　重複が激しく，現存する規模は長さ16.3m，上幅0.58～0.7m，下幅0.20～0.4m，深さ0.20～0.4mで，断面はU字形である。主軸はN－1°－Wを指す。

覆土　1層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片1点（胴部1），土師質土器片5点（体部4，底部1），古銭1点（銭名不明）が出土している。第77図P378は覆土中から，M107は中層付近からそれぞれ出土している。弥生土器片は，本跡が埋没する過程で混入したものであろう。

所見　本跡の主軸は第60・61号溝跡とほぼ一致しており，同一企画のもとで構築されたものと思われる。本跡の年代は出土した遺物などから，中世末頃から近世初め頃（15～16世紀）と考えられる。



第77図　第54～56・60～62号溝跡実測図、出土遺物実測図

第54号溝跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M106	帯金具	4.1	2.9	0.6	17.8	帯留め	100% PL79

第56号溝跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
T2	平瓦	(8.6)	(5.3)	1.5	(79.6)		近世カ

第60号溝跡出土遺物観察表（第77図）

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考	
P377	磁器	小碗カ	—	(3.5)	—	—	灰白色	草花	灰白色	瀬戸・美濃カ	近世	覆土中	5%	

第62号溝跡出土遺物観察表（第77図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P378	土師質土器	かわらけ	—	(2.4)	[4.5]	白色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部不明	覆土中	15%

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	年号	西暦		
M107	不明	2.41	0.7×0.7	1.0	2.6	銅	—	—	縁上がり不良	PL80

(7) 井戸跡

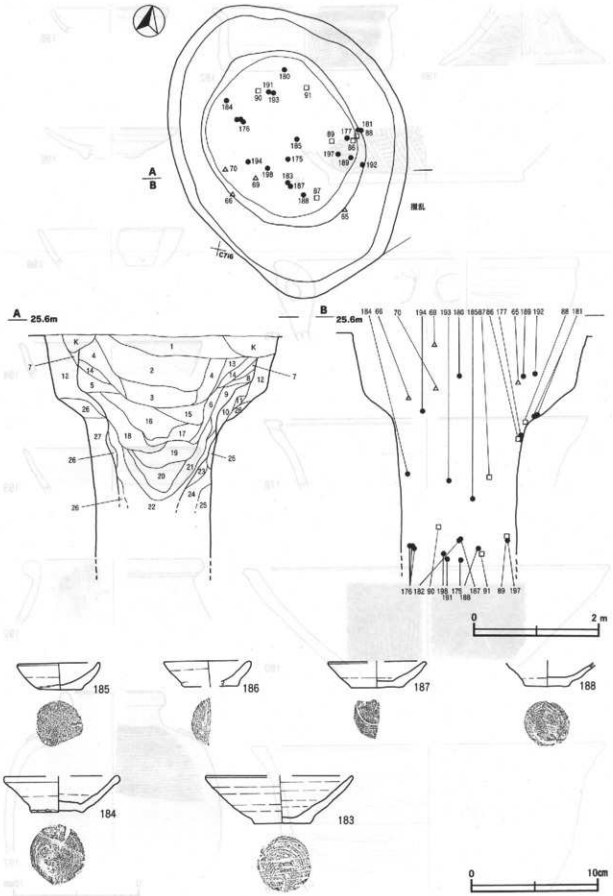
第1号井戸跡（第78図）

位置 Ⅰ郭の北東部，C7h6区に位置しており，本跡の南に隣接して第2号井戸跡，北側に第12号堀が構築されている。

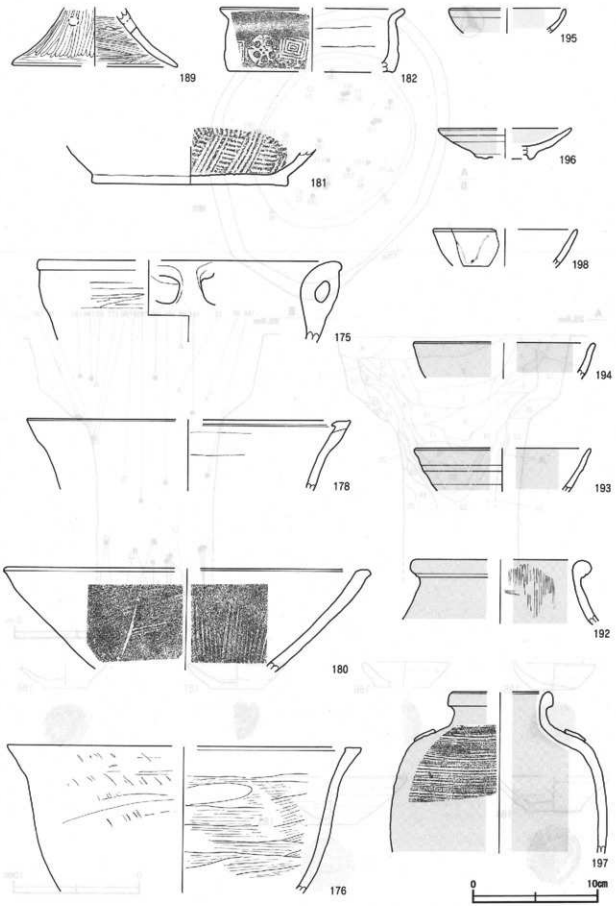
重複関係 第127号住居跡の北東コーナーを掘り込んでいる。

規模と形状 長径4.72m，短径3.69mの楕円形で，深さ1～1.4mで幅45～86cmのやや平坦部を設けており，これより下は長径2.98m，短径2.34mと径が狭くなっている。断面形はやや下部が太い漏斗状を呈しており，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。深さ3.8mほど掘り下げたところ，崩落の危険が出てきたため調査をうち切ったが，底面はハードローム層下の常総粘土層を掘り込んでいる。主軸はN－33°－Wである。

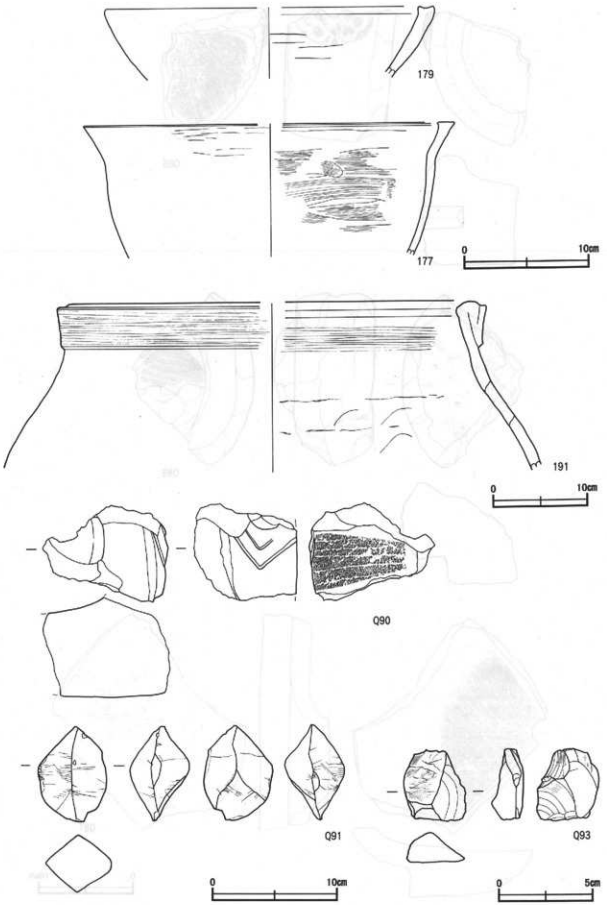
覆土 27層からなる。10～12・26・27層は井戸枠の裏込めと考えられる。また23層と24層の境界に厚さ2cmほどの炭化物と灰の層が確認された。一部地山のローム層が崩落した状況も観察されたが，ロームブロック・粘土ブロックを含む層が多く，交互に堆積した状況を示していることなどから，人為堆積と考えられる。



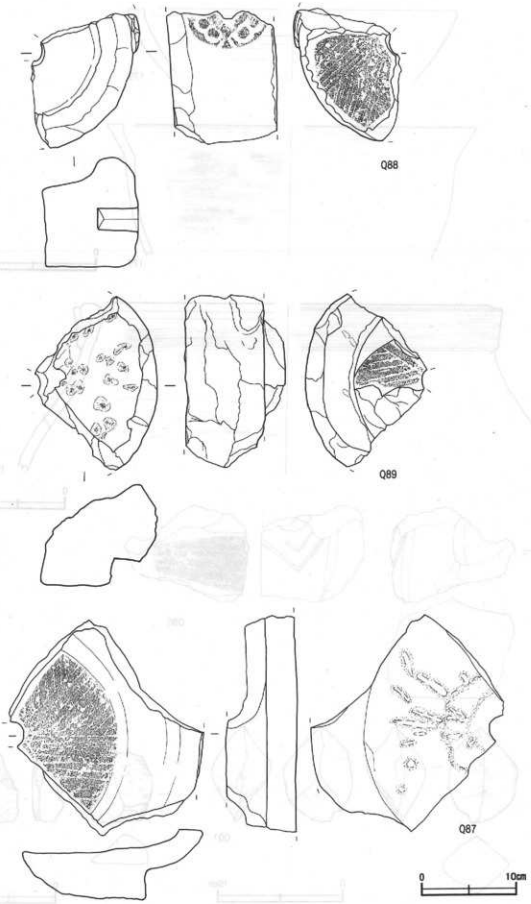
第78図　第１号井戸跡実測図，出土遺物実測図（１）



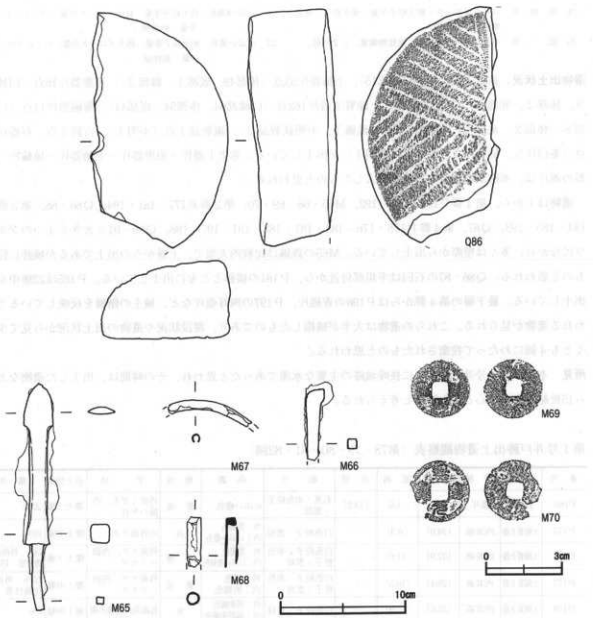
第79図　第１号井戸跡出土遺物実測図（２）



第80図　第１号井戸跡出土遺物実測図（３）



第81図　第１号井戸跡出土遺物実測図（４）



第82図　第1号井戸跡出土遺物実測図（5）

土層解説

1　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量。粘性弱。
3　黒　褐　色　焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性弱。
4　暗　褐　色　粘土ブロック少量。焼土粒子・炭化物微量。粘性弱。
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
6　暗　褐　色　粘土粒子少量。焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
7　褐　　色　ロームブロック中量。粘性・しまり弱。
8　暗　褐　色　焼土粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
9　暗　褐　色　粘土粒子少量。粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
10　褐　　色　ロームブロック中量。しまり弱。
11　褐　　色　ロームブロック中量，炭化物少量。しまり弱。
12　褐　　色　ロームブロック中量。粘性弱。
13　暗　褐　色　粘土粒子少量。粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
14　にぶい黄褐色　粘土粒子中量，粘土ブロック少量，炭化粒子微量。
15　暗　褐　色　炭化粒子・粘土ブロック少量，焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
16　暗　褐　色　粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量。粘性・しまり弱。
17　にぶい黄褐色　粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化物微量。粘性・しまり弱。
18　暗　褐　色　粘土粒子中量，粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
19　にぶい黄褐色　粘土粒子少量，ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
20　にぶい黄褐色　粘土粒子中量，粘土ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
21　暗　褐　色　粘土粒子中量，粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
22　黒　褐　色　粘土粒子少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量。粘性弱。
23　黒　褐　色　焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量。しまり弱。

24 暗 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量，礫・炭化物微量。粘性弱。
25 褐 色 ロームブロック中量，炭化物微量。しまり弱。
26 にぶい黄褐色 粘土粒子多量，粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。
27 にぶい黄色 粘土粒子多量，粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。

遺物出土状況 弥生土器片15点（胴部15），土師器片53点（体部49，底部１，脚部３），須恵器片16点（口縁部９，体部２，底部５），埴輪片１点，土師質土器片162点（口縁部64，体部54，底部44），陶磁器片11点（口縁部８，体部２，底部１），鉄器片３点（鉄鏃１，不明鉄製品２），銅製品１点（不明１），古銭２点，石器片８点（茶臼片５，砥石片１，剥片１，不明１）が出土している。弥生土器片・須恵器片・土師器片・埴輪片・石器の剥片は，本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。

遺物は上から，第１群P180・189・192，M65・66・69・70，第２群P177・181・194，Q86・88，第３群P184・185・193，Q87，第４群P175・176・183・187・188・191・197・198，Q89～91と大きく４つのグループに分かれ，多くは墓際から出土している。M65の鉄鏃は比較的大型で，上層からの出土であるが城跡に伴うものと思われる。Q86・87の石臼は平坦部付近から，P181の擂鉢とともに出土している。P185は22層中から出土している。最下層の第４群からはP198の青磁片，P197の四耳壺片など，城主の階層を反映していると思われる遺物が見られる。これらの遺物は大半が破損したものであり，埋没状況や遺物の出土状況から見て少なくとも４回にわたって投棄されたものと思われる。

所見 本跡は第２号井戸跡ともに長峰城跡の主要な水源であったと思われ，その時期は，出土した遺物などから15世紀後半を中心とした時期と考えられる。

第１号井戸跡出土遺物観察表（第78・79・80・81・82図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P189	土師器	高坏	—	(4.6)	[13.2]	石英・赤色粒子・雲母	にぶい橙色	普通	外面ミガキ，内面ハケ目	覆土上層	25%
P175	土師質土器	内耳鍋	[24.0]	(6.3)	—	白色粒子・雲母	外：黒褐色 内：にぶい橙色	良	内外面ナデ	覆土下層	10%
P176	土師質土器	内耳鍋	[27.9]	(11.6)	—	白色粒子・赤色粒子・雲母	外：黒褐色 内：にぶい黄橙色	普通	外面ナデ，内面ヘラナデ	覆土下層	15% 外面炭化物付着 PL73
P177	土師質土器	内耳鍋	[29.4]	(10.5)	—	白色粒子・赤色粒子・雲母	外：黒色 内：灰褐色	普通	外面ナデ，内面ヘラナデ	覆土中層	10% 外面炭化物付着
P178	土師質土器	内耳鍋	[25.6]	(5.6)	—	白色粒子・雲母	外：明赤褐色 内：極暗赤褐色	良	器面荒れ調整不明	覆土中層	5%
P179	土師質土器	内耳鍋	[26.0]	(5.6)	—	白色粒子・雲母	外：黒色 内：暗赤褐色	良	内外面ナデ	覆土中層	5%
P180	土師質土器	擂鉢	[29.0]	(8.0)	—	白色粒子・赤色粒子	明赤褐色	良	内面擂り目・ナデ，外面ナデ	覆土上層	15%
P181	土師質土器	擂鉢	—	(2.9)	[15.4]	石英・赤色粒子・雲母	赤褐色	普通	内面擂り目・ナデ，外面ナデ	覆土中層	10%
P182	土師質土器	焙烙カ	[14.4]	5.0	[13.0]	白色粒子・雲母	にぶい赤褐色	良	外面ナデ，内面ナデ	覆土中層	25%
P183	土師質土器	かわらけ	[11.8]	3.7	4.4	白色粒子・雲母	にぶい橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土下層	55% 金属質の付着物有り PL73
P184	土師質土器	かわらけ	[9.2]	2.9	4.2	赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土中層	50% PL73
P185	土師質土器	かわらけ	6.4	2.2	3.3	白色粒子・赤色粒子・雲母	明赤褐色	普通	内外面ロクロナデ，底部静止糸切り	覆土中層	80%
P186	土師質土器	かわらけ	6.7	2.0	[4.2]	石英・白色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部静止糸切り	覆土中層	45%
P187	土師質土器	かわらけ	[7.6]	2.1	[4.0]	赤色粒子・黒色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土下層	10%
P188	土師質土器	かわらけ	—	(1.8)	3.5	石英・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土下層	20% 金属質の付着物有
P191	常滑	壺	[42.6]	(17.7)	—	長石・石英・雲母	橙色	普通	内外面ナデ	覆土下層	5%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P192	陶器	壺カ	[14.0]	(5.1)	—	砂粒	灰黄褐色	—	灰褐色	古瀬戸	中世	覆土上層	5%
P193	陶器	天目茶碗カ	[14.0]	(3.4)	—	砂粒	灰白色	—	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	—	—	覆土中層	5%
P194	陶器	天目茶碗カ	[14.4]	(2.8)	—	—	灰白色	—	黄褐色	—	—	覆土中層	5%
P195	陶器	碗	[9.2]	(2.0)	—	—	灰白色	—	灰白色	—	—	覆土中層	5%
P196	陶器	台付皿	[10.4]	2.4	[4.8]	砂粒	黄橙色	—	灰白色	古瀬戸カ	—	覆土中層	20%
P197	陶器	四耳壺カ	[8.0]	(12.8)	—	砂粒	灰黄色	—	灰釉	古瀬戸	中世	覆土下層	20%
P198	磁器	碗カ	[11.4]	(2.9)	—	—	灰白色	—	ｵﾘｰﾌﾞ灰色	龍泉窯カ	中世	覆土下層	5%

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q86	茶臼	(24.5)	(14.3)	9.0	(4130)	安山岩	上臼カ	PL78
Q87	茶臼	(22.4)	(18.8)	7.2	(1940)	安山岩	下臼カ	
Q88	茶臼	(11.3)	(11.3)	(11.2)	(2000)	安山岩	軸穴の台座が花弁状	PL78
Q89	茶臼	(17.9)	(12.7)	10.4	(1920)	安山岩	上臼カ	
Q90	茶臼	19.7	20.2	6.5	1940	安山岩	硬石などの残欠カ	
Q91	砥石	7.5	5.1	4.5	126.7	凝灰岩	立方体に加工されたものカ	PL77
Q93	剥片	3.8	3.3	1.7	17.9	安山岩		

番号	器種	計測値(cm・g)							材質	特徴	備考
		全長	鎺身長	鎺身幅	鎺被部長	鎺被部幅	茎長	重量			
M65	鉄鏃	11.9	2.1	1.4	6.3	0.9	3.5	40	鉄	柳葉	PL79

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M66	不明	(3.7)	0.5	0.5	(8.0)	釘カ	
M67	不明	(4.4)	0.5	0.4	(2.0)	飾金具カ	
M68	不明	2.7	0.8	0.8	1.9	金具、飾金具カ	PL79

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	年号	西暦		
M69	不明	2.34	0.7×0.7	1.3	3.1	銅	—	—	鋳上がり不良	PL80
M70	天聖元寶カ	2.45	0.7×0.7	1.0	1.4	銅	天聖元年	1023	一部欠損	

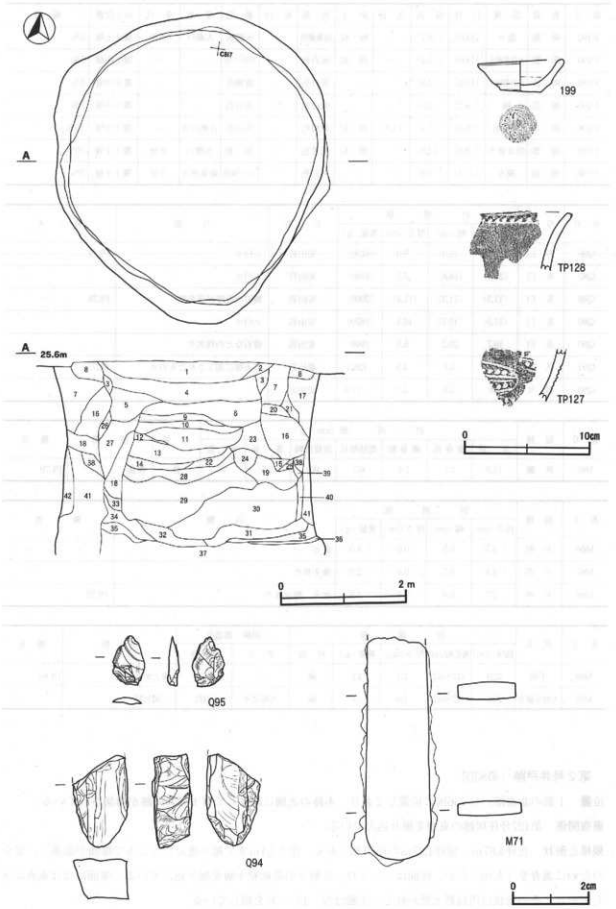
第2号井戸跡（第83図）

位置　Ⅰ郭の北東部，C7i6区に位置しており，本跡の北側に隣接して第1号井戸跡が構築されている。

重複関係　第127号住居跡の東側を掘り込んでいる。

規模と形状　長径4.87m，短径4.27mの楕円形である。深さ3.4mまで掘り進んだところで壁面が崩落し，安全のために調査をうち切ったが，底面はハードローム層下の常総粘土層を掘り込んでいる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり，その形状は円筒形と思われる。主軸はN－15°－Eを指している。

覆土　42層からなる。一部壁が崩落した状況も観察できたが，ロームブロック・粘土ブロックを含む層が見ら



第83図　第２号井戸跡・出土遺物実測図

れ，暗褐色土層と交互に堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

1 灰 褐 色 粘土粒子少量，粘土ブロック微量。
2 褐 灰 色 粘土粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック少量。
3 灰黄褐色 粘土粒子中量，ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
4 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化物微量。
5 黒 褐 色 ローム粒子少量。
6 褐 色 ローム粒子多量，ロームブロック少量。
7 暗 褐 色 ローム粒子中量，ロームブロック少量。
8 暗 褐 色 焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
9 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。粘性弱。
10 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
11 暗 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
12 にぶい黄褐色 粘土粒子多量，粘土ブロック中量，ロームブロック少量。焼土粒子微量。しまり弱。
13 褐 色 ロームブロック中量，粘土粒子少量，炭化粒子微量。しまり弱。
14 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。しまり弱。
15 暗 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
16 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量。
17 褐 色 ロームブロック多量，炭化粒子微量。
18 褐 色 ロームブロック少量。しまり弱。
19 明 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子・炭化粒子微量。
20 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
21 暗 褐 色 粘土粒子少量。粘性・しまり弱。
22 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
23 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
24 暗 褐 色 ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
25 にぶい黄褐色 ローム粒子・粘土粒子中量，ロームブロック・粘ブロック少量。しまり弱。
26 褐 色 ローム粒子中量，ロームブロック少量，粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
27 褐 色 ロームブロック多量，焼土粒子微量。
28 褐 色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性弱。
29 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性弱。
30 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
31 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
32 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
33 にぶい褐色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
34 暗 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
35 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
36 黒 褐 色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。しまり弱。
37 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。しまり弱。
38 黄 褐 色 粘土ブロック・粘土粒子多量，ローム粒子微量。粘性強。
39 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり弱。
40 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック・焼土粒子微量。
41 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
42 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。

遺物出土状況 縄文土器片２点，弥生土器片62点，土師器片13点，土師質土器片115点，鉄器片１点（刀片１），石器片３点（砥石片１，剥片１・不明１）が出土している。縄文土器片・弥生土器片・土師器片等は，本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。第83図Ｐ199は14層から出土している。

所見 本跡は長峰城跡の主要な水源であったと想定されるが，第１号井戸跡と併存していたかどうかを含めて時期的な関係は明らかではない。本跡の時期を明確に限定することはできないが，出土した遺物などから中世と考えられる。

第２号井戸跡出土遺物観察表（第83図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考	
P199	土師質土器	かわらけ	6.8	2.6	3.1	雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	14層中	100%	PL73

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP127	縄文時代晩期	沈線区画内に列点文充填。	覆土上層	
TP128	弥生時代後期前半	口縁部に刻み目を施文。	覆土中層	

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q94	石核	4.9	2.8	2.1	33.4	チャート	柱状に加工されている	
Q95	剥片	2.6	1.7	0.4	1.7	チャート		

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M71	不明	(11.7)	3.2	0.7	(178.7)	鉄製品	

(8) その他の施設

切り欠き状遺構（第58図）

位置 Ⅰ郭北東部のＣ７j6区，第12号堀の南側斜面に位置している。第12号堀を挟んで土壇状遺構と対峙し，また南側には第１号井戸跡が構築されている。

規模及び形状 東壁4.6m，西壁2.9m，南壁5.2mの台形で，深さは1.38mである。壁は外傾して立ち上がり，主軸はＮ－18°－Ｗを指す。

構築状況 第12号堀斜面の地山を掘り込んでいる。本跡の底面はローム下の粘土層まで達している。

床 平坦で，若干硬化している。

遺物出土状況 本跡からは遺物は出土していない。

所見 本跡は第２号虎口跡の背後に位置し，１号腰曲輪を登り切った位置からは本跡の内部を見通すことはできない。このため，武者隠し的な性格を持つ遺構と考えられる。また，Ⅰ郭へ登る通路的な役割も果たしていたものと思われる。

(9) 土坑

Ⅰ郭では，136基の土坑が調査された。それぞれの土坑については代表的なものを記述するにとどめ，その他は実測図と一覧表に掲載する。

第222号土坑（第84図）

位置 Ⅰ郭の北東部，Ｄ７a5区に位置している。本跡の北に第218・219号土坑，東に第220号土坑が，さらにその東には第１・２号井戸跡が構築されている。

重複関係 第223号土坑を掘り込んでいる。

規模及び形状 直径1.26m，深さ29cmの円形で，壁面は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。主軸はＮ－8°－Ｅを指す。

覆土 ３層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗 褐 色 炭化物・焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
2 黒 色 炭化物少量，焼土ブロック微量。粘性・しまり弱。
3 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性・しまり弱。

遺物出土状況 弥生土器片１点（胴部１），土師質土器片１点（底部１）が出土している。弥生土器片は埋没の過程で流れ込んだものである。第84図Ｐ203は覆土中から出土している。

所見 本跡は当初柱穴と考えられたが，柱痕は確認されず，時期は出土した遺物などから中世と考えられる。

第222号土坑出土遺物観察表（第84図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P203	土師質土器	かわらけ	—	(1.9)	3.6	石英・赤色粒子・黒色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土中	70%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP130	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	覆土中	

第223号土坑（第84図）

位置　Ⅰ郭の北東部，D7a5区に位置している。本跡の北に第218・219号土坑，東に第220号土坑が，さらにその東には第1・2号井戸跡が構築されている。

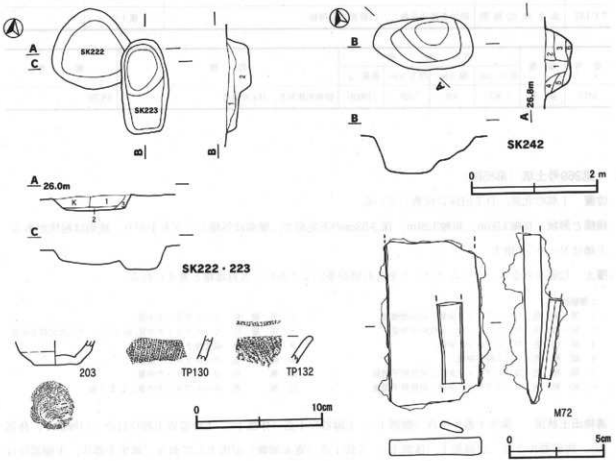
重複関係　第222号土坑に掘り込まれている。

規模及び形状　長軸1.48m，短軸0.74m，深さ34cmの隅丸長方形で，壁面は外傾して立ち上がり，底面はほぼ平坦であるが，高さ約16cmの段差がある。主軸はN－16°－Wを指す。

覆土　2層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。　　2　褐　色　ロームブロック中量。

遺物出土状況　土師器片1点（体部1）が出土しており，本跡の覆土に混入したものである。



第84図　第222・223・242号土坑実測図，出土遺物実測図

所見　本跡は墓壙と推定され，時期は第222号土坑との重複関係などから中世と考えられる。

第242号土坑（第84図）

位置　Ⅰ郭の南東部，D７f4区に位置している。本跡の北に第39号墳，北西から西にかけて第55号溝跡，第243・268号土坑がそれぞれ構築されている。

規模及び形状　長径1.56m，短径0.60m，深さ60cmの楕円形で，壁面は外傾して立ち上がり，底面は平坦である。主軸はN－72°－Wを指す。

覆土　6層からなる。ロームブロックを含む層が多いことから，人為堆積と思われる。

土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック微量。
4　暗　褐　色　ロームブロック少量。
5　暗　褐　色　ローム粒子微量。
6　褐　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片１点（口縁部１），土師器片５点（口縁部１，体部４），土師質土器片１点（体部１），鉄製品１点（鉄斧）が出土し，弥生土器片，土師器片は混入したものである。第84図M72は覆土中から出土しており，混入したものと考えられる。

所見　本跡の性格は不明で、出土した遺物は位置関係から第39号墳に伴う可能性がある。

第242号土坑出土遺物観察表（第84図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP132	弥生時代後期	附加条縄文を施し，口唇部にも押捺。	覆土中	

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M72	鉄斧	(8.7)	4.9	0.9	(190.8)	短冊形鉄斧か，刀子片錆着	PL79

第269号土坑（第85図）

位置　Ⅰ郭の北部，D７e1区に位置している。

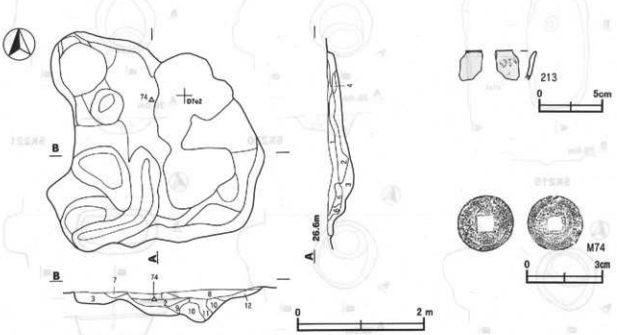
規模と形状　長軸3.50m，短軸3.29m，深さ53cmの不定形で，壁高は外傾して立ち上がり，底面は起伏がある。主軸はN－0°を指す。

覆土　12層からなる。ロームブロックを含む層が多いことから，人為堆積と考えられる。

土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量。
3　暗　褐　色　ロームブロック少量。
4　暗　褐　色　ローム粒子中量。
5　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
6　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
7　黒　褐　色　ロームブロック中量。
8　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子少量。
9　暗　褐　色　炭化粒子少量。
10　暗　褐　色　ロームブロック多量。
11　褐　　色　ロームブロック中量。
12　褐　　色　ロームブロック中量。しまり強。

遺物出土状況　弥生土器片１点（胴部１），土師器片１点（体部１），土師器質土器片11点（口縁部１，体部10），陶磁器片２点（口縁部１，体部１），古銭１点（寛永通寶）が出土しており，弥生土器片，土師器片は本跡の覆土に混入したものである。第85図P213は覆土中，M74は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は形態が不定で，性格も明らかではない。時期は，出土した遺物などから中世以降と考えられる。



第85図　第269号土坑・出土遺物実測図

第269号土坑出土遺物観察表（第85図）

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P213	陶器	小碗カ	—	(2.3)	—	—	淡黄色	草花	灰白色	—	近世	覆土中	5%

番号	銭名	計測値				材質	初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		年号	西暦		
M74	寛永通寶	2.26	0.6×0.6	1.4	2.1	銅	寛永3年	1636	鋳上がり不良	

以下に実測図を掲載した土坑の土層解説を記載する。

第215号土坑土層解説
1　暗　褐　色　粘土粒子微量。

第220号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ローム ブロック・炭化物・焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ローム ブロック少量。粘性・しまり弱。
3　褐　色　ローム ブロック中量。しまり弱。

第221号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック少量，炭化物微量。粘性・しまり弱。
2　褐　色　ローム ブロック中量。しまり弱。

第224号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2　褐　色　ローム ブロック中量。しまり弱。

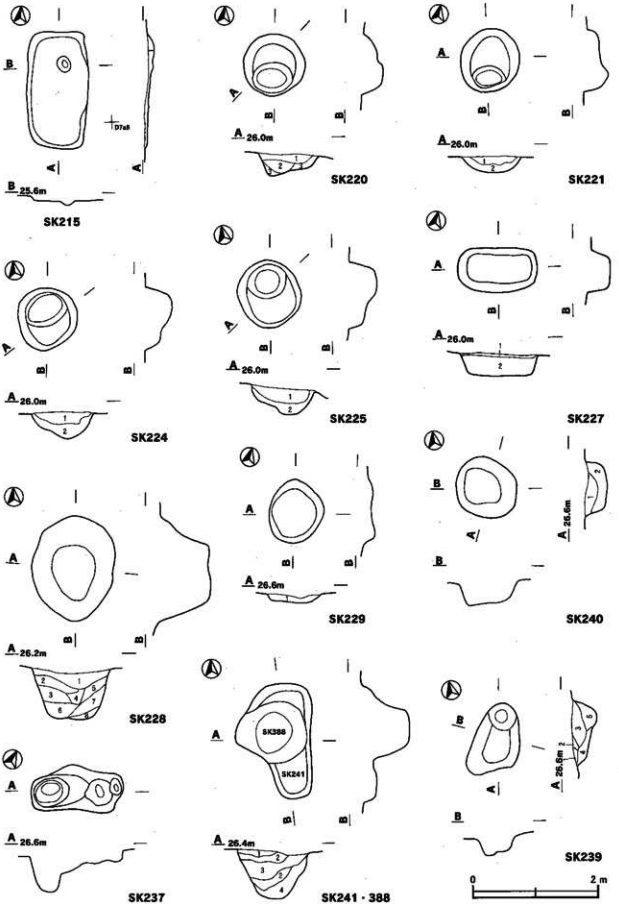
第225号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック少量，炭化物・焼土粒子微量。粘性・しまり弱。
2　褐　色　ローム ブロック中量。しまり弱。

第227号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
2　褐　色　ローム ブロック中量。

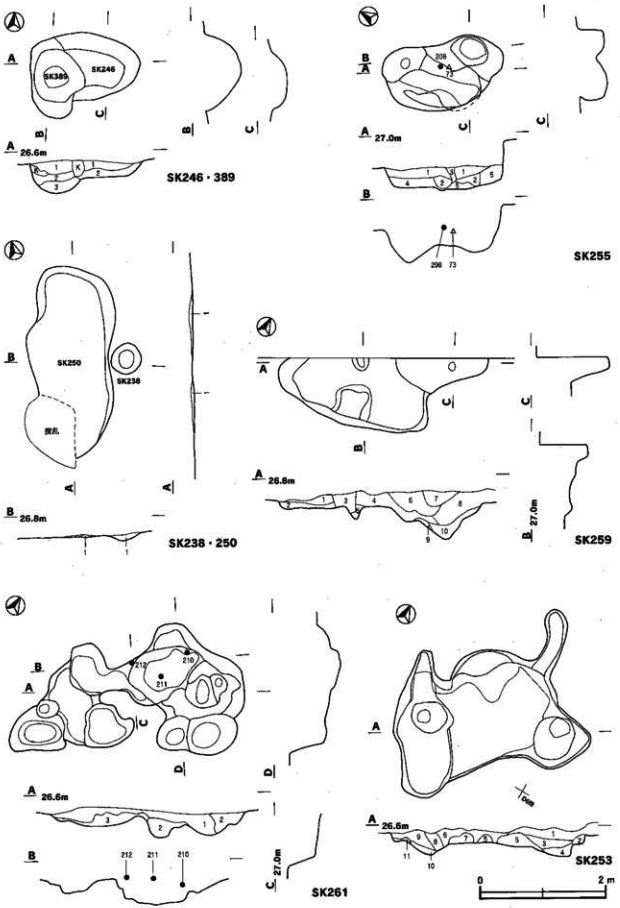
第228号土坑土層解説
1　極 暗 褐 色　炭化粒子中量，ローム ブロック・焼土粒子少量。
2　褐　色　ローム ブロック微量。粘性強。
3　暗　褐　色　ローム ブロック・炭化粒子微量。
4　黒　褐　色　炭化物少量。粘性強。
5　褐　灰　色　ローム粒子少量。
6　褐　色　ローム ブロック少量，炭化物微量。粘性強。
7　灰　褐　色　ローム ブロック少量。
8　褐　色　ローム粒子多量。

第229号土坑土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量。

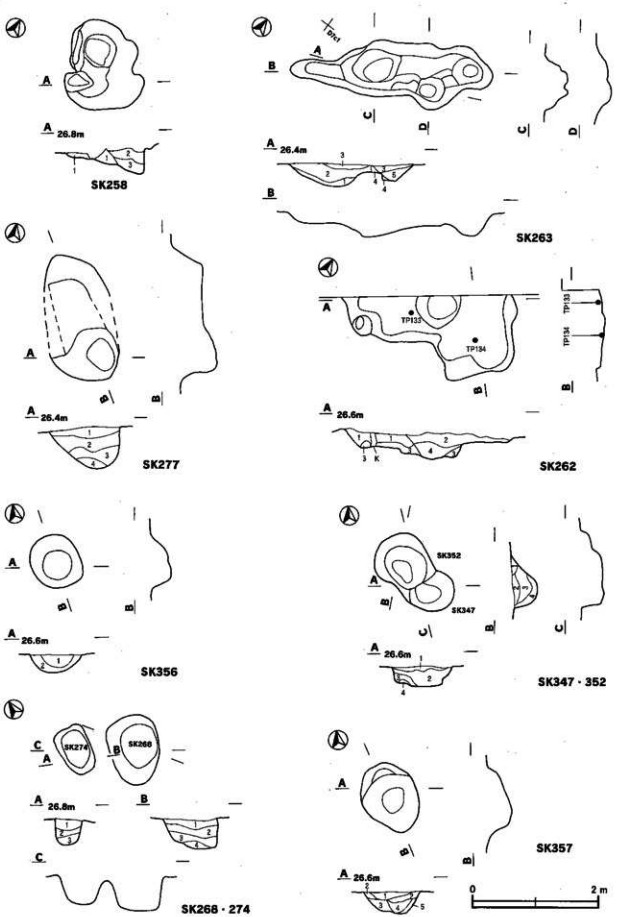
第238号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ローム ブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。



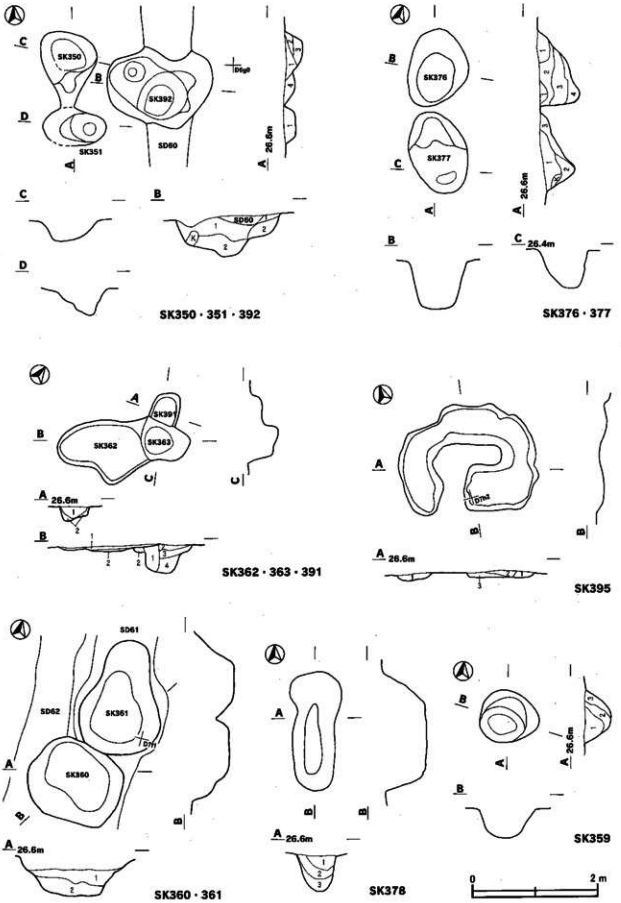
第86図　Ⅰ郭その他の土坑実測図（1）



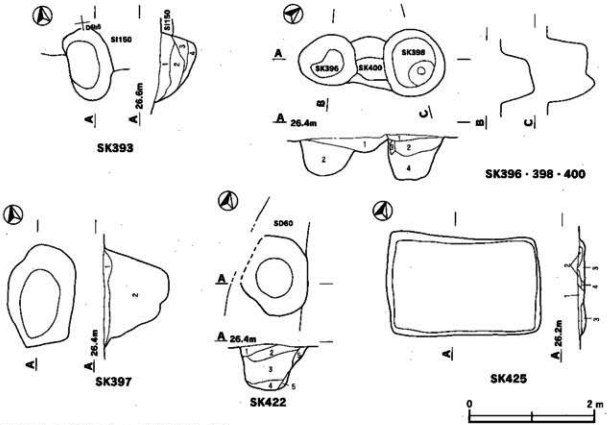
第87図　Ⅰ郭その他の土坑実測図（2）



第88図　Ⅰ郭その他の土坑実測図 (3)



第89図　Ⅰ郭その他の土坑実測図（4）



第90図　Ⅰ郭その他の土坑実測図（5）

第239号土坑土層解説
1　暗　褐　色　炭化粒子少量。
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量。
3　褐　　色　ロームブロック中量。
4　褐　　色　ロームブロック中量。
5　褐　　色　ロームブロック少量。

第240号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック少量。しまり弱。

第246号土坑土層解説
1　にぶい黄褐色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック少量。

第250号土坑土層解説
1　灰黄褐色　粘土粒子多量，炭化物中量，焼土ブロック少量。

第253号土坑土層解説
1　黒　褐　色　ロームブロック少量。
2　褐　　色　ロームブロック微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。
4　褐　　色　ロームブロック・炭化物微量。
5　褐　　色　ロームブロック微量。粘性強。
6　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。
7　褐　　色　ロームブロック微量。
8　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量。
9　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化物微量。
10　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。
11　褐　　色　ローム粒子中量。粘性強。

第255号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物少量。
3　黒　褐　色　ローム粒子微量。しまり弱。
4　褐　　色　ロームブロック・炭化物少量。
5　褐　　色　ローム粒子少量。粘性強。

第258号土坑土層解説
1　褐　　色　ローム粒子少量。粘性強。
2　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。

第259号土坑土層解説
1　褐　　色　ロームブロック微量。
2　褐　　色　ローム粒子少量。粘性強。
3　黒　　色　ローム粒子少量。粘性弱。
4　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。
5　褐　　色　ローム粒子少量。
6　暗　褐　色　ロームブロック微量。
7　暗　褐　色　ローム粒子微量。
8　暗　褐　色　ロームブロック微量。
9　褐　　色　ローム粒子微量。粘性・しまり強。
10　暗　褐　色　ロームブロック少量。粘性強。

第261号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック微量。
2　褐　　色　ロームブロック微量。
3　褐　　色　ロームブロック微量。粘性強。

第262号土坑土層解説
1　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
2　褐　　色　ロームブロック中量。焼土ブロック・炭化粒子微量。
3　褐　　色　ロームブロック微量。粘性強。
4　暗　褐　色　ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量。

第263号土坑土層解説

1 褐　色 ローム粒子少量。粘性強。
2 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック微量。
4 褐　色 ロームブロック微量。
5 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。しまり弱。

第268号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック多量。
2 暗 褐 色 ロームブロック中量。
3 褐　色 ロームブロック中量。
4 褐　色 ロームブロック少量。

第274号土坑土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック・炭化粒子少量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。
3 暗 褐 色 ロームブロック中量。

第277号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子・炭化物微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
3 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
4 褐　色 ロームブロック少量。

第347号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ローム粒子少量。
2 褐　色 ローム粒子中量。粘性強。
3 褐　色 ローム粒子中量。
4 褐　色 ローム粒子多量。

第350号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック少量。
4 暗 褐 色 ロームブロック中量。

第351号土坑土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。

第352号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
2 にぶい黄褐色 ロームブロック・炭化粒子微量。
3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量。
4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量。

第356号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。

第357号土坑土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。
3 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
4 暗 褐 色 ロームブロック少量。
5 褐　色 ロームブロック少量。

第359号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2 褐　色 ロームブロック中量，炭化物微量。
3 褐　色 ロームブロック微量。

第360号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2 にぶい黄褐色 ロームブロック中量。しまり弱。

第362号土坑土層解説

1 にぶい褐色 粘土ブロック多量，ロームブロック中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
2 暗 褐 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。

第363号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化物・焼土粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
4 褐　色 ロームブロック中量。

第376号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。
2 にぶい暗褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック少量。
4 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土粒子・炭化粒子微量。

第377号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量。
2 黒 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量。

第378号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック・炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。しまり強。

第388号土坑土層解説

1 褐　色 ロームブロック中量。粘性・しまり強。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。
3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。しまり弱。
4 にぶい黄褐色 ロームブロック中量。

第389号土坑土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。
3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。

第391号土坑土層解説

1 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物微量。
2 褐　色 ロームブロック少量。

第392号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。しまり弱。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。

第393号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック中量。
2 黒 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
3 にぶい黄褐色 ロームブロック微量。
4 褐　色 ロームブロック中量。しまり強。

第395号土坑土層解説

1 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
2 暗 褐 色 ロームブロック微量。
3 褐　色 ロームブロック中量。粘性強。

第396号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子少量。
2 褐　色 ロームブロック多量。

第397号土坑土層解説

1 暗 褐 色 ロームブロック中量，炭化粒子微量。
2 にぶい黄褐色 ロームブロック多量。

第398号土坑土層解説

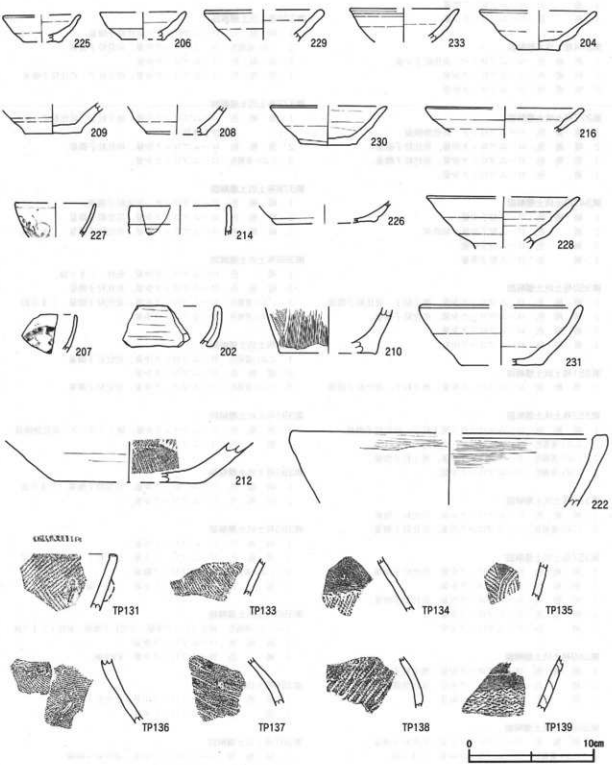
1　暗　褐　色　ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子微量。
2　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
3　暗　褐　色　ロームブロック中量。
4　褐　　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。

第422号土坑土層解説

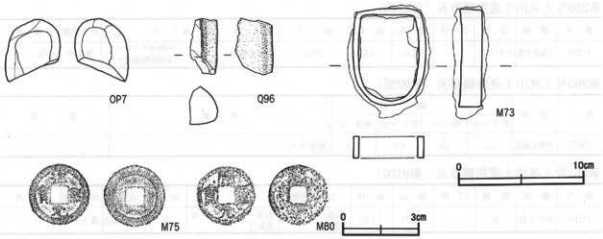
1　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子少量。
3　暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
4　暗　褐　色　ロームブロック中量。
5　褐　　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。

第425号土坑土層解説

1　暗　褐　色　ロームブロック微量。
2　暗　褐　色　ロームブロック微量。しまり強。
3　褐　　色　ロームブロック中量。
4　黒　褐　色　ロームブロック微量。



第91図　Ⅰ郭その他の土坑出土遺物実測図（1）



第92図　Ⅰ郭その他の土坑出土遺物実測図（2）

第219号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P202	土師器	壺	—	（3.2）	—	石英・白色粒子・雲母	にぶい橙色	普通	内外面ナデ	覆土中	5%

第225号土坑出土遺物観察表（第92図）

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）			
Q96	磨石か	（4.4）	（2.3）	（3.0）	（41.5）	流紋岩	石片	

第226号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P204	土師質土器	かわらけ	9.4	3.2	3.3	白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土中	60%　PL73

第231号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP131	弥生時代後期	RLの単節縄文を施文。口唇部に刻み目，貼り瘤有り。	覆土中	

第239号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P206	土師質土器	かわらけ	[6.8]	2.1	[3.4]	赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部不明	覆土中	10% 炭化物付着

第248号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P207	磁器	小椀	—	（3.0）	—	—	灰白色	有	灰白色	—	近世	覆土中	5%

第255号土坑出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P208	土師質土器	かわらけ	—	（2.2）	[4.8]	赤色粒子・雲母	にぶい橙色	良	内外面ロクロナデ，底部不明	覆土上層	10%

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
M73	黄金具	5.1	1.2	0.3	27.8	鉄輪状	PL79

第259号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P209	土師質土器	かわらけ	—	(2.4)	[4.6]	雲母	明赤褐色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土中	10%

第260号土坑出土遺物観察表（第92図）

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
DP7	不明土製品	3.3	2.8	1.0	17.8	整形ケズリ	

第261号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	文様の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置	備考
P210	弥生土器	壺	—	(3.7)	[7.6]	外面ハケ目，内面ナデ	石英・白色粒子・赤色粒子	良	にぶい褐色	覆土中層	10%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P212	陶器	擂鉢	—	(3.3)	[11.8]	赤色粒子	黄橙色	—	褐灰色	在地系	近世	覆土上層	10%

第262号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP133	弥生時代後期	附加条縄文附加2条。	底面	
TP134	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	底面	

第270号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P214	陶器	小椀	[7.8]	(2.4)	—	—	黄橙色	平行文	灰白色	—	中世か	覆土中	5%

第271号土坑出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P216	土師質土器	かわらけ	[12.4]	(1.9)	—	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ	覆土中	5%

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	年号	西暦		
M75	淳熙元寶	2.43	0.7×0.7	1.1	3.0	銅	淳熙元年	1174	鋳上がりやや不良	PL80

第355号土坑出土遺物観察表（第91・92図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P222	土師質土器	鍋	[25.0]	(5.7)	—	赤色粒子・黒色粒子・雲母	外：暗褐色 内：橙色	良	内外面ナデ	覆土中	5%

第360号土坑出土遺物観察表（第92図）

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	年号	西暦		
M80	開元通寶	2.39	0.7×0.7	1.7	2.8	銅	武德4年	624	鋳上がり若干不良	PL80

第367号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P225	土師質土器	かわらけ	[5.8]	2.1	[3.0]	長石・黒色粒子	外：黄灰色 内：黒褐色	良	内外面ロクロナデ	覆土中	15% 金属質の付着物有

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P226	陶器	不明	—	(1.7)	(7.8)	雲母	にぶい橙色	—	暗褐色	在地系か	—	覆土中	5%
P227	磁器	小椀	[6.4]	(2.7)	—	—	灰白色	草花	灰白色	—	近世	覆土中	30%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP135	縄文時代後期	沈線区画内にLRの単節斜縄文を施文。	覆土中	

第368号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P228	土師質土器	かわらけ	[12.1]	(4.1)	—	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	外：橙色 内：灰色	普通	内外面ロクロナデ	覆土中	10%
P229	土師質土器	かわらけ	[9.3]	(2.4)	—	赤色粒子・雲母	灰白色	普通	内外面ロクロナデ	覆土中	5%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP136	弥生時代中期後半	櫛描波状文の区画内にRLの単節斜縄文を施文。	覆土中	

第386号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP137	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	覆土中	

第387号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP138	弥生時代後期	附加条一種附加2条。	覆土中	

第392号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P230	土師質土器	かわらけ	[9.0]	3.1	4.6	赤色粒子・雲母	黒褐色	良	内外面ロクロナデ，底部回転糸切り	覆土中	20%

第393号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP139	弥生時代中期後半	S字状結節文。無文部赤彩。	覆土中	

第395号土坑出土遺物観察表（第91図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P231	土師質土器	かわらけ	[12.8]	4.7	[6.4]	赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部静止糸切り	覆土中	20%

第424号土坑出土遺物観察表（第91図）

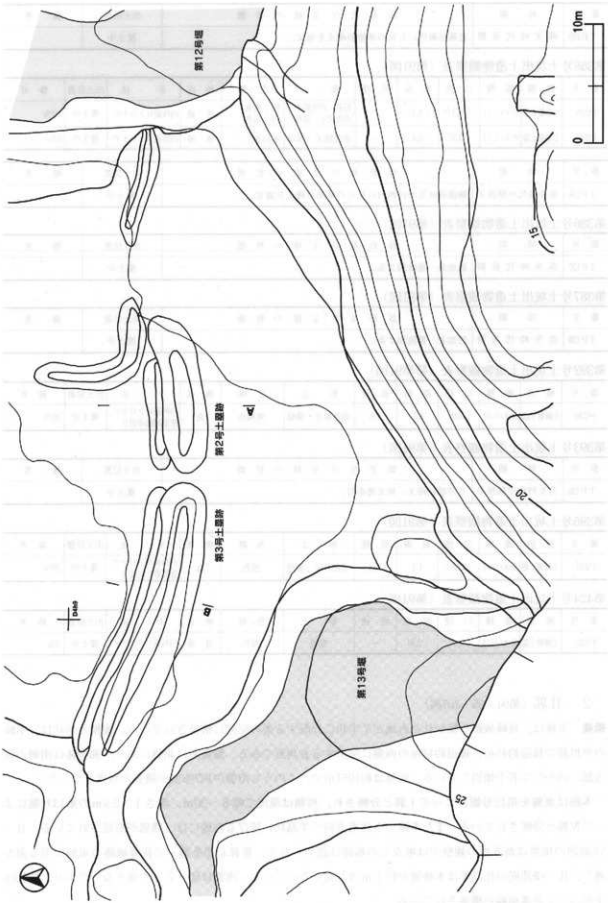
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P233	土師質土器	かわらけ	[8.5]	(2.6)	—	雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ	覆土中	5%

2　Ⅱ郭（第94・95・107図）

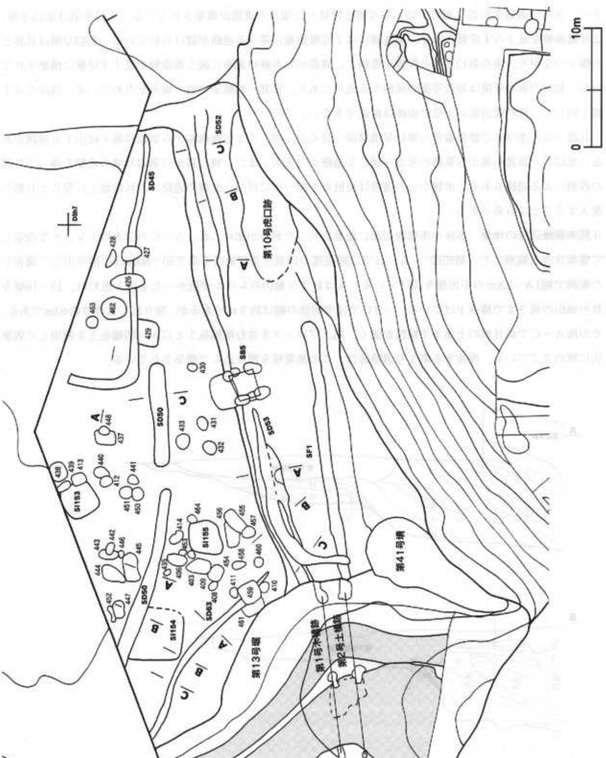
概要　本跡は，長峰城跡の築かれた台地がY字状に分岐する要の位置に構築されている。規模と形状は，本跡の平坦部で長辺約45m，短辺約44mの西側に突出する五角形である。最高所は北側にあり，郭全体は南側の縁辺部に向かって若干傾斜している。面積は約1951㎡で，このうち南側の約796㎡が調査の対象となった。

本跡は東側を第12号堀によって Ⅰ郭と分断され，西側は現況で幅6～20m，深さ1～2.5mの第13号堀によってⅣ郭と分断されている。また本跡から北東方向へ半島状に延びる台地には，Ⅶ郭が形成されている。Ⅱ・Ⅶ郭間の境界は地表面の観察では堀などの痕跡は認められず，Ⅲ郭北部を通って長峰城跡の東側に至る道が通じ，Ⅱ・Ⅶ郭間の比高差は本跡側が約1mほど高くなっている。南側は切り立った崖となっており，約10m下がって2号腰曲輪が構築されている。

Ⅱ郭の内部は，第45・50・68号溝跡及び第2号土塁跡によって区画されている。現況では北東及び南西コー



第93図　Ⅱ郭測量図

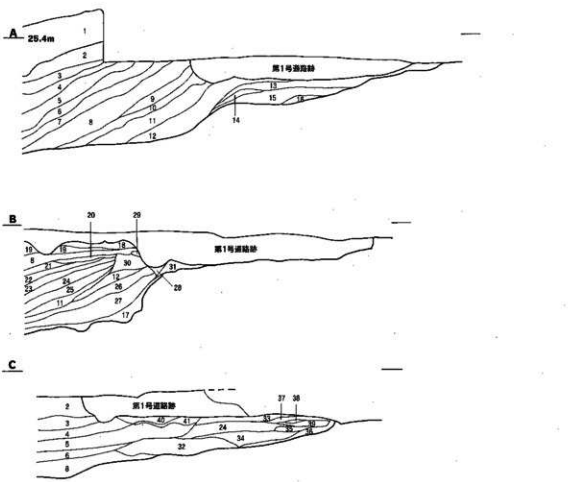


第94図　II郭遺構配置図

ナー，さらに西側突出部に第41・43・44号墳と呼称した塚状の遺構が構築されている。第41号墳は第13号堀，2号腰曲輪を見下ろす位置にあり，南東側には2号腰曲輪に降りる通路が設けられている。第43号墳はⅡ郭と土橋でつながり，南の第13号堀とⅣ郭を管制し，Ⅶ郭から本跡の北西に続く帯曲輪を見下す位置に構築されている。北東の第44号墳は第12号堀の屈曲する地点にあり，Ⅲ郭への眺望が効く場所を占めている。現況ではⅠ郭と同じく，郭の縁辺部に土塁の痕跡は確認できない。

Ⅱ郭へは，南は2号腰曲輪から第41号墳側面へ登るか，同じく2号腰曲輪から第12号堀を経由する通路がある。北はⅡ・Ⅲ郭の間からⅢ郭の北方へ通じる通路から入る。また，Ⅶ′郭から第43号墳の北側を通ってⅡ郭の西側へ入る通路もある。南側からの通路は高低差を持つのに対し，北側の通路は一旦台地上に登るとⅡ郭へ進入することは容易である。

Ⅱ郭南側縁辺部の地業　本跡の南側縁辺部に地業を行った形跡が認められ，A～Cの3本のトレンチを設定して構築状況を観察した（第95図）。A・Bでは縁辺部の旧表土及び地山を深さ50～80cmほど削り出し，調査した範囲で幅1.8～2.8mの平坦部を設けている。AはBより地山のレベルが低かったものと思われ，13～16層をBの地山の高さまで積み上げている。一方Cでは平坦部の幅は約3mであるが，削り出しは深さ約40cmである。その後A～CではⅡ郭の上面まで粘性が強く，粘土ブロックを含む明褐色土とにぶい明褐色土を使用して版築状に埋め立てている。後述する第1号道路跡は，この地業層を掘り込んで構築されている。



第95図　Ⅱ郭地業層実測図

土層解説

1 黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子微量。
2 暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり強。
3 明　褐　色　粘土ブロック中量。粘性強。
4 にぶい褐色　粘土ブロック中量。粘性強。
5 明褐灰色　粘土ブロック・砂質粘土ブロック中量。
6 明　褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量。粘性強。
7 にぶい褐色　砂質粘土ブロック少量，粘土ブロック微量。粘性強。
8 明　褐　色　粘土ブロック・黒色土ブロック少量。粘性強。
9 明　褐　色　粘土ブロック少量，黒色土ブロック微量。粘性強。
10 にぶい褐色　粘土ブロック・砂質粘土ブロック少量。粘性強。
11 暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・砂質粘土ブロック微量。粘性強。
12 にぶい褐色　粘土ブロック中量，砂質粘土ブロック少量，ロームブロック微量。粘性強。
13 黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
14 黒　褐　色　砂質粘土ブロック少量。粘性強。
15 にぶい黄褐色　粘土ブロック多量。粘性弱。
16 にぶい黄褐色　粘土ブロック少量。粘性弱。
17 褐　色　ローム粒子中量。粘性強。
18 褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
19 灰黄褐色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。粘性弱。
20 褐　色　粘土ブロック中量，ロ・・ムブロック・炭化粒子微量。粘性強。
21 暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。
22 暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。粘性強。
23 暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック微量。粘性強。
24 暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量。粘性強。
25 暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・砂質粘土ブロック微量。粘性強。
26 にぶい褐色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量。粘性強。
27 暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性強。
28 極暗褐色　ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性強。
29 暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり強。
30 褐　色　粘土ブロック少量。しまり強。
31 黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量。
32 褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子微量。しまり強。
33 灰　褐　色　ローム粒子・炭化粒子微量。しまり強。
34 灰黄褐色　ロームブロック微量。粘性弱。
35 暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。
36 黒　褐　色　ロームブロック少量，焼土粒子微量。しまり強。
37 暗　褐　色　砂質粘土ブロック少量，ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり強。
38 暗　褐　色　砂質粘土ブロック・ローム粒子微量。
39 にぶい黄褐色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量。
40 褐　色　粘土ブロック中量，ローム粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
41 黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性強。

所見　当初，Ⅱ郭の縁辺部を削り出して平坦部を設け，その後に版築状に埋め立てている。城の縄張り変更によってⅡ郭の面積を広げる必要が生じたと思われ，第１号道路跡が地業層を掘り込んでいることから，その構築が一つの契機になったのであろう。この地業は第１号道路跡などとの関係から，15世紀後半まで下らない時期に行われたと考えられる。

(1)　竪穴住居跡

第153号住居跡（第96図）

位置　Ⅱ郭を形成している台地の中央部，Ｄ５h1区に位置している。

重複関係　本跡の東壁は第413・439号土坑と重複している。

規模と平面形　重複する上坑によって北東及び南東コーナーは失われているが，長軸2.73ｍ，短軸2.72ｍの隅丸方形と推定される。壁高は20～28cmで，若干外傾して立ち上がり，主軸はＮ－19°－Ｗを指す。

床　ほぼ平坦で，若干硬化している。

覆土　５層からなる。含有物が均等に含まれていることから自然堆積と考えられる。また，焼土が北壁よりの中央部付近から確認された。付近を精査したものの竈の袖などの施設は見られず，また上層に焼土が見られることから，本跡が埋没する過程で投棄されたものと思われる。

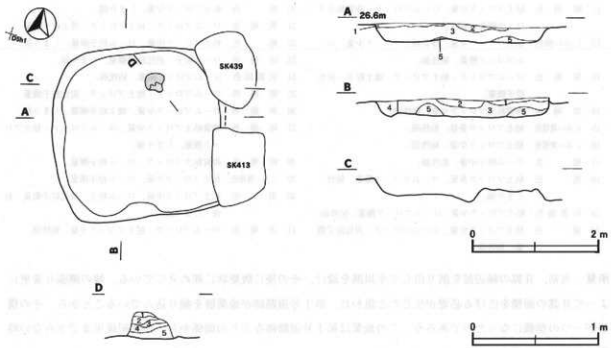
土層解説

1 黒　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。しまり強。
2 黒　褐　色　ロームブロック少量。しまり強。
3 暗　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。
4 暗　褐　色　ロームブロック中量，炭化粒子微量。
5 褐　色　ローム粒子中量。

焼土土層解説
1　暗赤褐色　焼土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
3　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
4　暗　褐　色　ロームブロック微量。
5　褐　　色　ロームブロック微量。

遺物出土状況　弥生土器片17点（胴部17），土師器片３点（体部３），土師質土器片１点（体部１）が出土している。いずれも小片で，図化できなかった。

所見　本跡は床面が若干硬化しているが，柱穴や炉・竈等が確認できなかったことから竪穴状の施設と思われる。本跡の時期は明らかではないが，Ⅰ郭の第145・146号住居跡とほぼ同じ主軸であることから，これに近い頃のものと考えられる。



第96図　第153号住居跡実測図

第154号住居跡（第97図）

位置及び確認状況　Ⅱ郭を形成している台地の西側，Ｄ４i8区に位置している。本跡の西側には第63号溝跡，さらに西側に第13号堀が構築されている。

重複関係　北壁を第50号溝跡に掘り込まれている。

規模と平面形　本跡の北壁は第50号溝跡に掘り込まれ，また東壁も削平されており，現存している部分は長軸4.3m，短軸4.25mの方形と推定される。壁高は10～25cmで若干外傾して立ち上がり，主軸はＮ－１°－Ｅを指すと考えられる。

床　起伏がある。南東部から北東部にかけて，下から約28cm及び約20cmの段差が認められ，底面は硬化している。西壁寄り中央部付近には一部地山の粘土が見られる。

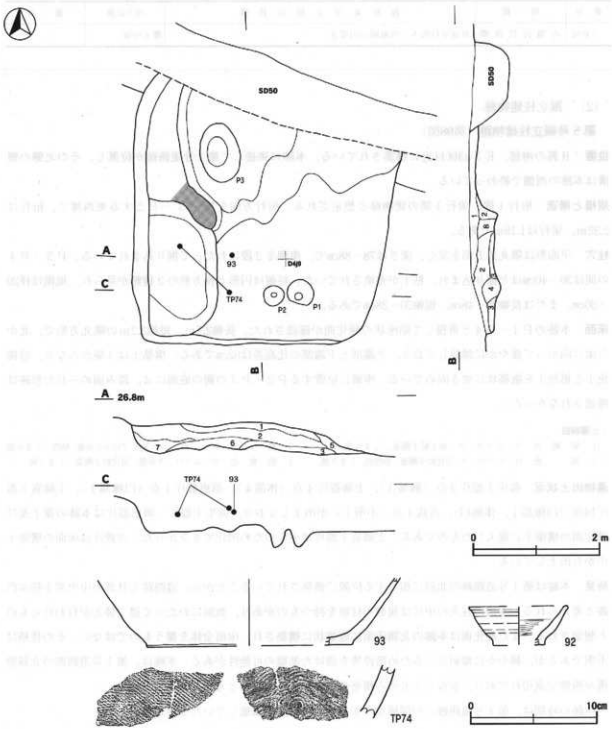
ピット　３か所。Ｐ１・Ｐ２は南壁寄りに位置し深さ23～30cm，Ｐ３は北西部に位置し深さ16cmである。Ｐ１・２は位置から出入り口のピットと思われる。Ｐ３は主柱穴と想定されるが，対応する柱穴は確認されなかったことから，性格は不明である。

覆土　８層からなる。ロームブロックを含む層が多いことから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐　色 ローム粒子多量，粘性・しまり弱。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土粒子微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック少量。
4 暗 褐 色 ロームブロック微量。粘性弱。
5 褐　色 ロームブロック中量。粘性弱。
6 褐　色 ロームブロック中量。
7 褐　色 ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
8 暗 褐 色 ロームブロック微量。

遺物出土状況　土師器片８点（体部７，底部１），須恵器片３点（体部３），土師質土器片５点（口縁部１，体部３，底部１）が出土している。土師器片及び須恵器片は，本跡の埋土に混入していたものであろう。第97図P93は，覆土下層から破片の状態で出土している。



第97図　第154号住居跡・出土遺物実測図

所見　本跡は床面に起伏があり，主柱穴も明確に確認できなかったことから，竪穴状の施設と考えられる。本跡の時期は，出土した遺物などから中世と考えられる。

第154号住居跡出土遺物観察表（第97図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P92	土師質土器	かわらけ	[7.8]	3.1	[4.0]	石英・赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ，底部糸切り	覆土中	15%
P93	土師質土器	鍋	—	(5.3)	[16.2]	石英・雲母	外：明褐色 内：にぶい褐色	良	内外面ナデ，底部不明	覆土下層	10%

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP74	古墳時代後期	外面平行叩き，内面同心円叩き。	覆土中層	

(2)　掘立柱建物跡

第５号掘立柱建物跡（第98図）

位置　Ⅱ郭の南部，Ｅ５a3区付近に構築されている。本跡に隣接して第１号道路跡が位置し，その北側の側溝は本跡の西側で終わっている。

規模と構造　桁行１間，梁行１間の建物跡と想定される。桁行方向をＮ－73°－Ｅとする東西棟で，桁行は2.32m，梁行は1.18mである。

柱穴　平面形は隅丸長方形を呈し，深さは78～88cmで，南側を２段にわたって掘り込まれている。Ｐ３・Ｐ４の間は30～40cmほど掘り込まれ，粘土が充填されていた。柱痕は円形と長方形の２種類が見られ，規模は径20～30cm，または長軸30～48cm，短軸20～28cmである。

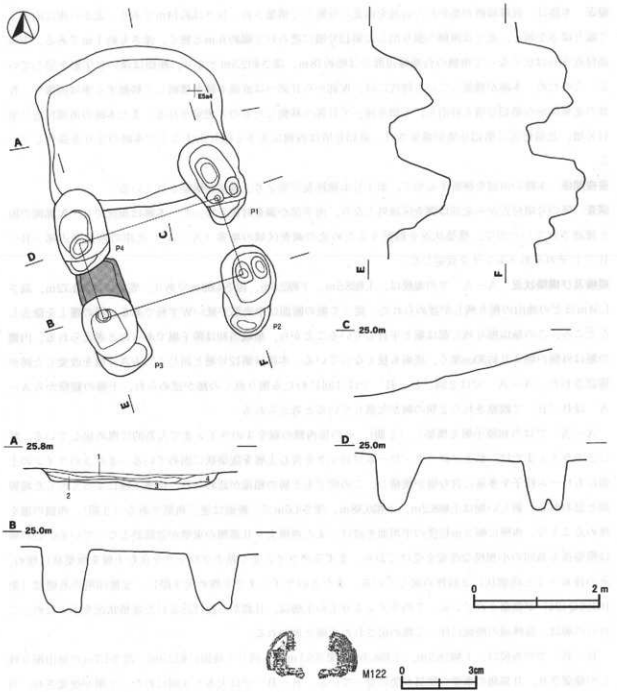
床面　本跡のＰ１・Ｐ４と重複して貼床状の硬化面が確認された。長軸2.7m，短軸2.2mの隅丸方形で，北から南に向かって緩やかに傾斜しており，上端部と下端部の比高差は62cmである。構築土は４層からなり，暗褐色土と褐色土を版築状に突き固めている。南側に位置するＰ２・Ｐ３の間の底面には，踏み固められた形跡は確認されなかった。

土層解説
1　暗褐色　ロームブロック・焼土粒子微量。しまり強。
2　褐　色　ロームブロック・炭化粒子微量。粘性弱，しまり強。
3　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
4　暗褐色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。しまり強。

遺物出土状況　弥生土器片３点（胴部３），土師器片４点（体部４），須恵器片１点（口縁部１），土師質土器片14点（口縁部１，体部13），古銭１点（不明１）が出土しており，弥生土器片・須恵器片は本跡の覆土及び硬化面の構築土に混入したものである。土師質土器片は小片のため図化できなかった。古銭片は床面の構築土中から出土している。

所見　本跡は第１号道路跡の北辺に相当する位置に構築されていることから，道路跡とⅡ郭の中央部を結ぶ門跡と考えられる。本跡の柱穴の中には複数の柱痕を持つものがあり，数回にわたって建て替えが行われたものと想定される。また硬化面は本跡の北側床面に版築状に構築され，床面全体を覆うものではない。その性格は不明であるが，緩やかに傾斜してるため階段等を設けた基礎の可能性がある。本跡は，第１号道路跡の北側側溝が西側で途切れており，少なくともその構築時には存在していたと考えられる。

本跡の時期は，第１号道路跡との関係などから15～16世紀頃機能していたと推定される。



第98図　第５号堀立柱建物跡・出土遺物実測図

第５号掘立柱跡出土遺物観察表（第98図）

番号	銭名	計測値					初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径（cm）	銭孔幅（cm）	厚さ（mm）	重量（g）	材質	年号	西暦		
M122	不明	[2.40]	0.7×―	0.9	0.6	銅	―	―	欠損・銭名不明	

(3)　堀・土墓跡

第13号堀（第99・100・101図）

位置　Ⅱ郭の西側からⅣ郭の北東部をＬ字状に延びている。Ⅳ郭をⅡ郭と分断し，北側は調査区域外である。

現況　本跡は，長峰城跡が築かれた台地を南北に分断して構築され，長さは約14mである。北から南に向かって幅と深さを増し，北では西側へ張り出した第43号墳に遮られて幅約６ｍと狭く，深さも約１ｍである。中央部付近からは広くなって南側の台地縁辺部では幅約18ｍ，深さ約2.5ｍとなり，断面は深いＵ字形を呈している。このため，本跡が機能していた時代には，Ⅳ郭からⅡ郭へは直接本跡を横断して移動する事は困難で，Ⅳ郭の北東部から第43号墳を経由し，土橋を渡ってⅡ郭へ移動したものと想定される。また本跡の南端付近に第41号墳，北端付近に第43号墳が構築され，第43号墳は西側に大きく張り出すことで本跡の守りを強化している。

重複関係　本跡の南部を横断する形で，第１号木橋跡及び第２号土橋跡が構築されている。

調査　第43号墳付近から北部は調査区域外となり，南半部が調査対象となった。本跡は現況でⅡ・Ⅳ郭間の堀と確認されていたので，構築状況を観察するため北の調査区域の境界（Ａ－Ａ′）と南の台地縁辺部（Ｂ－Ｂ′）にそれぞれトレンチを設定した。

規模及び構築状況　Ａ－Ａ′での規模は，上幅8.5ｍ，下幅2.6ｍ，深さ4.62ｍであり，底面には幅1.72ｍ，高さ1.54ｍほどの地山の掘り残しが認められた。従って堀の断面は中央部が低いＷ字形である。堀の覆土を除去したところ，この地山掘り残し部は堀と平行していることから，築城当初は障子堀であったと考えられる。内側の堀は外側の堀より約30cm深く，底面も狭くなっている。本跡は第12号堀と同じく，大きく堀を改変した跡が確認された。Ａ－Ａ′では２回，Ｂ－Ｂ′では３回にわたる掘り直しの跡が認められ，土層の観察からＡ－Ａ′はＢ－Ｂ′で観察された２期の堀が欠落していると考えられる。

Ａ－Ａ′では当初障子堀を構築し（１期），その後西側の堀を４のラインまで人為的に埋め戻している。特に２のラインまでは，粘土ブロック・ロームブロックを含む土層を版築状に固めている。また３のラインの上面にもローム粒子を多量に含む層が堆積し，この面でも土層の相違が認められ，作業工程によって生じた境界面と思われる。新しい堀は上幅8.2ｍ，下幅0.38ｍ，深さ4.6ｍで，断面は逆三角形である（３期）。西側の堀を埋めることで，西壁に幅２ｍ程度の平坦面を設け，また西壁よりⅡ郭側の東壁が急傾斜となっている。この堀は構築後も数回の小規模な改変を受けており，まず５のラインまで粘土ブロックを含む土層を版築状に埋め，その後６・７と版築状に２回埋め戻している。また５のラインまでを埋め戻す際に，宝篋印塔の基礎部（第103図Ｑ134）が投棄されている。７のラインより上の土層は，Ⅱ郭から投げ込まれた堆積状況を示すため，これらの層は，長峰城の廃城に伴って埋め戻された土層と思われる。

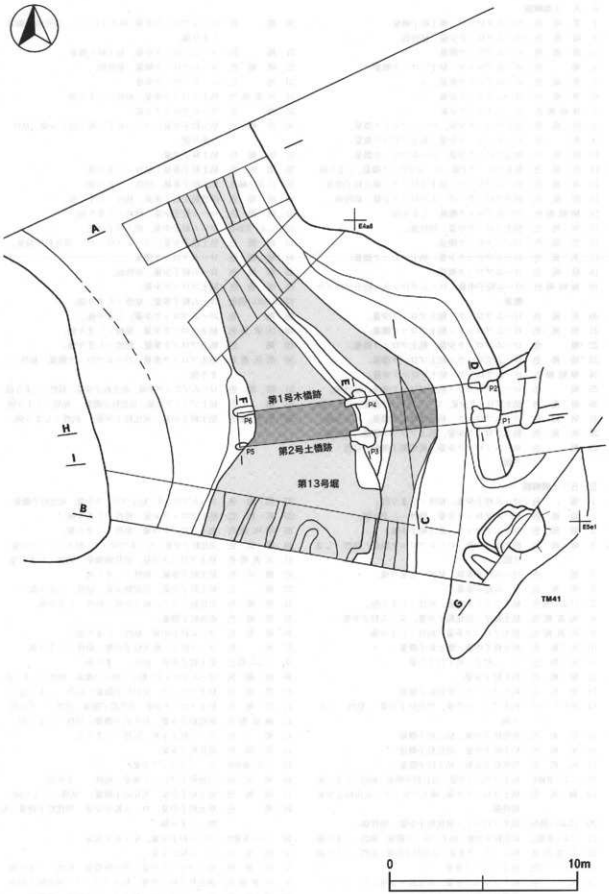
Ｂ－Ｂ′での規模は，上幅18.5ｍ，下幅8.3ｍ，深さ5.1ｍで，同じく底面に幅2.0ｍ，高さ1.7ｍの地山掘り残しが確認され，Ⅱ郭側の東壁の傾斜が急になっている。Ｂ－Ｂ′では大きく３回にわたって堀が改変され，当初は障子堀と思われるが（１期），西側の堀を２のラインまで版築状に埋め戻し，その後新たに西壁を掘り込んで上幅10.5ｍ，下幅2.8ｍ，深さ5.1ｍで，断面Ｕ字形の堀を構築している。この時点では，地山掘り残し部の部分に土盛りしてテラス状の平坦部を構築しているが，障子堀状の構造は変わらなかったものと思われる（２期）。また西壁に幅約1.2ｍの平坦面を設けており，Ａ－Ａ′の状況に対応する。その後さらに西側の堀を６のラインまで版築状に埋め戻し，東側の堀だけが機能するようである（３期）。２・３期にもそれぞれ小規模な改変が行われ，２期では４のライン，３期では６のラインのその痕跡が確認される。６以下の土層はかなり堅く突き固められ，一時期この面が堀底であったと思われる。その後に最終的な廃棄作業が行われ，８のラインまで人為的に埋め戻している。途中７で土層の相違点が認められるが，これは作業工程によって生じた面と考えられる。本跡の西壁は南北にほぼ直線的に走るが，東壁は南半部において約７ｍほど東側に張り出し，屈曲部を設けている。これは防御効果の向上を期待し，いわゆる折りと同じ機能を持たせたものであろう。

A－A′ 土層解説

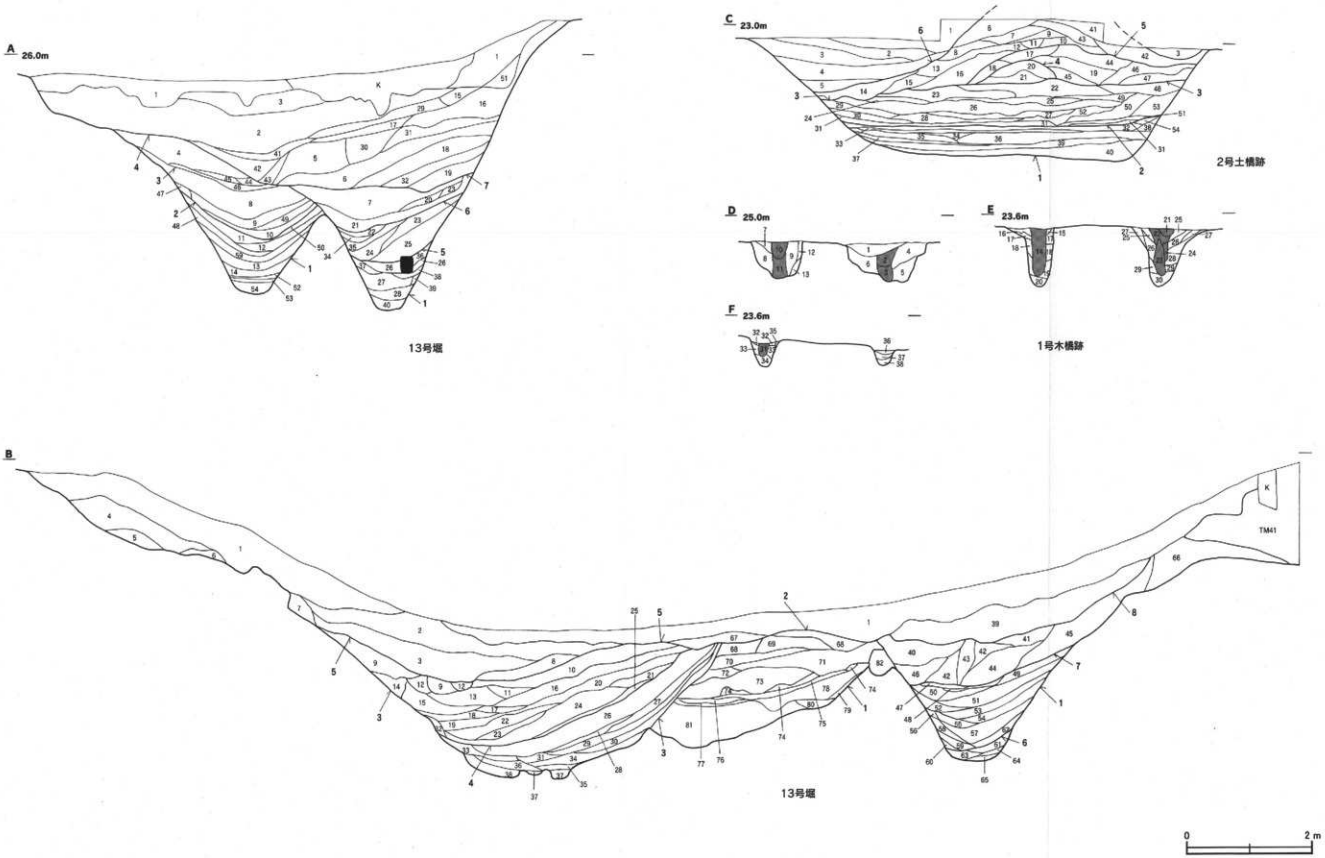
1 黒 褐 色 ロームブロック・焼土粒子微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
3 暗 褐 色 ロームブロック微量。
4 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。
5 黒 褐 色 ロームブロック微量。
6 黒 褐 色 ロームブロック少量。
7 極暗褐色 ロームブロック中量。
8 暗 褐 色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
9 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
10 暗 褐 色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
11 灰 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。しまり強。
12 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック・焼土粒子微量。
13 暗 褐 色 粘土ブロック・ロームブロック少量。粘性強。
14 極暗褐色 ロームブロック微量。しまり弱。
15 灰 褐 色 粘土ブロック中量。粘性強。
16 黒 褐 色 ロームブロック微量。
17 黒 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
18 暗 褐 色 ロームブロック微量。
19 極暗褐色 ローム粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック微量。
20 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。
21 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。
22 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
23 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。
24 極暗褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量。
25 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性強。
26 暗 褐 色 粘土ブロック少量，ロームブロック微量。しまり強。
27 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。しまり強。
28 灰 褐 色 粘土ブロック少量，粘土ブロック微量。粘性強。
29 褐 色 ロームブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
30 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック・炭化粒子微量。しまり強。
31 褐 色 ロームブロック中量，粘土粒子微量。
32 暗 褐 色 ロームブロック微量。粘性弱。
33 褐 色 ロームブロック多量。
34 灰黄褐色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
35 褐 色 ロームブロック中量。
36 黒 褐 色 粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量。粘性・しまり強。
37 灰 褐 色 粘土粒子少量。
38 褐 灰 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
39 にぶい褐色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
40 灰 褐 色 砂質粘土粒子多量。粘性・しまり強。
41 暗 褐 色 ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
42 にぶい黄褐色 ローム粒子中量，粘土粒子少量。
43 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック・炭化粒子微量。
44 暗 褐 色 ロームブロック微量。
45 暗 褐 色 ローム粒子少量。粘性弱。
46 灰 褐 色 粘土ブロック少量。
47 にぶい橙色 ローム粒子多量。粘性・しまり強。
48 褐 色 ロームブロック少量。しまり強。
49 灰黄褐色 粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
50 暗灰黄色 粘土ブロック多量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
51 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土粒子少量。粘性・しまり弱。
53 褐 色 粘土ブロック少量，炭化粒子微量。 粘性・しまり強。
54 灰黄褐色 粘土粒子中量，炭化粒子少量。 粘性・しまり強。

B－B′ 土層解説

1 褐 色 ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性・しまり弱。
3 暗 褐 色 ロームブロック・粘土粒子少量。
4 暗 褐 色 粘土粒子少量，ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
5 褐 色 ローム粒子多量。粘性・しまり強。
6 明 褐 色 ローム粒子多片。
7 にぶい橙色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
8 灰黄褐色 粘土粒子・炭化粒子中量，ローム粒子少量。
9 灰黄褐色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
10 灰 褐 色 粘土粒子中量，焼土粒子微量。
11 暗 褐 色 ローム粒子・粘土粒子少量。
12 暗 褐 色 粘土粒子少量。
13 暗 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子微量。
14 暗オリーブ色 粘土ブロック中量，炭化粒子少量。 粘性・しまり強。
15 暗 褐 色 炭化粒子少量，粘土粒子微量。
16 灰 褐 色 粘土粒子少量，炭化粒子微量。
17 灰 褐 色 炭化粒子少量，粘土粒子微量。
18 にぶい黄褐色 粘土ブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
19 褐 灰 色 粘土ブロック中量，焼土ブロック・炭化粒子少量。粘性強。
20 にぶい褐色 粘土ブロック・炭化粒子少量。粘性強。
21 にぶい黄褐色 炭化粒子少量，粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
22 灰黄褐色 粘土ブロック多量，炭化粒子中量。粘性・しまり強。
23 灰オリーブ色 粘土ブロック多量。
24 灰 色 粘土ブロック中量，炭化粒子少量，ロームブロック微量。粘性・しまり強。
25 灰黄褐色 粘土ブロック微量。
26 褐 色 粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
27 黒 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量，炭化粒子微量。
28 黒 褐 色 粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
29 暗灰黄色 粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
30 褐 灰 色 炭化粒子中量，ロームブロック・粘土ブロック少量。
31 灰黄褐色 粘土ブロック少量，炭化物微量。粘性・しまり強。
32 褐 灰 色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
33 褐 色 粘土粒子中量，炭化物少量。粘性・しまり強。
34 黒 褐 色 炭化物・ローム粒子少量。粘性・しまり強。
35 黒 褐 色 赤色粒子微量。
36 暗 褐 色 ローム粒子中量。粘性・しまり強。
37 灰 色 ローム粒子・粘土粒子中量。粘性・しまり強。
38 にぶい橙色 粘土粒子多量。粘性・しまり強。
39 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性・しまり弱。
40 黒 褐 色 粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
41 暗 褐 色 粘土ブロック少量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
42 極暗褐色 炭化粒子少量，粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
43 褐 色 ローム粒子少量。粘性・しまり弱。
44 暗 褐 色 炭化粒子少量。
45 にぶい黄褐色 ロームブロック少量。
46 褐 灰 色 白色粘土ブロック微量。粘性・しまり弱。
47 暗 褐 色 粘土粒子少量，炭化粒子微量。 粘性・しまり強。
48 褐 色 粘土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
49 にぶい黄褐色 ローム粒子中量，粘土粒子微量。
50 暗 褐 色 ローム粒子少量。
51 灰 褐 色 粘土ブロック中量，炭化物微量。粘性・しまり強。
52 灰黄褐色 黄色粘土粒子中量，粘土ブロック・炭化粒子微量。
53 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性弱。
54 灰黄褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量。
55 褐 色 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子少量。



第99図　第13号堀・第２号土橋跡・第１号木橋跡・第41号墳実測図

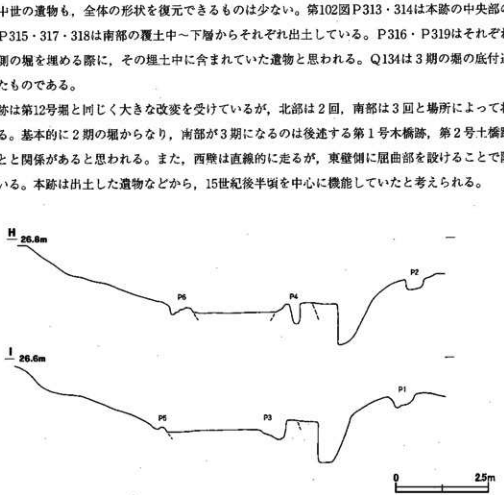


第100図　第13号堀・第２号土橋跡・第１号木橋跡実測図

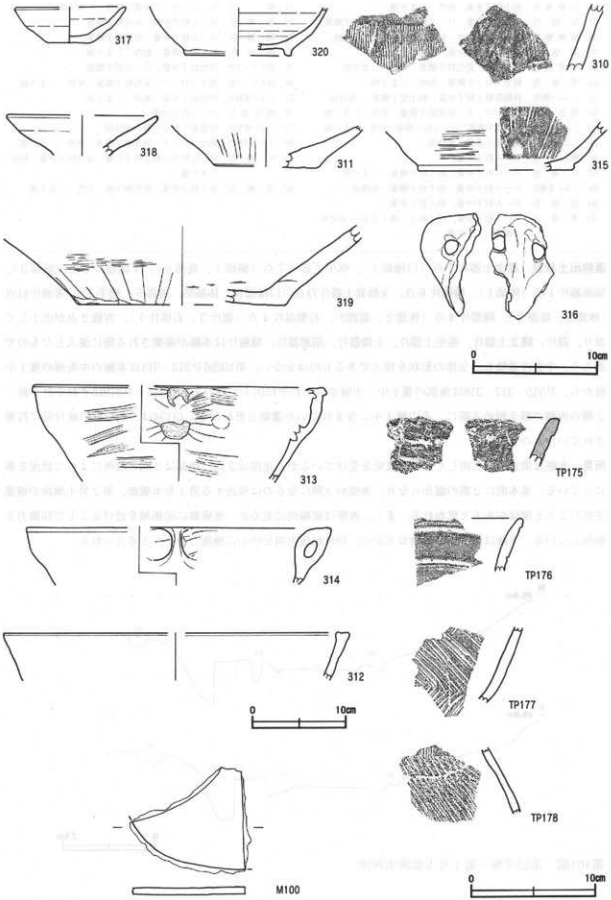
56　灰黄褐色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
57　灰　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子少量，炭化粒子微量。
58　灰黄褐色　ロームブロック・粘土ブロック微量。粘性強。
59　褐　灰　色　粘土ブロック少量。粘性・しまり強。
60　灰黄褐色　粘土粒子・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
61　暗　褐　色　粘土ブロック微量。粘性・しまり弱。
62　にぶい褐色　黄褐色粘土粒子中量，粘土粒子微量。粘性強。
63　暗灰黄色　粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
64　にぶい黄褐色　粘土粒子多量，ローム粒子微量。粘性・しまり強。
65　にぶい黄褐色　粘土粒子多量。粘性強。
66　褐　色　ローム粒子中量。
67　暗　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子微量。しまり弱。
68　にぶい黄褐色　ローム粒子中量，粘土粒子微量。粘性強。
69　暗　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子少量。
70　黒　褐　色　ローム粒子少量，粘土粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
71　褐　色　ロームブロック少量。粘性・しまり弱。
72　黒　褐　色　ローム粒子中量，粘土粒子微量。
73　暗　褐　色　ローム粒子中量，炭化粒子微量。
74　褐　灰　色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
75　暗オリーブ色　炭化粒子少量，ローム粒子微量。
76　暗オリーブ色　粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
77　にぶい黄褐色　炭化粒子少量。粘性・しまり強。
78　暗灰黄色　ローム粒子少量。
79　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子中量。粘性強。
80　オリーブ褐色　粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
81　灰　褐　色　ローム粒子・粘土粒子中量，炭化粒子少量。粘性・しまり強。
82　灰　褐　色　粘土粒子中量，炭化物少量。粘性・しまり強。

遺物出土状況　縄文土器片１点（口縁部１），弥生土器片７点（鉢部１，底部６），土師器片３点（底部３），須恵器片１点（体部１），埴輪片６点，土師質土器片71点（口縁部10，体部55，底部５，把手１），常滑片11点（体部８，底部３），陶器片４点（体部２，底部2），石製品片４点（剥片３，石塔片１），古銭２点が出土しており，剥片，縄文土器片，弥生土器片，土師器片，須恵器片，埴輪片は本跡が廃棄される際に混入したものであろう。中世の遺物も，全体の形状を復元できるものは少ない。第102図Ｐ313・314は本跡の中央部の覆土中層から，Ｐ315・317・318は南部の覆土中～下層からそれぞれ出土している。Ｐ316・Ｐ319はそれぞれ１期・２期の西側の堀を埋める際に，その埋土中に含まれていた遺物と思われる。Ｑ134は３期の堀の底付近に投棄されていたものである。

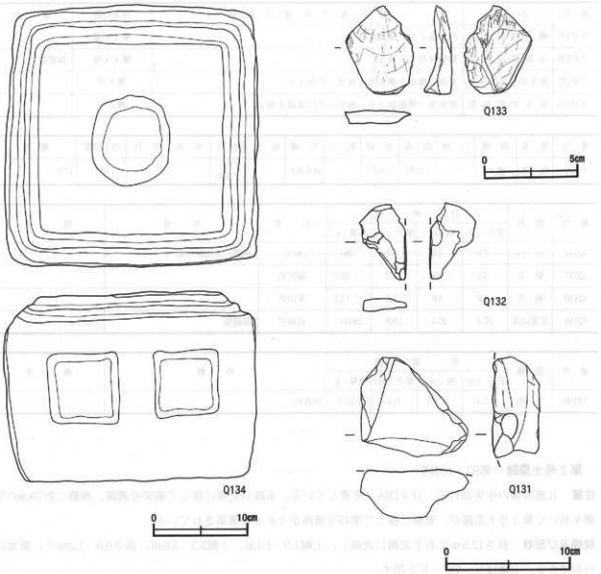
所見　本跡は第12号堀と同じく大きな改変を受けているが，北部は２回，南部は３回と場所によって状況を異にしている。基本的に２期の堀からなり，南部が３期になるのは後述する第１号木橋跡，第２号土橋跡が構築されたことと関係があると思われる。また，西壁は直線的に走るが，東壁側に屈曲部を設けることで防御力を強化している。本跡は出土した遺物などから，15世紀後半頃を中心に機能していたと考えられる。



第101図　第13号堀・第１号木橋跡実測図



第102図　第13号堀出土遺物実測図（1）



第103図　第13号堀出土遺物実測図（2）

第13号堀出土遺物観察表（第102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P310	埴輪	円筒	—	(5.2)	—	白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	普通	外面ハケ目，内面ナデ	覆土上層	5%
P311	土師器	壺	—	(3.4)	[8.3]	長石・石英・雲母	橙色	普通	外面ミガキ，内面剥離のため不明	表土	10%
P312	土師質土器	内耳鍋	[36.3]	(5.0)	—	石英・長石・赤色粒子・雲母	明赤褐色	普通	内外面ナデ	覆土中層	5%
P314	土師質土器	内耳鍋	[32.0]	(6.0)	—	雲母	灰白色	普通	内外面ナデ	覆土中層	5%
P313	土師質土器	内耳鍋	[31.0]	(10.1)	—	赤色粒子・雲母	外：黒褐色 内：明赤褐色	普通	内外面ナデ，内面一部指頭押捺	覆土中層	5%
P315	土師質土器	擂鉢	—	(3.8)	[12.2]	赤色粒子・雲母	明赤褐色	良	外面・底部ナデ，内面擂り目	覆土中層	10%
P316	土師質土器	外耳壺	—	—	—	石英・赤色粒子・雲母	明赤褐色	良	内外面ナデ	覆土中層	5%　把手カ
P317	土師質土器	かわらけ	[8.9]	2.9	[3.6]	白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ，底部不明	覆土中層	30%
P318	土師質土器	かわらけ	[12.0]	(3.1)	—	赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ	覆土下層	20%
P319	常滑	甕	—	(6.3)	[16.4]	砂粒	にぶい赤褐色	良	外面ナデ，内面ロクロナデ	覆土下層	25%　PL74

番号	時期	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP175	縄文時代早期	内外面ナデ。繊維含む。	覆土中層	
TP176	古墳時代後期	櫛描波状文を施文。	覆土上層	第恩期
TP177	弥生時代中期後半	外面に櫛描を縦杉状に施文。内面ナデ。	覆土中	
TP178	弥生時代後期	附加条一種附加2条。縦位に平行沈線を施文。	覆土中	

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P320	陶器	瓶カ	—	(3.8)	[8.4]	—	暗赤褐色	—	オリーブ黒色	—	—	表土	15%

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q131	石臼	(7.9)	(8.5)	(3.8)	(250)	砂岩	表面に炭化物付着	
Q132	砥石	(5.9)	(3.6)	1.0	(22.0)	凝灰岩		
Q133	剥片	4.7	3.6	1.5	17.1	安山岩		
Q134	宝筐印塔	27.4	26.4	19.8	28000	花崗岩	馬彼郎	PL79

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M100	不明	(5.4)	(5.9)	0.4	(55.5)	円板状	

第2号土塁跡（第93・104図）

位置　II郭南側の中央部付近，D4j3区に位置している。本跡の北側に接して第50号溝跡，西側に約70cmの空間をおいて第3号土塁跡が，東側に接して第45号溝跡がそれぞれ構築されている。

規模及び形状　長さ12.5mで若干北側に湾曲し，上幅1.0～1.1m，下幅3.3～3.6m，高さ0.6～1.2mで，断面は台形である。主軸はN－78°－Eを指す。

構築状況　本跡の盛土は5層からなり，6～9層はII郭の表土である。盛土はしまりが弱く，地山を掘り込んで基底部を補強する地業を行った痕跡は認められなかった。

A－A′ 土層解説
1 褐　色 ロームブロック微量。しまり弱。
2 黒 褐 色 炭化物微量。
3 暗 褐 色 ロームブロック微量。
4 黒 褐 色 ロームブロック微量。
5 極暗褐色 ロームブロック・炭化物微量。
6 暗 褐 色 ローム粒子微量。
7 暗 褐 色 ロームブロック微量。
8 黒 褐 色 ローム粒子微量。
9 黒 褐 色 ロームブロック微量。
10 暗 褐 色 ロームブロック少量。

遺物出土状況　本跡に伴うと思われる遺物は出土していない。

所見　当初長峰城跡の土塁と思われたが，土層の観察から，本跡の盛土は突き固められた跡や，基底部の地業等も認められないことから，城郭の土塁の可能性は低いと思われる。本跡の構築年代は明らかではないが，長峰城跡の破却後にII郭内部を区画するために設けられた施設と考えられる。

第３号土塁跡（第93・104図）

位置　Ⅱ郭の南側，Ｃ４g8区付近に位置し，Ⅱ郭西側縁辺部付近から中央部にかけて構築されている。本跡の北側に第50号溝跡，西側に第13号堀及び第43号墳，東側に70cmの空間をおいて第２号土塁跡が構築されている。

規模及び形状　長さ24.7mで若干北側に湾曲し，上幅0.6～１m，下幅3.0～4.3m，高さ0.6～1.1mで，断面は底辺の広い台形である。主軸はＮ－70°－Ｗを指す。

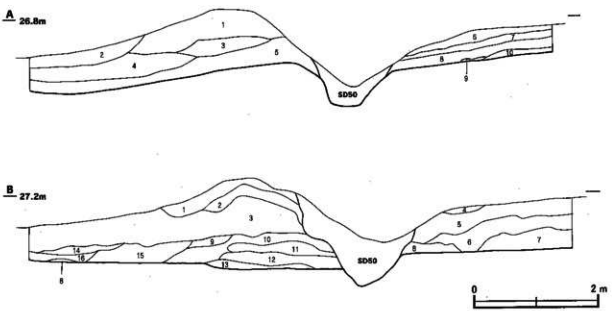
構築状況　本跡の構築上は12層からなり，４～７層はⅡ郭の表土及び包含層である。一部粘土を含み，しまりの強い土層も見られるが，総じてしまりの弱い土層が多く，叩き締められた形跡は見られない。また４～11層もしまりが弱く，突き固められた跡がないため基底部の地業の可能性は低いと思われる。

Ｂ－Ｂ′土層解説

1　褐　　色　ロームブロック微量。しまり弱。
2　黒　褐　色　ロームブロック微量。
3　暗暗褐色　ロームブロック少量，炭化物・焼土粒子微量。
4　黒　　色　ローム粒子微量。
5　暗　褐　色　ロームブロック微量。
6　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック。
7　褐　　色　ロームブロック微量。粘性強。
8　褐　　色　ロームブロック微量。
9　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
10　黒　褐　色　ロームブロック微量。粘性弱。
11　黒　褐　色　ロームブロック微量。
12　極暗褐色　ロームブロック微量。
13　暗　褐　色　ロームブロック少量。
14　褐　　色　粘土ブロック少量，炭化ブロック少量。
15　極暗褐色　ロームブロック・炭化物微量。
16　黒　褐　色　ロームブロック・炭化物微量。

遺物出土状況　本跡に伴うと思われる遺物は出土していない。

所見　当初長峰城跡の土塁と思われたが，土層の観察から，盛土や基底部の地業層に突き固められた痕跡が認められないことから，城郭の土塁の可能性は低いと思われる。本跡の構築年代は明らかではないが，長峰城跡の破却後にⅡ郭内部を区画するために設けられた施設と考えられる。

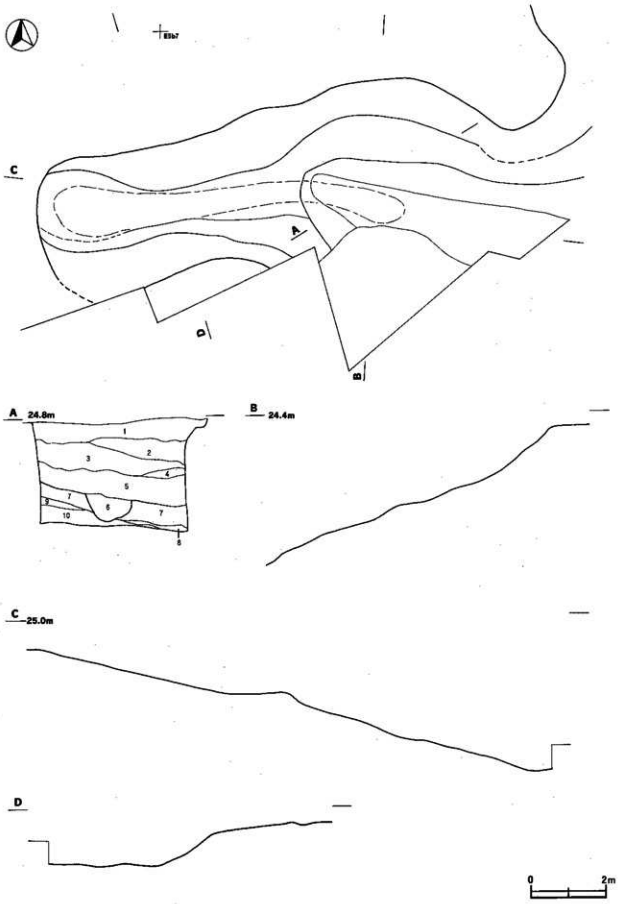


第104図　第２・３号土塁跡実測図

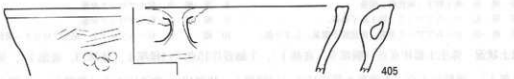
(4)　虎口跡

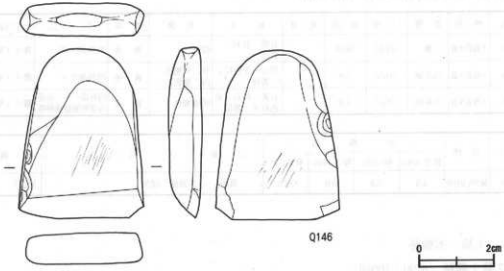
第10号虎口跡（第105図）

位置　Ⅱの郭南東部コーナー付近，Ｅ５b7区に位置している。本跡の西側に第１号道路跡が続き，東側に第12号堀，第８・９号虎口跡が構築されている。



第105図　第10号虎口跡実測図





第106図　第10号虎口跡出土遺物実測図

規模及び形状　長さ約13m，上幅2.2～3.9m，下幅0.6～1.2mで，南から西に向かって若干L字状に曲がる。本跡は二段にわたって掘り込み，北壁及び底面に段差を形成している。底面は中央部付近で深さ22cmほどの段差を持つが，西から東に向かって緩やかに傾斜し，上端部と下端部の比高差は3.28mである。北壁は底面の深さに比例してその高さを増し，途中段差を設けるものの緩やかに立ち上がる。南壁は西側で確認され，壁高は地山が東に向かって傾斜しているため低く，緩やかに立ち上がる。本跡はⅡ郭縁辺部を掘り込んでおり，その開口部の幅は約7mである。底面は踏み固められて硬化している。主軸はN－78°－Eを指す。

構築状況　本跡は西側の上端部付近でⅡ郭の南側縁辺部の地業層を掘り込み，東側は地山を掘り込んで構築されている。本跡の下層からは，構築を目的とした掘り方や地業は確認されていない。構築は2つの過程を経ており，最初に地山を整形したのちに7～10層を積み上げ，その後幅1.2m，深さ74cmほどで，断面はU字形の溝を掘り込んで通路としている。

土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量。粘性弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。粘性弱。
3　暗　褐　色　焼土粒子・炭化粒子微量。
4　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子微量。
5　黒　褐　色　ロームブロック少量，炭化粒子微量。しまり強。
6　黒　褐　色　ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
7　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック・炭化物微量。
8　黒　褐　色　粘土ブロック少量。
9　暗　褐　色　粘土ブロック少量。
10　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量。

遺物出土状況　弥生土器片6点（胴部5，底部1），土師器片15点（口縁部1，体部13，底部1），須恵器片1点（体部1），埴輪片1点，土師質土器片15点（口縁部5，体部10），常滑片1点（体部1），石器1点（扁平片刃石斧1）が出土し，弥生土器片，土師器片，須恵器片，埴輪片，石器は本跡が廃絶する際に混入したものであろう。第106図P403は覆土下層から，P404は西側の覆土下層から，P405は覆土上層からそれぞれ出土し，全体の形状がわかる遺物がないことから，本跡の廃棄後に投棄されたものと思われる。

所見　本跡はⅡ郭を東西に走る第1号道路跡の延長上に構築され，東側に第8・9号虎口跡，さらには第1号土橋跡が位置していることから，Ⅱ郭からⅠ郭及び2号腰曲輪への出入り口と思われる。本跡は，東側の地山を若干南に張り出すことでL字状に通路を曲げ，南側からⅡ郭内部を直接見通すことができない構造となっており，ある程度防御を意識しているものの，第1号虎口跡にみられたような強固な防備を備えていない。本跡は出土した遺物や第1号道路跡との関係などから，15世紀後半頃機能していたと思われる。

第10号虎口跡出土遺物観察表（第106図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P403	土師質土器	甕	[21.6]	(16.0)	—	石英・長石・雲母	橙色	普通	内外面ナデ	覆土下層	15%
P404	土師質土器	内耳鍋	[34.8]	(7.8)	—	長石・赤色粒子・雲母	外：灰褐色 内：橙色	普通	内外面ナデ	覆土下層	5%
P405	土師質土器	内耳鍋	[36.4]	(7.0)	—	石英・長石・赤色粒子・雲母	明赤褐色	普通	内外面ナデ，耳接合部外面指頭押圧	覆土上層	5%

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q146	扁平片刃石斧	4.5	3.3	0.9	22.4	頁岩	刃部一部欠	PL77

(5)　土橋・木橋跡

第2号土橋跡（第99・100図）

位置及び確認状況　本跡は第13号堀の南部，E4c8区付近に位置し，Ⅳ郭とⅡ郭を結ぶ。本跡は第1号木橋

跡の調査中に硬化面を検出したため，トレンチを設定したところ土橋跡であることが判明した。

重複関係　本跡は第13号堀を埋め立てており，上部に第１号木橋跡が構築されている。

規模及び形状　硬化面は第13号堀の地山掘り残し部の西側に長辺約３ｍ，短辺約2.3ｍの台形状に広がる。トレンチを地山掘り残し部の東側に設定し，硬化面の広がりと下部構造の状況を観察し，明瞭な硬化面は確認されなかったものの，土盛りを確認したため土橋跡と判明した。現存している規模は上幅約２ｍ前後，下幅3.1ｍ，高さ約１ｍ，断面は半円形で，主軸はＮ－83°－Ｅを指すと考えられる。

構築状況　３のラインまではロームブロック・粘土ブロックを含む土層を水平に積み上げ，粘性・しまりの強いものが多い。２のラインより下層はロームを含まず，それより上の土層と様相を異にしている。２つの段階を経ていることは明らかだが，時期的なものか工程によるものかは確認できなかった。土橋跡は３のラインの上面を基底部とし，主として粘土ブロックを含む褐色土と暗褐色土を半円形に６のラインまで積み上げている。途中４・５に土層堆積上の境界線を認められるが，これらは工程上の境界と思われる。構築土は粘性・しまりの強いものとそうでないものが存在し，版築状に積み上げた形跡は認められないため強度の上からは問題が残る。１～５層は第13号堀の覆土である。

Ｃ－Ｃ′ 土層解説

1　黒　褐　色　ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
3　灰　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
4　褐　灰　色　ローム粒子中量，粘土ブロック少量。粘性・しまり弱。
5　にぶい黄褐色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
6　灰　褐　色　粘土ブロック少量，炭化物微量。
7　暗　褐　色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
8　灰　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック・炭化物微量。粘性・しまり強。
9　にぶい褐色　砂質粘土粒子多量，炭化物微量。
10　にぶい褐色　粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
11　褐　色　ローム粒子少量。粘性・しまり強。
12　灰　褐　色　粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
13　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
14　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
15　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。
16　褐　色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。
17　暗　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
18　暗　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。
19　褐　色　粘土ブロック少量，ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
20　灰　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
21　灰　褐　色　粘土粒子多量，炭化粒子微量。
22　灰黄褐色　粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
23　褐　灰　色　粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
24　灰　褐　色　粘土粒子中量，ローム粒子・炭化粒子少量。
25　灰　褐　色　粘土ブロック中量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
26　灰　褐　色　粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
27　灰黄褐色　粘土粒子少量，焼土粒子微量。粘性・しまり強。
28　褐　灰　色　粘土ブロック少量，ローム粒子微量。粘性・しまり強。
29　暗　褐　色　ローム粒子・粘土粒子少量，炭化粒子微量。
30　黒　褐　色　ローム粒子・焼土粒子少量，炭化粒子微量。
31　灰黄褐色　粘土粒子少量，炭化粒子微量。粘性・しまり強。
32　褐　　色　粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり強。
33　褐　灰　色　砂質粘土粒子多量。
34　灰　褐　色　砂質粘土粒子多量。
35　灰　　色　砂質粘土粒子多量，炭化粒子少量。粘性強。
36　灰　　色　粘土ブロック・炭化粒子少量。粘性・しまり強。
37　灰オリーブ色　砂質粘土粒子多量。粘性・しまり強。
38　にぶい褐色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
39　暗オリーブ色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
40　黄　灰　色　砂質粘土粒子多量。粘性・しまり強。
41　暗　褐　色　ロームブロック微量。粘性・しまり弱。
42　暗　褐　色　粘土ブロック少量・ローム粒子中量。粘性・しまり弱。
43　灰　褐　色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
44　灰　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。炭化粒子微量。
45　極暗褐色　粘土ブロック微量。
46　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
47　褐　　色　ロームブロック多量，粘土ブロック微量。粘性・しまり強。
48　褐　灰　色　粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
49　褐　灰　色　粘土粒子中量。粘性・しまり強。
50　灰黄褐色　ロームブロック・粘土ブロック中量。粘性・しまり強。
51　褐　灰　色　粘土粒子少量。
52　灰　褐　色　粘土ブロック・炭化物少量。粘性・しまり強。
53　暗灰黄色　粘土ブロック少量。
54　灰　黄　色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。

遺物出土状況　本跡に伴うと思われる遺物は出土していない。

所見　本跡は第１号土橋跡と比較して側面に補強の盛土がなく，構築土自体も版築状に積み上げた形跡が見られないために構造上弱いと思われる。土橋跡の高さが低いこともその一因であろう。また第１号木橋跡の直下

に構築されていることから，木橋跡の基礎部分の可能性も想定される。本跡は，第１号木橋跡などとの関係から，15世紀を中心とする時期に機能していたと考えられる。

第１号木橋跡（第99・100・101図）

位置及び確認状況　本跡は第13号堀の南部，Ｅ４c8区付近に位置し，Ⅳ郭とⅡ郭を結ぶ。本跡はⅡ郭で確認された第１号道路跡の延長線を精査したところ，Ⅱ郭の西側縁辺部，第13号堀西壁及び第13号堀の地山掘り残し部に２本１組の柱穴が確認された。Ⅳ郭の東側縁辺部にも柱穴を想定して精査したが，確認されなかった。本跡の直下に第２号土橋跡，Ⅱ郭の南側に第41号墳，またⅡ郭の延長上に第１号道路跡が構築されている。

規模及び形状　柱穴は６か所確認され，２か所ずつ対になる。Ｐ１・２は長径102～138cm，短径87～108cmの楕円形で，深さは32～58cmである。Ｐ１は二段に掘り込まれ，Ｐ２は長径方向と平行してその東側に長さ98cm，幅56cm，深さ45cmほど掘り込まれている。Ｐ３・４は長径80～120cm，短径60～80cmの楕円形で，深さ90～94cmで，長径方向と直行してその西側に，長さ60～70cm，幅48～56cm，深さ74～83cmほど掘り込まれている。Ｐ５・６は長径40～62cm，短径34～42cmの楕円形で，深さは36～44cmである。長径方向と平行してその東側に長さ18～50cm，幅20～34cm，深さ11～17cmほど掘り込まれている。柱痕は５ヶ所で確認され，２回程度の掛け替えが認められる。Ｐ１・２，Ｐ３・４，Ｐ５・６間の距離はそれぞれ6.3m，6.6mであり，対となるピットの芯々間の距離は1.9～２mで，主軸はＮ－83°－Ｅを指す。

土層解説（D－D′，E－E′，F－F′）

1　にぶい橙色　粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
2　灰　褐　色　粘土ブロック少量。粘性強。
3　褐　　色　粘土ブロック少量。
4　暗　褐　色　粘土ブロック少量。
5　褐　　色　ロームブロック中量，粘土ブロック少量。
6　暗　褐　色　粘土ブロック少量。粘性強。
7　明　褐　色　粘土ブロック中量。粘性強。
8　にぶい褐色　粘土ブロック中量。しまり強。
9　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
10　明　褐　色　粘土ブロック少量。
11　にぶい橙色　粘土ブロック多量。
12　褐　　色　粘土ブロック多量。粘性・しまり強。
13　にぶい褐色　粘土ブロック多量。粘性強。
14　暗　褐　色　粘土ブロック少量。
15　にぶい褐色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
16　オリーブ褐色　粘土粒子多量。粘性・しまり強。
17　褐　　色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。
18　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
19　にぶい褐色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
20　褐　　色　粘土粒子中量。粘性強。
21　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量。粘性・しまり弱。
22　にぶい褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。
23　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
24　にぶい褐色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。
25　にぶい褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。しまり強。
26　褐　　色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。
27　褐　　色　粘土ブロック多量。
28　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性強。
29　にぶい褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。
30　褐　　色　粘土ブロック少量。粘性強，しまり弱。
31　暗　褐　色　粘土ブロック・炭化粒子微量。粘性・しまり弱。
32　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性強。
33　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
34　暗　褐　色　粘土ブロック微量。しまり弱。
35　明　褐　色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。
36　にぶい褐色　粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性強。
37　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
38　暗　褐　色　粘土ブロック少量。粘性強・しまり弱。

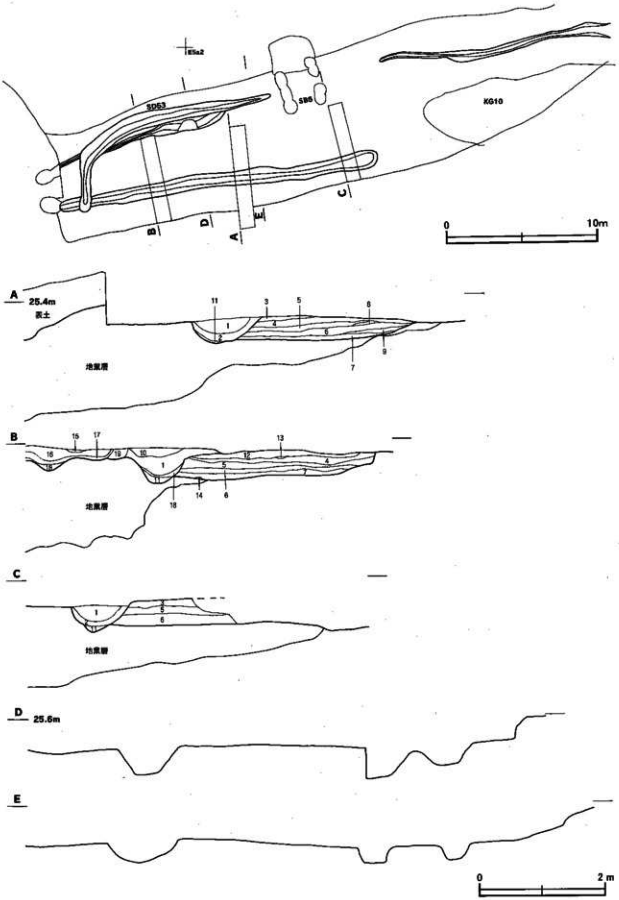
遺物出土状況　本跡に伴うと思われる遺物は出土していない。

所見　本跡は，第13号堀を横断するためにかけられた木橋の跡で，Ⅱ郭を縦断する第１号道路跡と主軸がほぼ共通することから，同一企画により構築されたと考えられる。Ⅳ郭から本跡を渡るには，第41・43号墳の監視を受けることになる。本跡は第１号道路跡の出土遺物などから，15世紀後半には機能していたものと思われる。

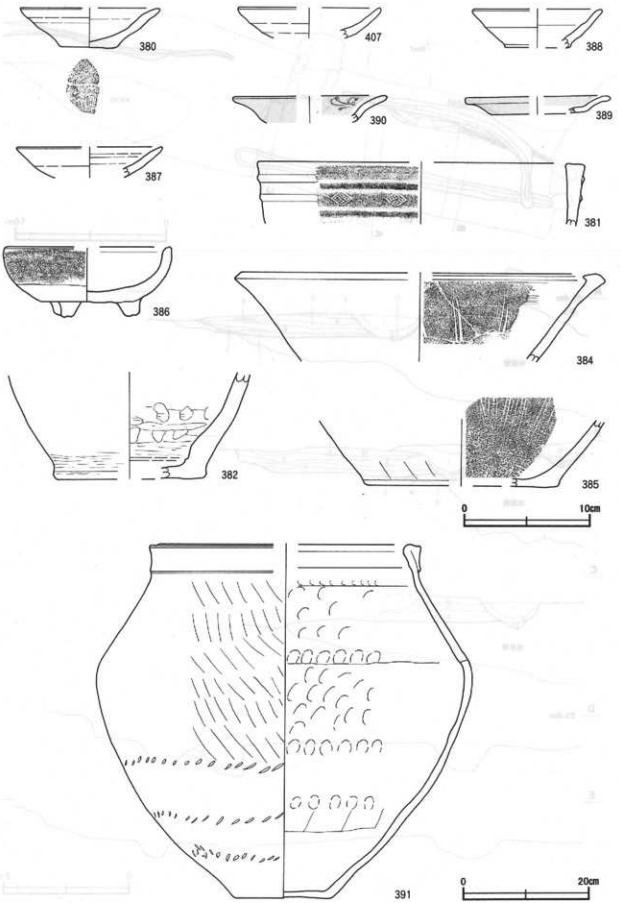
(6)　道路跡

第１号道路跡（第107図）

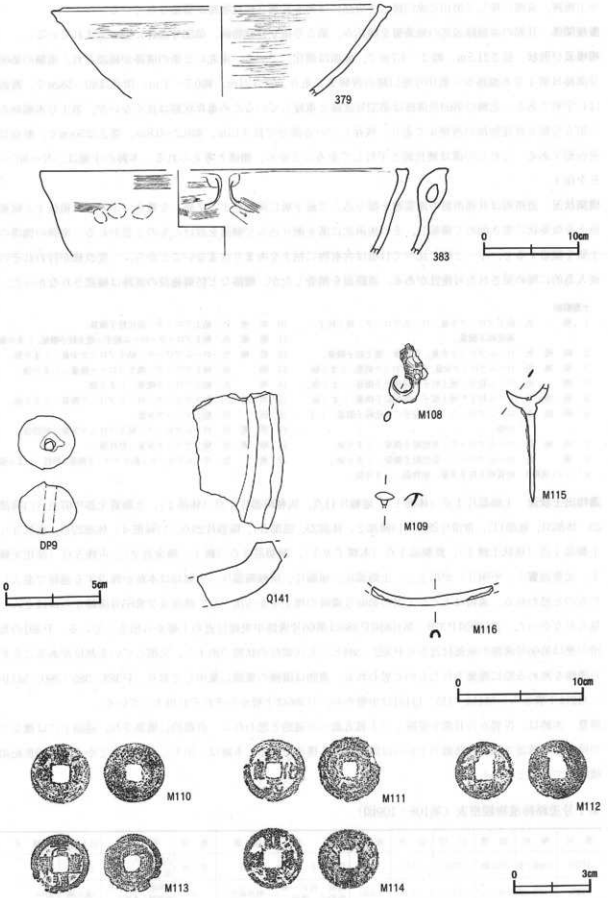
位置　Ⅱ郭の南側縁辺部，Ｅ５c2区付近に位置している。西側に接して第13号堀を渡る第１号木橋跡及び第２



第107図　第１号道路跡実測図



第108図　第１号道路跡出土遺物実測図（１）



第109図　第１号道路跡出土遺物実測図（2）

号土橋跡，東側に接して第10号虎口跡，中央部には第５号掘立柱建物跡が構築されている。

重複関係　Ⅱ郭の南側縁辺部の地業層を堀込み，第５号掘立柱建物跡，第53号溝跡に掘り込まれている。

規模及び形状　長さ21.5m，幅２～4.7mで，底面は硬化している。南北に２条の溝跡が確認され，南側の第66号溝跡は第１号木橋跡から第10号虎口跡の西側まで走り，長さ21m，幅0.7～１m，深さは40～58cmで，断面はU字形である。北側の第69号溝跡は第53号溝跡と重複しているため遺存状態は良くないが，第１号木橋跡から第５号掘立柱建物跡の西側まで走り，残存している部分で長さ15m，幅0.2～0.8m，深さは50cmで，断面は逆台形である。これらの溝は硬化面と平行して走ることから，側溝と考えられる。本跡の主軸は，N―80°―Eを指す。

構築状況　道路面はⅡ郭南側の地業層を掘り込んで最下層に灰褐色土（７層）を敷き，その上に褐色土と暗褐色土を版築状に突き固めて構築し，その後南北に溝を掘り込んで側溝を設けたものと思われる。南側の側溝の土層を観察すると，１・２層と比べて11層は含有物に粘土をあまり含まないことから，一度改修が行われその後人為的に埋め戻された可能性がある。道路面を精査したが，柵跡など防御施設の痕跡は確認されなかった。

土層解説

1　褐　色　粘土ブロック少量，ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。
2　暗 褐 色　ローム ブロック少量，炭化物・焼土粒子微量。
3　暗 褐 色　ローム ブロック少量，焼土ブロック微量。しまり強。
4　褐　色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり強。
5　暗 褐 色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり強。
6　暗 褐 色　ローム ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量。しまり強。
7　灰 褐 色　ローム ブロック・炭化粒子微量。しまり強。
8　褐　色　ローム ブロック・炭化粒子微量。しまり強。
9　にぶい黄褐色　砂質粘土粒子多量。粘性弱，しまり強。
10　暗 褐 色　粘土ブロック・炭化粒子微量。
11　暗 褐 色　粘土ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量。しまり強。
12　暗 褐 色　ローム ブロック・粘土ブロック少量。しまり強。
13　褐　色　粘土ブロック・焼土ブロック微量。しまり強。
14　褐　色　粘土ブロック微量。しまり強。
15　黒 褐 色　粘土ブロック・ローム ブロック微量。しまり強。
16　褐　色　粘土ブロック少量。
17　黒 褐 色　ローム ブロック・粘土ブロック少量。粘性強。
18　暗 褐 色　軟ブロック少量。粘性強。
19　褐　色　ローム ブロック・粘土ブロック微量。粘性・しまり強。

遺物出土状況　土師器片１点（体部１），埴輪片11点，灰釉陶器片１点（体部１），土師質土器片67点（口縁部25，体部31，底部11），常滑片28点（口縁部２，体部23，底部３），陶器片29点（口縁部４，体部22点，底部３），土製品１点（球状土錘１），鉄製品１点（木螺子カ１），銅製品３点（銭１，鈴金具２），古銭５点（淳化元寶１，元豊通寶１，不明３）が出土し，土師器片，埴輪片，灰釉陶器片，土製品は本跡が埋没する過程で混入したものと思われる。遺物は主として南の第66号溝跡の埋土中から出土し，路面及び第65号溝跡からはほとんど見られなかった。第109図Ｐ379・第108図Ｐ380は第66号溝跡中央部付近の上層から出土している。Ｐ391の常滑の甕は第66号溝跡の底部付近からＰ382・384とともに破片の状態で出土し，欠損している部位があることから溝跡を埋める際に廃棄されたものと思われる。遺物は溝跡の東端に集中しており，Ｐ383・385・390，M110～112は下層から，M114・115，Q141は中層から，Ｐ386は上層からそれぞれ出土している。

所見　本跡は，Ⅳ郭からⅡ郭を縦断してⅠ郭方面への通路と思われる。直線的に構築され，通路上には橋などの障害物は確認されず，防御の上からは問題の残る構造である。本跡は，出土した遺物などから15～16世紀頃機能していたと考えられる。

第１号道路跡遺物観察表（第108・109図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P379	土師質土器	内耳鍋	[35.6]	(9.5)	—	白色粒子・雲母	橙色	普通	内外ナデ，Ⅱ縁部ナデ	溝上層	15%
P380	土師質土器	かわらけ	[11.0]	3.1	[4.6]	石英・長石・赤色粒子・雲母	明赤褐色	良	内外面ロクロナデ，底部糸切り	溝上層	30%
P381	土師質土器	鉢	[34.4]	(6.6)	—	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	灰色	良	内外面ナデ，外面に四つ目変のスタンプ文	溝上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法	出土位置	備考
P382	土師質土器	甕	—	(8.5)	[11.6]	石英・白色粒子	褐色	良	外面縦方向ナデ後横ナデ，内面横ナデ，当て具痕あり	溝底部	20% PL74
P383	土師質土器	内耳鍋	[38.6]	(9.0)	—	雲母	黒褐色	普通	内外面ナデ，内耳接合部に指頭押捺及びヘラ削り	溝下層	5%
P384	土師質土器	擂鉢	[28.4]	(7.0)	—	石英・赤色粒子・雲母	内外面橙色	良	外面ナデ，内面擂り目	溝底部	5%
P385	土師質土器	擂鉢	—	(5.3)	[15.3]	石英・赤色粒子・雲母	外：にぶい褐色 内：黒褐色	普通	外面ヘラナデ，内面擂り目，底部ナデ	溝下層	10%
P386	土師質土器	香炉	[12.8]	5.5	[7.6]	石英・長石・赤色粒子・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部ナデ，外面体部下端・底部ヘラ削り・花形のスタンプ文	溝上層	55% PL74
P387	土師質土器	かわらけ	[11.6]	(2.4)	—	赤色粒子・雲母	橙色	良	内外面ロクロナデ	溝上層	10%
P388	土師質土器	かわらけ	[10.0]	3.0	[5.0]	赤色粒子・雲母	灰黄褐色	普通	内外面ロクロナデ，底部不明	溝中層	15%
P391	常滑	甕	[40.5]	55.8	16.0	石英・長石	暗赤褐色	良	外面ナデ，内面ナデ・当て具痕有り	溝底部	65% PL74
P407	土師質土器	かわらけ	[11.1]	(2.3)	—	石英・白色粒子・赤色粒子・雲母	橙色	普通	内外面ロクロナデ	溝覆土中	30%

番号	器質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	絵付	釉色	産地	年代	出土位置	備考
P389	陶器	小皿	[11.0]	1.4	[7.4]	—	灰白色	—	浅黄色	—	中世カ	溝中層	10% PL74
P390	青磁	段皿	[12.0]	(2.1)	—	—	灰オリーブ色	—	透明	同安窯カ	中世	溝下層	10% PL74

番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		径(cm)	高さ(cm)	孔径(cm)	重量(g)			
DP9	球状土錘	3.0	2.7	0.5	16.3	上裂	一方向から穿孔	

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q141	石臼	(10.7)	(7.3)	(5.1)	306	安山岩	下臼カ	

番号	器種	計測値				特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
M108	木製子	3.1	20	0.5	3.1	木質付着，木ネジカ	
M109	鋲	0.7	1.1	1.1	0.4	金金	
M115	飾金具	0.6	(2.2)	0.4	2.9		
M116	不明	(6.5)	0.5	0.4	2.7	飾金具カ	

番号	銭名	計測値				材質	初鋳・鋳造年		特徴	備考
		銭径(cm)	銭孔幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		年号	西暦		
M110	不明	2.41	0.7×0.7	1.2	2.3	銅	—	—	鋳上がり不良	PL80
M111	淳化元寶	2.53	0.6×0.6	1.4	3.6	銅	淳化元年	990	欠け	PL80
M112	不明	2.34	0.7×0.7	1.2	2.0	銅	—	—	鋳上がり不良	
M113	元豊通寶	2.33	0.6×0.6	1.1	1.9	銅	元豊元年	1078	欠け	
M114	不明	2.44	0.7×0.7	1.5	1.0	銅	—	—	鋳上がり不良・銭名不明	

(7) 土壇・塚

第41号墳（第99・110図）

位置 Ⅱ郭南西部のコーナー，E 4 e0区付近に位置している。本跡は，長峰の集落から南に下総台地を望み，

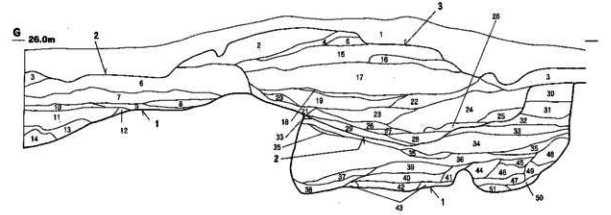
東に2号腰曲輪，第6・7号虎口跡を見下ろし，北に第1号道路跡，北西に第1号木橋跡，第2号土橋跡が構築されている。

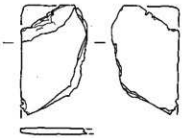
規模と形状　調査前の状況では，長径12m，短径4mの楕円形で，高さ0.5mの塚状を呈している。主軸はN－36°－Eを指す。

構築状況　本跡の主軸に沿ってトレンチを設定したが，東から南にかけては崩落の危険があるため，北西方向を中心に調査を行った。当初古墳と想定していたが，周溝その他の施設は確認されなかった。構築土は51層からなり，最初に幅3.2m，幅1.7m，深さ1.2mの長方形の掘り込みと隣接して長径1.9m，短径1.5m，深さ1.6mの長方形の掘り込みを設けている。それぞれの主軸は直交し，底面はほぼ同じレベルで，2号腰曲輪の方向に2段にわたって掘り込まれている。その後，2のラインまで埋め戻し，幅約4.6m，深さ1.2mで，断面が浅い皿状の施設を構築している。2のライン上には26～28層の粘土を多量に含む土層が堆積し，一時この面が底面であったと思われる。最終的に3のラインまで積み上げ，塚状の遺構を構築している。1～3のラインは，工程上の土層境界というより，時期的なものと思われる。

G－G′ 土層解説

1　黒　褐　色　ローム粒子微量。粘性・しまり弱。
2　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック中量。粘性・しまり弱。
3　暗　褐　色　ローム粒子少量。粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
4　褐　　色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量。粘性・しまり弱。
5　暗　褐　色　ロームブロック・粘土粒子少量。
6　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
7　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック多量。粘性弱。
8　褐　　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性弱。
9　黒　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性弱。
10　暗　褐　色　ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性弱。
11　にぶい褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック少量。粘性弱。
12　黒　褐　色　粘土ブロック微量。粘性弱。
13　黒　褐　色　ロームブロック少量，粘土ブロック微量。しまり弱。
14　にぶい褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック微量。
15　暗　褐　色　ロームブロック中量，粘土ブロック微量。粘性・しまり弱。
16　にぶい黄褐色　粘土ブロック多量，ロームブロック微量。





Q85　0　5cm　　0　2m

第110図　第41号墳・出土遺物実測図

17 暗 褐 色 ロームブロック中量，粘土ブロック少量。粘性弱。
18 にぶい褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性弱。
19 暗 褐 色 ロームブロック・粘土ブロック少量。粘性弱。
20 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。
21 褐 色 ロームブロック中量，粘土粒子少量。粘性弱。
22 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。粘性弱。
23 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。粘性弱。
24 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
25 褐 色 ロームブロック中量。粘性弱。
26 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量。粘性弱。
27 にぶい褐色 粘土ブロック中量，ロームブロック微量。
28 にぶい橙色 粘土ブロック多量，ロームブロック微量。
29 褐 色 粘土ブロック中量，ロームブロック少量。
30 黒 褐 色 ロームブロック少量。
31 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土ブロック微量。
32 黒 褐 色 ロームブロック少量。粘性・しまり弱。
33 にぶい褐色 粘土ブロック多量。ロームブロック微量。
34 暗 褐 色 ロームブロック少量，粘土粒子微量。粘性・しまり弱。
35 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量。ロームブロック微量。
36 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
37 褐 色 ロームブロック微量。粘性弱。
38 暗 褐 色 ロームブロック少量。
39 褐 色 ロームブロック中量。
40 黒 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
41 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
42 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
43 褐 色 ロームブロック中量。粘性弱。
44 褐 色 ロームブロック少量。
45 黒 褐 色 ロームブロック微量。
46 褐 色 ロームブロック中量。
47 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
48 暗 褐 色 ロームブロック微量。粘性弱。
49 黒 褐 色 ローム粒子微量。粘性弱。
50 暗 褐 色 ロームブロック少量。粘性弱。
51 黒 褐 色 ロームブロック微量。粘性弱。

遺物出土状況 弥生土器片3点（口縁部1，胴部1，底部1），土師器片22点（口縁部2，体部20），常滑片1点（体部1），石製品片1点（硯片カ1）が出土し，これらの遺物は小片が多く，盛土に混入していたものと思われる。第110図Q85は硯片と思われ，覆土中から出土している。

所見 本跡の下層からは，隣接する長方形及び楕円形の掘り込みが確認された。これらは2号腰曲輪に向かって2段に掘り込まれていることから，Ⅱ郭側で第6・7号虎口跡に対応する虎口の可能性がある。その後，これらを埋めて構築された施設も同様の性格を持つものと推定される。最終的に塚状の遺構が構築されたが，第2号腰曲輪との連絡よりも第1号木橋跡及び第2号土橋跡の防備を優先した結果と思われる。本跡の時期は明らかではないが，隣接する第1号木橋跡と同じ時期には機能していたものと思われる。

第41号墳出土遺物観察表（第110図）

番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
Q85	硯片カ	(8.6)	(5.3)	0.4	(32.8)	粘板岩	節理に沿って剥離している。	

(8) 溝跡

第45号溝跡（第94・111図）

位置 Ⅱ郭の中央部，D5i5区付近に位置し，中央部から東側縁辺部にかけて構築されている。本跡の西側に第2号土塁跡，第50号溝跡，東側に第12号堀が構築されている。

規模及び形状 長さ25.5m，上幅0.6～1.8m，下幅0.3～0.4m，深さ0.52～0.80m，断面は逆台形を呈し，D5i4区付近でL字状に屈曲する。主軸はN－80°－Wを指し，D5i4区付近以西ではN－10°－Eを指す。

覆土 3層からなる。含有物を均等に含むことから，自然堆積と考えられる。

土層解説
1 黒 褐 色 ロームブロック微量。
2 暗 褐 色 ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量。しまり弱。
3 褐 色 ロームブロック少量。

遺物出土状況 縄文土器片1点（胴部1），弥生土器片1点（胴部1），土師器片36点（口縁部1，体部35），土師質土器片73点（体部73），陶器片145点（口縁部73，体部40，底部32），古銭1点（二銭硬貨1），石製品片1